国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和60年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001213

昭和60年度

国立国語研究所年報

—37—

国立国語研究所

1986

刊行のことば

ここに『国立国語研究所年報—37—』を刊行します。本書は，昭和60年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものです。

本年度は，刊行物6点を刊行しました。

『研究報告集(7)』(報告85)

『社会変化と敬語行動の標準』(報告86)

『中学校教科書の語彙調査』(報告87)

『日独仏西基本語彙対照表』(報告88)

『国定読本用語総覧1』(国語辞典編集資料—1)

『語彙の研究と教育(下)』(日本語教育指導参考書13)

『国語年鑑』(昭和60年版)

『昭和59年度国立国語研究所年報(36)』

当研究所の研究及び事業を進めるに当たっては，例年のように地方研究員をはじめ，各種委員会の委員，各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得ています。また，調査について，各地の都道府県及び市町村教育委員会，学校，幼稚園，図書館等の御配慮を仰いでおります。その他，長年にわたって当研究所に寄せられた大方の御厚意に深く感謝いたしますとともに，今後とも今までと同様の御支援が得られるよう切にお願いいたします。

昭和61年8月

国立国語研究所長

野　元　菊　雄

目　次

刊行のことば
昭和60年度調査研究のあらまし …… 1
昭和60年度刊行物等の概要 …… 12
現代語文法の調査・研究 …… 18
現代語彙の概観的調査 …… 20
現代敬語行動の研究 …… 22
所属集団の差異による言語行動の比較研究 …… 24
言語行動様式の分析のための基礎的研究 …… 25
図形・文字の視覚情報処理過程及び読書過程に関する研究 …… 26
動的人工口蓋による発音過程に関する研究 …… 28
文法的特徴の全国的地域差に関する研究 …… 30
方言研究法に関する基礎的研究 …… 45
明治時代における漢語の研究 …… 48
現代語彙の源流に関する研究 …… 53
児童・生徒の言語習得に関する調査研究 …… 58
言語計量調査―語彙調査自動化のための基礎的研究― …… 65
現代の文字・表記に関する研究 …… 69
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 …… 71
日本語の対照言語学的研究 …… 78
日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究 …… 80
日本語教育の内容と方法についての調査研究 …… 82
日英対照による日本語の発話行為の研究 …… 84
日本語とインドネシア語との対照言語学的研究 …… 85
日本語と中国語との対照言語学的研究 …… 88
日本語教育のための照応現象に関する比較・対照的研究 …… 90

日本語教育研修の内容と方法についての調査研究 …… 91
国内の日本語教育機関におけるテストに関する基礎的調査 …… 93
日本語教育教材開発のための調査研究 …… 95
国語及び国語問題に関する情報の収集・整理 …… 97
文部省科学研究費補助金による研究 ……105
日本語教育研修の実施 ……128
日本語教育に関する情報資料の収集・提供 ……139
日本語教育教材及び教授資料の作成 ……142
国語辞典編集に関する準備調査 ……146
母語別日本語学習辞典の編集 ……156
図書の収集と整理 ……160
庶務報告 ……161

昭和60年度調査研究のあらまし

研究所の機構は次のとおりである（61年3月31日現在）。

- 所長
  - 評議員会
  - 庶務部
    - 庶務課
    - 会計課
    - 図書館
  - 言語体系研究部
    国語の体系に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      現代語の文法体系に関する調査研究
    - 第二研究室
      現代語の語彙体系に関する調査研究
  - 言語行動研究部
    国民の言語使用に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      現代語の表現及びその伝達効果に関する調査研究
    - 第二研究室
      社会生活における言語使用に関する調査研究
    - 第三研究室
      音声及び文字に関する実験的研究
  - 言語変化研究部
    国語の地域的，時代的変化に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      方言に関する調査研究
    - 第二研究室
      近代語に関する調査研究
    - 文献調査室
      国語及び国語問題に関する情報の収集・整理
  - 言語教育研究部
    国民に対する国語の教育に関する科学的調査研究
    - 第一研究室
      言語能力に関する調査研究
  - 言語計量研究部
    国語及び国民の言語生活に関する計量的調査研究
    - 第一研究室
      語彙に関する計量的調査研究
    - 第二研究室
      文字・表記に関する計量的調査研究
    - 第三研究室
      言語の電子計算機処理及びそのプログラムの開発に関する調査研究
  - 日本語教育センター
    外国人に対する日本語教育に関する基礎的実際的調査研究及びこれに基づく研修，教材作成等の指導普及に関する業務
    - 第一研究室
      日本語教育に関し，日本語の音声，文字，語彙及び文法並びに日本人の言語行動様式に関する調査研究並びにこれに基づく教育内容に関する調査研究
    - 第二研究室
      日本語教育に関し，日本語と欧米諸言語との対照研究及びこれに基づく外国人の母語別，学習目的別等による教育方法に関する調査研究
    - 第三研究室
      日本語教育に関し，日本語と東南アジア諸言語との対照研究及びこれに基づく外国人の母語別，学習目的別等による教育方法に関する調査研究
    - 第四研究室
      日本語教育に関し，日本語と中国語，朝鮮語等との対照研究及びこれに基づく外国人の母語別，学習目的別等による教育方法に関する調査研究
  - 日本語教育指導普及部
    - 日本語教育研修室
      日本語教育に従事し又は従事しようとする者に対する一般的基礎的な研修に関する調査研究及びこれに基づく研修会等の開催
    - 日本語教育教材開発室
      日本語教育に関する基本的教材・教具の開発に関する調査研究及びこれに基づく教材・教具の作成，提供

なお，国語辞典の編集に関して，国語辞典編集準備室を設けて準備作業を進めている。

言語体系研究部

(1) 現代語文法の調査・研究　第一研究室

日本語の文法を体系的に記述することを目的とし，(1)総合性に基づく動詞の類型化，(2)叙法副詞と述語の叙法の分析，(3)副助辞・係助辞の機能の研究，(4)コソアドの用法の研究，(5)後置詞の研究，を行った。

(18ページ参照)

(2) 現代語彙の概観的調査　第二研究室

雑誌についての経年的調査を実施。規模は，「中央公論」の10年おき8年分1万語ずつ，計8万語。本年度は，語彙表をコンピュータに入力するとともに，主に文法的なことについて分析した。(20ページ参照)

言語行動研究部

(3) 現代敬語行動の研究　第一研究室

言語行動としての敬語行動を把握する視点を考察し，その視点から具体的な敬語行動を調査・記述し，分析する方途を探る基礎的な研究を進めた。また，昭和59年度まで継続した「戦後日本の社会変化が日本人の敬語と敬語行動に及ぼした影響に関する調査研究」をまとめ，報告書を刊行した。(22ページ，及び13ページを参照)

(4) 所属集団の差異による言語行動の比較研究　第二研究室

今後の社会言語学研究の推進，及び日本の言語生活史の概観を主な目的として，各種社会調査資料の収集・整理を行うとともにデータベース化の準備的研究を行った。また，言語行動場面関係の文献リスト作成の準備を行っている。(24ページ参照)

(5) 言語行動様式の分析のための基礎的研究　第二研究室

身振りや動作などの「行動」を記述するための枠組み作りを主な目的として，前年度に引き続き，録画・録音資料をもとに，言語表現と非言語的行動の関連性についての分析を行い，報告書用の原稿の一部を執筆した。(25ページ参照)

(6) 図形・文字の視覚情報処理過程及び読書過程に関する研究　第三研究室

視覚心理学及び認知心理学の立場から，漢字仮名交じり文の読みの過程に関する実験を進めた。本年度は，パーソナル・コンピュータを利用した読みの眼球運動の実験・解析システムを完成した。(26ページ参照)

(7) 動的人工口蓋による発音過程に関する研究　　第三研究室

ダイナミックパラトグラフィ（ＤＰ）を分析法の主軸として，現代日本語の標準語音声を調音的，音響的，機能的な側面から明らかにする。本年度は，標準語と方言との対比的な分析を進めるために，58年度に収集した青森方言のＤＰ資料の整理分析を進めた。(28ページ参照)

言語変化研究部

(8) 文法的特徴の全国的地域差に関する研究　　第一研究室

57年度までの研究テーマを発展させ，方言における文法の諸特徴について，その全国的地域差を明らかにしようとするものである。これまでの調査結果の一部について言語地図を作成した。また，新たに全国14地点で体系的調査を実施した。(30ページ参照)

(9) 方言研究法に関する基礎的研究　　第一研究室

「方言アクセントの社会言語地理学的研究」と題するテーマについて，新潟県の佐渡方言を対象にアクセント調査を実施した。(45ページ参照)

(10) 明治時代における漢語の研究　　第二研究室

英和辞書の訳語について，語別訳語対照一覧表の検討・調整を行い，訳語の音訓・字音・字訓・ローマ字表記などについて整理基準を定めた。

(48ページ参照)

(11) 現代語彙の源流に関する研究　　第二研究室

現在使用されている用語のうち，自然科学用語は現代文化を支える一つの中心である。それらは，どのようにして造られ，定着していったか，その過程を明らかにする。そのため，幕末・明治大正期に起源をもつ可能性の大きい訳語・外来語のうち，本年度は数学・物理学・化学・生物学・医学・天文学・地学の７科目の語について自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書（合計 143 冊）から延べ約20,000の用例を採集し，明治期に刊行さ

れた専門語辞典（合計４冊）についての調査を行った。(53ページ参照)

言語教育研究部

(12) 児童・生徒の言語習得に関する調査研究　　第一研究室

幼児・児童の母国語の習得過程について明らかにすることを目的として，本年度は，次の調査研究を行った。

1) 漢字について　a） 常用漢字の習得度調査　b） 児童の漢字使用に関する探索的研究

2) 作文について　a） 児童の作文使用語彙調査　b） 文章化能力と作文

3) 幼児及び小学校低学年児童の語彙調査 (58ページ参照)

言語計量研究部

(13) 言語計量調査―語彙調査自動化のための基礎的研究―　　第一研究室

語彙調査自動化の準備的研究では自動単位分割・自動漢字解読・自動品詞認定の機能をもった一貫処理システムによる語彙調査システムの評価実験を行った。語彙調査の実施とまとめでは，中学校教科書のM単位の語彙表を作成し，『中学校教科書の語彙調査』(報告87) を刊行した。

(65ページ参照)

(14) 現代の文字・表記に関する研究　　第二研究室

現代の文字・表記の実態を記述するとともに，そこに含まれる諸問題について，種々の観点から，理論的な検討を行う。本年度は，二字漢語の用法の分析結果の報告原稿の執筆にとりかかるとともに，表記テーブルの補充と修正，文字・表記の研究に関する情報の収集を行った。

(69ページ参照)

(15) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究　　第三研究室

新聞３紙１年分の逆引きの KWIC の作成を開始し，光ディスク装置を使用した日本語データベース化の予備的実験を行った。また，仮名・漢字変換処理が，単位切り・読み仮名づけ・同語異語判別処理の効率化に有効であることを示した。その他，OCR 方式によって，用語調査の期間・費

用が短縮されることを明らかにした。さらに，電子計算機による言語処理の質を向上させ，意味内容にまで立ち入った高次の処理へと進むことを目的とし，言語理解・推論・言語生成の過程をモデル化するための研究を行った。(71ページ参照)

日本語教育センター

(16) 日本語の対照言語学的研究　　第一研究室

「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなす研究である，日本語と諸外国語との対照研究の基礎を築くもので，「日本語の記述的研究」と「個別対照文法記述のための研究」とについて研究を進めた。前者については，その成果の一部をとりまとめ，『日独仏西基本語彙対照表』(報告88)として刊行した。(78ページ参照)

(17) 日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究　　第一研究室

日本語の動詞の名詞句支配について，動詞結合価理論の立場から記述を行い，個々の動詞について，その支配する名詞句の種類・分布を明らかにしようとする。3年計画の初年度として，用例の採集を始めた。

(80ページ参照)

(18) 日本語教育の内容と方法についての調査研究　　第一研究室

外国人に対する日本語教育の内容と方法について現状を把握し，日本語教育向上のための対策を検討するために，技術者研修の分野における日本語教育に携わっている7機関に委員を委嘱し，日本語教育研究連絡協議会を年度内に2回開催した。(82ページ参照)

(19) 日英対照による日本語の発話行為の研究　　第二研究室

日本語教育のための基礎資料を得ることを目的とし，日英語における命令・依頼の遂行機能をもつ発話行為を，直接的発話行為及び間接的発話行為に分け，成立条件を発話の統語形式，文音調，意味内容，話し手・聞き手の関係並びに発話の成立場面・文脈の観点から検討した。

(84ページ参照)

(20) 日本語とインドネシア語との対照言語学的研究　　第三研究室

前年度に引き続き，日本語とインドネシア語の倒置構文を，主として次のような観点から考察した。①日本語の後置文と談話法的省略文との関係。②情報構造的観点より見たインドネシア語の倒置構文。また，日本語とインドネシア語の受動構文の比較をするため内外の文献に当たるとともに例文の収集を行った。(85ページ参照)

(21) 日本語と中国語との対照言語学的研究　　第四研究室

現代日本語と現代中国語の漢字について，字種，字体，用法等の異同を明らかにすることを目的とする。本年度は，前年度作成した日中漢字対照表を補充するとともに，それぞれの字種によって表記される語の収集を行った。(88ページ参照)

(22) 日本語教育のための照応現象に関する比較・対照的研究　　第四研究室

日本語の照応現象についての研究，及び外国語における例との対照研究を行い，日本語教育のための基礎資料を得ることを目的とする。本年度は話しことば資料として映画シナリオを取り上げ，英語，インドネシア語，中国語，ポルトガル語と日本語の間で比較，検討を行った。

(90ページ参照)

日本語教育指導普及部

(23) 日本語教育研修の内容と方法についての調査研究　　日本語教育研修室

研修に必要な教育内容の明確化，教授資料・教材等の整備充実，また，研修受講者の能力・専門・受講期間等に応じた研修制度のあり方，カリキュラムの設定などについて，基礎的な調査研究を継続的に行っている。

その一環として，前年度に引き続き『日本語教育論集２』を発刊した。

(91ページ参照)

(24) 国内の日本語教育機関におけるテストに関する基礎的調査

日本語教育研修室

本調査は，現在国内の日本語教育機関で施行されている種々のテストを収集し，その方法及び内容を検討するとともに，測るべき能力を特定し，その評価手法を開発するための基礎的調査である。同時に，実験的に数種

のテストを開発し，外国人インフォーマントに対して試行する計画である。

(93ページ参照)

(25) 日本語教育教材開発のための調査研究　　日本語教育教材開発室

日本語教育映画基礎編のせりふの付加情報について，入力を継続した。映画利用のための各種一覧表作成に向けてデータを作成し，映画総合語彙表を作成した。語彙教材開発のための基礎資料として，語義記述に使用されている用語の実態調査に着手した。(95ページ参照)

(26) 国語及び国語問題に関する情報の収集・整理　　文献調査室

例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し，情報の収集整理を行い，『国語年鑑』〈昭和60年版（1985)〉を編集した。(97ページ参照)

なお，文部省科学研究費補助金の交付を受けて，以下の研究を行った。

総合研究(A)　日仏語の基本語彙の対照言語学的研究　（代表　野元菊雄）

フランス語と日本語の基本語彙をその使用される場面との関係において比較することを目的とする。具体的には，①日仏両語の基本語彙の意味分野別の比較対照表を作成し，②そのうち政治関係の分野について，語彙の使用条件等を比較検討した。また研究報告として『日仏語の基本語彙の対照言語学的研究論集』を刊行した。(105ページ参照)

一般研究(A)　国定読本の用語の研究　（代表　飛田良文）

文部省著作の小学校用国語教科書，いわゆる国定読本１期～６期（明治37～昭和24年まで使用）の文脈つき用語索引を作成し，その分析を試みた。用語索引の作成には電算機利用の新しい方法の開発を試み，用語については，第１期・２期について分析を試みた。(107ページ参照)

一般研究(A)　国語学研究の動向の調査研究　（代表　佐竹秀雄）

国立国語研究所編『国語年鑑』をもとにして，過去33年間の研究成果の国語学研究文献総合目録を作成し，それによって国語学研究の動向について分

析と展望を行うことを目的とする。本年度は，そのためのデータ（文献データ）作成を中心に進めた。入力のための原稿作成，コンピュータへのデータ入力，端末機による修正などの作業を行い，その結果，刊行図書約２万５千件の文献データが入力できた。(109ページ参照)

一般研究(B)　方言研究資料の電子計算機による作成および分析に関する研究　（代表　佐藤亮一）

本研究は方言資料の蓄積を有効に生かすために電子計算機を利用する技術を確立することを目的とする。具体的には，方言文法の全国的な調査の結果をデータベース化することと，日本言語地図のデータを使って数量的な研究を行うことを目ざしている。(111ページ参照)

一般研究(B)　日本語教育用学習辞典の記述法に関する研究

（代表　川瀬生郎〈60.11.24. まで〉日向茂男〈60.11.25. から〉）

中級学習者用辞書の設計における諸問題について，理論的な基準を設定することを目的とする。最終年度に当たり，採録語彙の選定，語義記述の方法，外国語翻訳における訳語の選択，感動詞の記述の実際，の４点について，資料作成と分析を行い，報告集を作成した。(112ページ参照)

一般研究(B)　日本語語彙教育のための分類用例集の開発と試作

（代表　南不二男）

外国人に対する日本語語彙教育の基礎資料として，基本語の具体的用例を列挙し適切な分類を加えた用例集を作成する方法を開発し，実際に試作を行うことを目的とする。本年度は，現実の言語資料から用例を採集する方法を開発し，見出し語を辞書形式に配列したリストを試作した。次年度に継続し，意味分野別・表現意図別などの形式のリストを作成する予定である。

(115ページ参照)

一般研究(C)　古代（的）言語表現の享受と創造――現代日本語における

（代表　石井久雄）

現代の日用の日本語のうちにまぎれこんだ，非日用的な言語の存在，ということをめぐって，歴史小説・時代小説の会話文に現れた実態を調査した。

江戸時代の武家のことばとして，時代小説語といったものが，用意され，他の身分・時代の人物にも流用されることが，わかった。(117ページ参照)

奨励研究(A)　文献資料と方言分布の対照による語史構成のための基礎的研究　（代表　小林　隆）

文献国語史と言語地理学の成果を対照し，地理的・位相的・意味的に幅をもった語史を構成するために，その基礎となる資料の収集・整理と方法論の検討を目的とした。『日本言語地図』所収の項目のうち，身体関係と農業関係の語彙を中心に，(1)中央文献からの用例採集，(2)地方文献，特に農書からの用例採集，(3)関連意味項目の全国方言通信調査，(4)以上を基にしての対照における問題点の検討，などを行った。(122ページ参照)

奨励研究(A)　言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現　（代表　杉戸清樹）

日常の言語行動に現れる次の２種類の表現類型について，言語表現の明確さや待遇表現的な配慮との関連を考慮に入れつつ，言語行動の種類に応じた現れの実態と機能を把握しようとした。

(1)　言語行動の目的・機能を明示する言語表現

(2)　言語行動における対人的な配慮を明示する言語表現 (126ページ参照)

以上のほかに，当研究所では辞典関係の事業として昭和52年度以降，国語辞典編集と母語別日本語学習辞典編集の作業にとりかかっている。

国語辞典編集に関する準備調査　国語辞典編集準備室

国語辞典編集準備調査会を２回開催し，国語辞典編集の準備及び実験的試行を行った。準備としては，国語辞典編集資料別冊『国語辞典編集準備室所蔵見坊文庫目録』を印刷した。実験試行は，総索引方式の成果である『国定読本用語総覧１』(国語辞典編集資料１，三省堂刊）を刊行した。また，その『尋常小学読本』(イエスシ読本）の用語について各種統計表を作成した。

(146ページ参照)

母語別日本語学習辞典の編集　日本語教育教材開発室

母語別学習辞典編集委員会を2回，母語別学習辞典翻訳専門委員会を3回開催した。編集委員会では，編集上の全般的諸問題について検討を行うとともに，翻訳専門委員会の討議内容を受けて翻訳上の諸問題の検討を行った。翻訳専門委員会は，翻訳校閲及び母語話者校閲の内容をはじめとする具体的な問題を討議して編集委員会への助言を行った。第1期翻訳分4,000項目についてインドネシア語への翻訳，翻訳校閲の作業を進めるとともに，母語話者による翻訳内容校閲を行った。(156ページ参照)

昭和60年度刊行物等の概要

研究報告集（7）（報告85）

1　杉戸清樹「公文書のあて名の敬称――般個人あての場合」……一般住民あての公文書のあて名に「様」「殿」の敬称がどのように使われているかについて，全国1,086の地方自治体を対象に実施した通信調査の報告である。文書の種類による使い分けを含め，全国分布図を付して示した。

2　神部尚武「読みの眼球運動と読みの過程」……読書中の眼球の動きを時間を追って記録する方法が，読みの過程を調べるのに適切な方法であることを，筆者自身の漢字仮名交じり文を対象とした研究及び内外の最近の研究を概観することにより，明らかにした。

3　島村直己「小学校配当漢字外常用漢字の読み―中1，高1を対象にした自己判定方式による調査の結果から―」……小学校配当漢字996字以外の常用漢字の一字一字について，中1と高1を対象にして，自己判定方式によって行った読みの調査の報告。

4　斎藤秀紀「同形異語判別への仮名漢字変換処理の応用」……国定読本の用語調査（第3期～第6期，推定50万長単位語）に対し，光学式文字読み取り装置を使用した，単位切り・同語異語判別処理が調査期間・費用の軽減に有効であることを述べた。また問題点に対する改善案を4点示した。

5　正保勇「受動構文に関する一考察―日本語とインドネシア語との比較―」……日本語の受動構文を，「直接受動文」，「所有物被動構文」，「間接受動構文」に分類し，これらと意味の上で対応するインドネシア語の構文との比較を行い，後者が実際に受動構文であるかどうかを考察した。

6　石井久雄「あるラテン語動詞活用表」……ラテン語規則活用動詞の活用を形態素の水準で解析して，表化した。この活用表は，国学が日本語動詞の活用を解析した結果に似る。それによって，ラテン語動詞が一般になぜそう表化されず，日本語動詞がなぜ国学的にとらえられえたか，考えた。

社会変化と敬語行動の標準（報告86）

昭和57年度〜59年度の文部省科学研究費補助金・特定研究(1)「情報化社会における言語の標準化」（総括班主査・柴田武〈57，58年度〉，木下是雄〈59年度〉）の一班として進めた「日本人の言語行動の類型」（代表者・渡辺友左）のうち，「社会変化と敬語行動の標準」に関する調査研究をまとめたものである。執筆分担者は，渡辺友左（言語行動研究部長），杉戸清樹（言語行動研究部第一研究室長）のほか，望月重信氏（明治学院大学教授），真田信治氏（大阪大学助教授）である。章の構成と分担は以下のとおり。

第１章　研究の骨組み（渡辺）

第２章　戦後日本の社会構造の変化と敬語行動の変化に関するマクロな考察（渡辺）

第３章　新聞記事における皇室への敬語表現の歴史と現状（渡辺）

第４章　秋田県北部農村の社会変化と敬語行動の標準（渡辺・望月）

第５章　越中五箇山山村の社会変化と敬語行動の標準（渡辺・真田・杉戸）

第６章　秋田県北部農村の子どもの言語生活と言語意識（望月・渡辺）

第７章　総括（渡辺）

研究は大別して二つの立場に立って進めた。一つはマクロな視点からのもので，戦後40年の日本社会の構造変化と日本人の社会結合の変化を跡づけ，それに基づいて敬語行動の規範の変化を検討した。第２章，第３章がこれに当たる。第二はミクロな立場からの調査研究で，秋田県北秋田郡上小阿仁村と富山県東礪波郡上平村という二つの地域社会を対象にして，戦後行われた先行調査と対比しつつ，地域住民の生活様式・生活意識の変化，敬語意識・敬語使用の変化と現状を記述しようとした。第４章〜第６章がこの報告である。〈都市化〉〈産業構造の変化〉〈世代交替〉などの事実を社会学の立場から統計資料をもとに跡づけ，そうした社会変化の中での，〈親〉の敬語行動から〈疎〉の敬語行動への変化や敬語使用基準の変容——例えば家格基準から個人の年齢基準への変化——を，住民への面接調査を通じて把握しようとした。Ｂ５判322ページ。巻末に索引を付す。

中学校教科書の語彙調査（報告87）

この調査は，『高校教科書の語彙調査』（報告76）のあとを受けて，それより一段階前の，義務教育の最終段階である中学校で身につける知識体系を記述する語彙の実態を明らかにすることを目的としている。

対象としたテキストは，理科4冊（1分野上・下〔物理・化学〕，2分野上・下〔生物・地学〕）及び社会科3冊（地理・歴史・公民）である。この結果を，高校教科書の調査の結果と比較し，総合的に教科書の語彙を分析する予定である。

今回の調査も文章解析などこれまでの語彙調査ではできなかった分析・記述をするためにサンプリング法を取らず，全数調査を行った。

また，前回以上に電子計算機の十分な活用が図られた。人手と機械とが調和して作業が進むことを心がけたこと，語彙表は計算機出力をそのまま用いていることなどがその特徴で，調査の精度を高め，人間の単純作業の負担を軽減させることができた。

本調査のデータは，すべて計算機に納められているので現代日本語のデータとして広く活用することができる。

報告書の内容は，次のとおりである。

Ⅰ　調査の概要

Ⅱ　語彙量

Ⅲ　五十音順M単位語彙表

1.　本表（自立語）

2.　付表（付属語・数字・記号）

Ⅳ　度数順M単位語彙表（全教科）

Ⅴ　度数順M単位語彙表（各教科別）

日独仏西基本語彙対照表（報告88）

この報告書は，特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する比較対照的研究」（昭和53年度～56年度）で得られた成果の一つとして報告したもので，先に報告した『日本語教育のための基本語彙調査』（報告78）の成果をふまえたものである。日本語教育センター第一研究室が担当し，語彙表の作成，及び，解説の執筆は高田誠が行った。

この研究の目的は，日本語といくつかの外国語でいわゆる学習基本語彙とされているものについて，意味分類体で一つの表の上に配列し，各言語の基本語彙が，それぞれの意味分野によってどのような分布の違いを見せるかということを概観しようとするものである。

資料としては，日本語については，上記報告78で設定された基本語彙を用い，独・仏・西語については，いずれも白水社の刊行になる『ドイツ基本語辞典』，『フランス基本語辞典』，『スペイン基本語辞典』を用いた。これらは編著者各位，並びに白水社の了解を得て用いた。

意味分類の基準としては，『分類語彙表』（資料集6）を用いた。

各言語の語彙の配列は，それぞれの見出し語に付けられた訳語形をキーにして行った。すなわち，各訳語形に『分類語彙表』の意味分類コードを引き当て，意味コードの順に配列し，もとの見出し語形をその横の対応する欄に配置した。各言語で同じ訳語を持った見出し語があれば，対応する欄にそれぞれの語形が並べられている。また，日本語の語形もそれぞれの意味分類の場所に配置され，それぞれのコードの枠組みの中で，日，独，仏，西の相対応する語形が横に一覧できるようになっている。

このように配列することにより，それぞれの意味分野における各言語の語の分布が一覧できるわけであるが，この表をそのままそれぞれの分布の違いとするわけには，実は，いかない。それぞれの辞書の訳語の付け方の基準が異なり，訳語を多く付けた辞書と少ない辞書とでは，本語彙表に取られた項目の延べ数が大きく異なるからである。この点については機会を改めて詳しく述べたい。

国定読本用語総覧1——第一期あ～ん——（国語辞典編集資料1）

国定読本用語総覧は，国語辞典編集資料の一つとして国定読本のすべての用語を文脈付きで示した索引（concordance）である。国定読本は明治37年4月から昭和24年3月まで使用された文部省著作の小学校用国語教科書（1～6期）のことで，本書はそのうちの第1期『尋常小学読本』（1～8）の全用語を検索できるようにしたものである。解説，索引，付録からなり，見出し語数3864，参照見出し数812，空見出し数25，用例数32409を収録している。

本書に収められた語彙は，その編纂趣意書に「用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取リ，カクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ，其統一ヲ図ルヲ務ムルト共ニ，出来得ル丈児童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取リテ，談話及綴リ方ノ応用ニ適セシメタリ」と記されているように，「談話」と「綴リ方」，言いかえれば話しことばと書きことばの標準を示す意図を反映したものである。今日，日本全国で日本語が通じるのは，この編集方針のおかげである。したがって，本書は，国語辞典編集の資料であるとともに，次の5点を知る手引きとなる。

1. ある語が国定読本に用いられているか。
2. 用いられているとすれば，国定読本のどこに用いられているか。
3. その語は，国定読本で何回用いられているか。
4. その語は，どのような文脈で用いられているか（話しことばでか，書きことばでか，など，文脈から文体・場面などを知ることができる）。
5. 国定読本には，どのような語が用いられているか，語彙の体系はどうなっているか（それは，他の文献の用語状態を明らかにするための比較基準ともなる）。

本書の編集は国語辞典編集準備室（主幹飛田良文，研究員高梨信博，調査員林大・見坊豪紀・中田恵美子・二戸麻砂彦・加藤信明・瀧本典子）が昭和58年から担当したもので，解説は飛田良文が執筆し，付録は高梨信博が作成した。

語彙の研究と教育（下）（日本語教育指導参考書13）

本書は『語彙の研究と教育(上)』に続くもので，語彙をめぐる諸問題を取り上げ，研究上，また日本語教育上の観点から論じている。執筆は引き続き玉村文郎氏（同志社大学教授）に依頼した。

本書の構成は以下のとおりである。

7　語の構成と造語法

語のなりたち／語構成と造語法／語の構成成分（単位）／語の構成／複合語とその成分／造語に伴う変音現象／統語構造のいろいろ／並列構造のいろいろ／畳語（重複構造）／派生語／品詞の転成／造語法

8　語の意味

語義と指示対象／意義素・意味特徴／範列的関係と統語的関係／反義・類義・対義・偏義／原義・転義／単義・多義／いろいろな意味／複合語の意味／語感／語彙の体系と連想／語義の変化

9　語の表記

表記法と語意識／没正書法性／漢字正字意識と好字志向／漢字と仮名の機能分担／書き分け／表記と語形／文字列

10　語彙資料――辞書と語彙表――

辞書／語彙表など

11　対照語彙論

個々の単語の対照／語彙体系の対照／語彙構造の対照／造語法の対照

12　語彙教育――内容と方法――

語彙教育の内容／語彙教育の方法

本書は『語彙(上)』と同じく，章ごとに（場合によってはいくつかの節のまとまりで）練習問題が付いているので，本書の内容を確認しながら読み進めることができるようになっている。

現代語文法の調査・研究

A　目的と内容

現代日本語の文法を体系的に記述することを目的とし，実際に使用された言語作品を資料として，それを分析するものである。本年度は，以下の題目の研究を進めるとともに，文献カード及び用例の補充を行った。

1)　単語の結合性の研究

2)　副詞と述語の叙法の研究

3)　探索的研究

　a．副助辞・係助辞の機能の研究

　b．コソアドの用法の研究

　c．後置詞の研究

4)　文法に関する研究文献目録カードの作成

B　担　当　者

言語体系研究部第一研究室

部長　高橋太郎　3a　　室長　村木新次郎　1，3c，4　　主任研究官　工藤浩　2　　研究補助員　鈴木美都代　3b，4

C　本年度の仕事

1では，名詞と動詞の結びつきの諸タイプを調査し，統語的意味的な分析を行った。

2では，叙法副詞の分析とともに，それが関係する述語の叙法についても分析を行い，文の叙法表現における叙法副詞のはたす独自の役割について考察を進めた。

3では，用例を採集し，分析の方法を吟味した。

4では，『国語年鑑（昭和60年版）』によって，昭和59年に発表された，日本語の文法を扱った論文を選び出して，著者別及び題目別カードを作成した。

D　今後の予定

1は，これまでの分析をもとに報告書を執筆する。

3，4は次年度も継続し，用例や文献カードを補充していく。

現代語彙の概観的調査

A　目的と内容

現代日本語の語彙体系を，記述的・統計的・発生的など，いろいろな観点から調査・記述することを目的とする。本年度は，前年度に続き，雑誌用語の変遷に関する研究を行った。

B　担　当　者

言語体系研究部第二研究室

室長　宮島達夫　　研究員　高木翠

C　本年度の作業

1. 「中央公論」の経年調査（10年おきに，1万語ずつ）調査結果のうち，〔複〕（2年度以上にわたって現れた単語）は，すでにコンピューターにいれてあったが，このほかに〔単〕（ある1年にしか，現れなかったもの）も入力した。
2. 〔複〕のうち，『分類語彙表』にあるものには，分類番号をつけた。
3. 文法上のいくつかの問題について分析した。以下にいくつかのデータをあげておく。

口語文中の文語的要素の変化

言文一致は，比較的短い期間で成功したが，最初は，口語文のなかに文語的な表現が混じっていて，それが，次第に口語化されてきたのである。次の表は，口語文中の形容動詞の連体形について，調べた結果である。

	「ーなる」	「ーな」	「ーな」の比率
1906	17	30	.64
16	22	51	.70
26	19	56	.75
36	10	96	.91
46	9	120	.93
56	0	118	1.00
66	0	157	1.00
76	4	108	.96

文の長さ

	1文の平均語数	標準偏差
1906	12.67	10.76
16	13.45	9.75
26	13.54	10.24
36	13.19	10.40
46	14.69	10.28
56	13.11	8.74
66	13.40	10.08
76	12.55	8.77

D　今後の予定

1. 「中央公論」の報告書の執筆と刊行

報告書は，語彙表と分析とを合わせて1冊にする。

2. 今後の語彙研究の方法の検討

現代敬語行動の研究

A　目的と内容

現代語の敬語・敬語行動の実態を調査・記述するための基礎的研究を行う。具体的には，以下の２項を行う。

a）　敬語行動の記述と分析のための基礎的研究

言語行動としての敬語行動を把握する視点を考察し，その視点から具体的な敬語行動を調査・記述し，分析する方途を探る。

b）　戦後日本の社会変化が日本人の敬語・敬語行動に及ぼした影響に関する調査研究のまとめ

昭和56年度以降継続した標記の研究の成果をまとめ，研究報告書を刊行する。

B　担　当　者

言語行動研究部第一研究室

部長　渡辺友左　b，　室長　杉戸清樹　a，研究補助員　塚田実知代　a，b

C　本年度の経過

(1)　上記aに関しては，言語行動の成立要件（例えば言語行動の主体，話題，媒体，場面，談話構成など）に直接的な配慮を及ぼしていることを明言するような言語表現を，具体的な言語資料から抽出する作業を進めながら，敬語行動を記述・分析するための方法論的・基礎的研究を続けた。この研究は，昭和59年度までの科学研究費補助金・特定研究(1)『情報化社会における言語の標準化』のうちの「日本人の言語行動の類型」班に属して進めた「言語行動の規範とその運用の実態」，及び昭和60年度奨励研究(A)

「言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現」(126ページを参照) と内容的に関連が深い。このうち特定研究の研究として前年度に実施した，公用文の文章表現についての全国自治体職員への意識調査の結果を

「文書の定型表現——地方自治体職員の意識調査——集計結果の抜粋」
(言語行動研究部第一研究室編集・発行。昭和60年8月。非売品。)

の研究報告資料としてまとめ，調査協力自治体へ配布した。このほか，同じ調査の結果の一部分を，127ページに掲げた2論文として公表した。

(2) 上記bの研究は昭和56年度に着手し，昭和57年度〜59年度の3年間，前掲の特定研究として進めてきたものである。戦後日本の社会構造の変化と敬語行動の変化に関する，統計資料に基づくマクロな考察，及び秋田県，富山県の村落社会をフィールドにしたミクロな観点からの敬語行動の調査，の二つを柱とした。本年度はこの調査研究をまとめ，『社会変化と敬語行動の標準』(報告86　昭和61年3月刊) として刊行した。内容については13ページを参照のこと。

D　今後の予定

aについては，これまでに蓄積した書きことば資料，話しことば資料の整理を進め，考察対象とした言語表現類型及び敬語行動を検討するための理論的・基礎的な研究を継続していく。

bの研究は本年度をもって終了した。

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A　目　　的

人間の言語行動は，その人が置かれている社会的諸状況に依存する面が大きい。性・年齢などの自然的生得的なものをはじめとし，血縁的（例えば，家族），地縁的（居住地），社会的（階層や職業）あるいは心理的（仲間意識やパーソナリティ）などの諸条件が絡み合って，人間にあるタイプの言語行動を取らせていると考えられる。このような認識に基づいて，種々の観点から社会言語学的な調査研究を行う。

B　担　当　者

言語行動研究部第二研究室

室長　江川　清　　主任研究官　米田正人　　研究補助員　礒部よし子

C　本年度の研究

今後の社会言語学研究に役立てるため，また，日本人の言語生活史を概観することを目的として，前年度に引き続き調査資料の収集・整理作業を行うとともに，データベース化のための準備的研究を行った。また，本年度までに収集した言語行動場面関係の文献をリスト化し，電子計算機に入力した。

D　次年度の予定

1. 引き続き社会言語学的研究資料の収集・整理を継続するとともに，既存のデータベースシステムの具体的な比較検討作業を行う。
2. 特定研究「言語の標準化」で行ってきた言語行動場面調査の資料の分析を行う。

言語行動様式の分析のための基礎的研究

A 目　　的

コミュニケーションとしての言語行動を総合的に把握するための基礎として，身振りや動作などの「行動」を記述するための枠組み作りを主目的とする。あわせて，会話の分析やコミュニケーション・ネットワークの解明及びこれらの計量的分析のための方法論を検討する。

B 担 当 者

言語行動研究部第二研究室

室長　江川　清　　主任研究官　米田正人　　研究補助員　礒部よし子

同第一研究室　室長　杉戸清樹

C 本年度の研究

前年度に引き続き，すでに整理の完了している録画・録音資料をもとに，言語表現と非言語的行動の関連性についての分析を続行し，報告書用の原稿の一部を執筆した。

D 次年度の予定

言語表現と非言語的行動の関連性についての分析結果をもとに原稿を完成させ，報告書を刊行する。

図形・文字の視覚情報処理過程及び読書過程に関する研究

A 目　　的

図形及び文字が，感覚伝送系での情報の受容から文の理解にいたる高次の情報処理を受ける過程について，視覚心理学及び認知心理学の立場から実験研究を行う。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

室長　　神部尚武

C 本年度の経過

前年度までに，漢字使用を制限した文章の読みの過程に関する実験を行い，文章中で漢字で表記しないと混乱の起きる語と，平仮名で表記しても誤りの起きない語に分類できることを示した。この実験の欠点の一つは，文字単位で表記の変容を行い，漢字使用頻度調査結果より使用頻度の低い漢字から平仮名に置き換えたことである。使用頻度の低い漢字による単語の中には，平仮名に置き換えると意味の取りにくい単語がある。もう一つの欠点は単語と単語の間で分かち書きしていないことである。漢字含有率の小さい文章では，分かち書きの効果を検討する必要がある。これらの欠点を取り除いた実験を計画し，高校社会科教科書から選んだ文章について，和語・漢語の別，漢語では阪本教育基本語彙表の分類による4段階の基本度によって，文章中の単語を平仮名表記に置き換える作業を行った。単語間を分かち書きする場合としない場合の文章を用意し，一つの文章について12種類の文章を作成した。本年度後半では，これらの文章の黙読の際の眼球運動を測定した。測定結果の解析の作業は次年度に持ち越された。

本年度は，眼球運動測定に関して大きな進歩があった。これは，昭和60年3月にパソコン PC-9801m2 を購入したことにより，文章の提示と測定結果の表示にグラフィック・ディスプレイが利用できるようになったことである。眼球運動測定装置から AD 変換インターフェースにより 10msec おきに PC-9801m2 にデータを送り，眼球運動の停留・跳躍運動解析プログラムによって，測定から数分後にグラフィック・ディスプレイ上に文章に重ねて注視点の位置と停留時間を表示することができる。また，ディスプレイ上の文章に対して被験者の眼球運動と連動して変容を与えることもできる。この場合は，PC-9801m2 は文章の提示だけに専用されるので，読みの際の眼球運動は Hewlett-Packard 社の HP-9825S を用いて記録する。眼球運動のデータは，ディジタル電圧計（HP-5345A）を経て，IEEE-488 インタフェースを用いて HP-9825 に保存され，測定後に HP-9825S から IEEE-488 インタフェースを経て PC-9801m2 に送られる。停留・跳躍運動解析プログラムによって，注視点の位置と停留時間がディスプレイ上に文章に重ねて表示される。

なお，下記の研究集会等で実験結果の一部を報告した。

(1) 読みの眼球運動と読みの過程

『研究報告集 7 』（報告85，昭和61年 3 月）29—66ページ

(2) 読みの眼球運動と読みの過程

国立国語研究所研究発表会（昭和61年 3 月15日）

D 今後の予定

次年度は，本年度に続き，次の実験を行う予定である。

(1)漢字仮名交じりの文の読みの過程に関する実験

(2)パーソナル・コンピュータによる眼球運動データの解析と表示に関する実験

(3)単語の認知過程に関する実験

動的人工口蓋による発音過程に関する研究

A 目　　的

標記の研究は，言語行動第三研究室が継続的に行っている現代日本語の音声の，音韻論上の問題，表現的な個々の特徴などを調音的，音響的，機能的な側面から明らかにすることを目的とした一連の研究の中の一つである。本研究は，主に動的人工口蓋装置（dynamic palatograph, 以下 DPと略す）による調音運動の観測，分析を通して研究を進める。当面は，標準語の音声を分析の対象とするが，比較の必要から，方言や外国語の音声も今後取り扱うことを予定している。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

主任研究官　高田正治

C 本年度の経過

前年度に引き続き，収集ずみの青森方言ＤＰ資料（電算機印字用紙で，約4,000ページ分）の整理作業を主として進めた。この整理作業のうちで，時系列分布図の作成など比較的人手を必要としていた作業の電算機処理化（ＰＣ-9801）を検討して専用ソフトを試作し，能率及び精度の上昇をはかった。これらの作業と併行して，この青森方言の中から，撥音及び母音間のｂ，ｄ，dz などの鼻音化現象を対象にした分析も進めている。

D 次年度の予定

次年度は，本年度に引き続き，上記青森方言のＤＰ資料の中から，特徴的な音韻を優先的に整理し，標準語との対比的な分析を実験音声学的な立場か

ら進める予定である。

また，現在までの一連の研究のうちで，まとめが延期されていた『X線映画資料による子音の発音の研究』(仮題) のまとめも併行して行う予定である。

文法的特徴の全国的地域差に関する研究

A 目　　的

方言における文法の諸特徴について，その全国的地域差を明らかにする。具体的には，これまでに行った個々の事象についての臨地調査結果（全国807地点）に基づいて言語地図を作成し，さらに新たに全国十数地点で体系的調査を実施，両者を総合的に分析して報告書を執筆する。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長　佐藤亮一　　主任研究官　沢木幹栄　　研究員　小林隆　白沢宏枝

非常勤研究員　W・A・グロータース（60. 4. 1〜61. 3.31）

昭和60年度の地方研究員は次の各氏に委嘱した。

担当地区	氏　名	所属機関（職）
南東北	加藤　正信	東北大学文学部（教授）
関　東	大島　一郎	東京都立大学人文学部（教授）
中　部	馬瀬　良雄	信州大学人文学部（教授）
東　海	山口　幸洋	
北　陸	真田　信治	大阪大学文学部（助教授）
近　畿	山本　俊治	武庫川女子大学文学部（教授）
中国Ⅰ	室山　敏昭	広島大学文学部（助教授）
四　国	土居　重俊	高知学園短期大学（非常勤講師）
北九州	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部（教授）
南九州	田尻　英三	鹿児島大学教育学部（助教授）
奄　美	三石　泰子	熊本短期大学（助教授）

C　本年度の調査研究

この研究は昭和52年度～56年度の「方言における音韻・文法の諸特徴についての全国的調査研究」，及び，昭和57年度の「文法の諸特徴についての全国的調査研究」を引き継ぐものである。研究は5か年計画とし，本年度はその第3年次である。

本年度は下記の調査・作業を行った。

(1) 前年度に引き続いて，電算機に入力したデータを出力して校正作業を行うとともに，この資料をデータベースとして利用するためのプログラムを作成した。なお，この作業は文部省科学研究費補助金による研究「方言研究資料の電子計算機による作成および分析に関する研究」（別項参照）と相互に関連させつつ行った。

(2) これまでの調査結果の一部について言語地図を作成した。

(3) 終助詞，及び，表現法Ⅰ（命令・禁止・義務，強調・詠嘆，仮定，疑問・反語，授受，可能）について，下記の14地点で体系的調査（記述的研究）を実施した。

地区名	地点名	担当者
北東北	青森県黒石市大字袋字富山	佐藤　亮一
南東北	宮城県多賀城市（高崎・八幡地区）	加藤　正信
関　東	東京都八丈町三根	大島　一郎
中　部	長野県松本市島立区北栗	馬瀬　良雄
東　海	愛知県名古屋市（旧市街地中心部）	山口　幸洋
北　陸	福井県吉田郡松岡町石舟	真田　信治
近　畿	大阪市東区道修町	山本　俊治
中国Ⅰ	広島県呉市苗代町上条	室山　敏昭
中国Ⅱ	島根県松江市新庄町	小林　　隆
四　国	高知県土佐郡土佐町南泉	土居　重俊
北九州	長崎市手熊町	愛宕八郎康隆

南九州	鹿児島市（中心部）	田尻　英三
奄　美	鹿児島県名瀬市小湊	三石　泰子
沖　縄	沖縄県石垣市川平	沢木　幹栄

なお，昭和54年度～56年度に実施した本調査，及び，57年度に実施した補充調査における調査地点を以下に掲げる。地点総数は別表（都道府県別調査地点数）のとおり807であり，現在作成中の言語地図はこれらの地点における調査結果に基づくものである。地点名表示は紙幅の都合により町村レベル（市の場合は次のレベル）までとし，大字名・小字名・番地等は原則として省略する（地点番号表示は国立国語研究所方言調査基礎図のシステム――『年報9』参照――による）。

都道府県別調査地点数

県名	地点数	県名	地点数
北海道	33	愛　知	16
青　森	24	三　重	16
岩　手	33	滋　賀	9
宮　城	16	京　都	12
秋　田	25	大　阪	6
山　形	21	兵　庫	22
福　島	30	奈　良	9
茨　城	15	和歌山	13
栃　木	15	鳥　取	10
群　馬	15	島　根	19
埼　玉	9	岡　山	18
千　葉	12	広　島	22
東　京	12	山　口	15
神奈川	7	徳　島	10
新　潟	29	香　川	7
富　山	11	愛　媛	16
石　川	13	高　知	15
福　井	10	福　岡	12
山　梨	9	佐　賀	6
長　野	28	長　崎	22
岐　阜	22	熊　本	18
静　岡	21	大　分	15

宮　崎	19
鹿児島	38
沖　縄	32
計	807

調査地点番号	調査地点
	北海道
0717.50	稚内市声問
0724.21	礼文郡礼文町
0724.95	利尻郡利尻町
0746.69	天塩郡天塩町
0776.88	苫前郡羽幌町
0779.88	名寄市大通北
0840.33	枝幸郡枝幸町
0894.41	紋別郡遠軽町
1718.71	深川市３条
1725.35	浜益郡浜益村
1739.28	空知郡上富良野町
1743.81	余市郡余市町
1747.55	三笠市幌内
1756.04	江別市篠津
1770.72	島牧郡島牧村
1778.45	勇払郡穂別町
1794.54	登別市中央町
1799.94	静内郡静内町
1801.80	上川郡上川町
1807.12	網走市字藻琴
1835.20	足寄郡陸別町
1851.85	上川郡清水町
1865.54	白糠郡音別町
1868.21	釧路郡釧路町
1920.05	標津郡標津町
1942.62	根室市昆布盛
2608.90	奥尻郡奥尻町
2701.41	山越郡八雲町
2720.25	爾志郡乙部町
2722.67	亀田郡七飯町
2734.05	亀田郡椴法華村
2751.10	松前郡福島町
2822.49	幌泉郡えりも町

調査地点番号	調査地点
	青森県
2743.86	下北郡大間町
2754.56	下北郡大畑町
2761.66	東津軽郡三厩村
2764.81	下北郡川内町
2765.13	下北郡東通村
2771.97	北津軽郡中里町
2772.75	東津軽郡蟹田町
2773.12	下北郡脇野沢村
2775.21	上北郡横浜町
2784.51	東津軽郡平内町
2785.15	上北郡六ケ所村
2790.38	西津軽郡鰺ケ沢町
2791.57	北津軽郡鶴田町
2792.25	青森市大字鶴ケ坂
2793.04	青森市大字滝沢
2794.15	上北郡東北町
3609.46	西津軽郡岩崎村
3701.52	中津軽郡西目屋村
3702.37	黒石市大字袋
3702.83	南津軽郡大鰐町
3704.48	十和田市西六番町
3705.92	三戸郡五戸町
3706.81	八戸市白銀
3714.95	三戸郡田子町
	岩手県
3716.48	九戸郡種市町
3725.32	二戸市福岡
3725.49	九戸郡軽米町
3726.68	久慈市夏井町
3734.14	二戸郡浄法寺町
3735.77	岩手郡葛巻町
3736.03	九戸郡山形村

3744.19　岩手郡岩手町
3744.22　岩手郡松尾村
3745.98　岩手郡玉山村
3746.76　下閉伊郡岩泉町大字門
3747.46　下閉伊郡田野畑村
3747.91　下閉伊郡岩泉町岩泉
3753.89　岩手郡雫石町
3754.59　盛岡市上米内
3757.18　宮古市愛宕
3764.66　紫波郡紫波町
3765.93　稗貫郡大迫町
3766.24　下閉伊郡川井村鈴久名
3766.86　下閉伊郡川井村小国
3773.12　和賀郡沢内村
3774.64　花巻市四日町
3777.19　下閉伊郡山田町
3783.11　和賀郡湯田町
3784.65　江刺市稲瀬
3785.94　江刺市伊手
3786.03　遠野市土淵町
3787.45　釜石市松原町
3794.22　胆沢郡胆沢町
3795.06　東磐井郡大東町
3796.26　大船渡市日頃市町
4704.45　一関市幸町
4705.93　東磐井郡藤沢町

宮城県

4706.43　気仙沼市字東八幡前
4712.15　玉造郡鳴子町
4714.60　栗原郡築館町
4715.23　登米郡東和町
4715.98　本吉郡志津川町
4723.40　加美郡小野田町
4724.56　遠田郡涌谷町
4733.35　黒川郡大和町
4735.32　石巻市新中里
4742.95　柴田郡川崎町
4743.29　多賀城市高崎
4746.20　牡鹿郡牡鹿町
4752.94　白石市蔵本
4753.76　亘理郡亘理町
4761.07　刈田郡七ヶ宿町
4763.11　角田市字中島上

秋田県

3649.73　男鹿市船川港元浜町
3689.56　由利郡金浦町
3710.70　山本郡八森町
3720.70　能代市下浜町
3721.11　山本郡藤里町
3722.42　大館市八幡沢岱
3723.31　鹿角市十和田岡田
3730.43　山本郡山本町
3731.38　北秋田郡鷹巣町
3733.31　鹿角市八幡平
3740.34　南秋田郡五城目町
3741.06　北秋田郡阿仁町
3750.64　秋田市保戸野通町
3752.13　仙北郡西木村
3752.79　仙北郡田沢湖町
3760.57　河辺郡雄和町
3761.75　仙北郡西仙北町
3762.42　仙北郡角館町
3770.33　由利郡大内町
3772.61　仙北郡仙南村
3780.65　由利郡矢島町
3781.21　由利郡東由利町
3791.09　湯沢市愛宕町
3791.41　由利郡鳥海村
3792.49　雄勝郡東成瀬村

山形県

3688.82　酒田市飛島
4609.27　飽海郡八幡町
4609.53　酒田市１番町
4619.63　鶴岡市本町
4628.23　西田川郡温海町

4629.91 東田川郡朝日村
4639.69 西村山郡西川町
4658.69 西置賜郡小国町
4659.79 西置賜郡飯豊町大字椿
4669.44 西置賜郡飯豊町大字下屋地
4701.13 最上郡真室川町
4710.55 最上郡戸沢村
4711.32 新庄市北町
4712.40 最上郡最上町
4721.45 北村山郡大石田町
4730.59 寒河江市大字白岩
4731.58 東根市大字関山
4740.93 西置賜郡白鷹町
4741.43 山形市下条町
4750.66 南陽市赤湯
4760.53 米沢市直江町

福島県

4688.45 耶麻郡西会津町
4689.11 耶麻郡山都町
4697.92 南会津郡只見町
4698.11 大沼郡金山町
4698.94 大沼郡昭和村
4699.06 会津若松市字新横町
4772.12 伊達郡保原町
4773.26 相馬市字北町
4780.54 耶麻郡猪苗代町
4781.47 二本松市郭内
4782.08 相馬郡飯館村
4783.69 相馬郡小高町
4790.55 郡山市湖南町
4791.23 郡山市喜久田町
4792.30 田村郡三春町
4792.38 田村郡都路村
5608.81 南会津郡伊南村
5609.54 南会津郡下郷町
5617.85 南会津郡檜枝岐村
5618.48 南会津郡田島町
5701.40 岩瀬郡長沼町
5701.85 西白河郡矢吹町
5702.35 田村郡小野町
5704.30 双葉郡楢葉町
5710.29 白河市字鍛冶町
5712.41 東白川郡古殿町
5713.94 いわき市常磐湯本町
5714.10 いわき市久の浜町
5721.76 東白川郡矢祭町
5723.51 いわき市植田町

茨城県

5669.19 下館市稲荷町
5679.04 結城郡八千代町
5679.69 水海道市中妻町
5731.34 久慈郡大子町
5731.69 久慈郡里美村
5732.77 高萩市大字秋山
5741.73 東茨城郡御前山村
5742.71 常陸太田市内堀町
5751.61 笠間市笠間
5751.78 水戸市泉町
5761.80 石岡市若松
5762.82 鹿島郡旭村
5771.36 行方郡玉造町
5781.23 稲敷郡江戸崎町
5782.25 鹿島郡鹿島町

栃木県

5628.89 塩谷郡藤原町
5629.11 塩谷郡塩原町
5638.67 今市市小倉
5639.17 矢板市扇町
5647.27 上都賀郡足尾町
5648.97 上都賀郡粟野町
5649.75 宇都宮市花房三丁目
5659.12 下都賀郡壬生町
5659.46 河内郡上三川町
5667.18 足利市福居町
5668.17 下都賀郡岩船町

5720.12　黒磯市中央町
5720.84　那須郡黒羽町
5730.61　塩谷郡喜連川町
5740.88　芳賀郡茂木町

群馬県

5635.65　利根郡新治村
5636.49　利根郡片品村
5644.75　吾妻郡長野原町
5645.43　吾妻郡中之条町
5646.11　沼田市滝坂
5646.90　北群馬郡子持村
5653.08　吾妻郡嬬恋村
5655.41　群馬郡倉淵村
5656.64　前橋市西片貝町
5657.35　桐生市梅田町
5657.80　佐波郡東村
5665.45　富岡市七日市
5668.51　館林市城町
5674.06　甘楽郡南牧村
5675.26　多野郡万場町

埼玉県

5666.89　大里郡岡部町
5675.66　秩父郡小鹿野町
5676.44　秩父郡長瀞町
5677.48　北足立郡吹上町
5685.29　秩父郡荒川村
5686.67　入間郡名栗村
5687.35　坂戸市浅羽
5688.06　蓮田市黒浜
5689.84　三郷市彦成

千葉県

5780.84　我孫子市布佐台
5791.39　香取郡多古町
5793.74　銚子市高神東町
6629.13　富津市西川
6639.97　館山市竹原
6700.04　千葉市長沼町
6700.97　市原市下野
6701.18　山武郡松尾町
6711.35　長生郡白子町
6720.23　君津市久留里
6721.33　夷隅郡夷隅町
6730.26　安房郡天津小湊町

東京都

5696.16　西多摩郡奥多摩町
5696.62　西多摩郡檜原村
5697.57　東大和市高木
5698.95　杉並区永福
5699.61　台東区竜泉
6607.36　町田市上小山田町
6657.54　(大島支庁)大島町元町
6667.81　(大島支庁)利島村
6697.59　(三宅支庁)三宅村阿古
7608.63　(三宅支庁)御蔵島村
7659.31　(八丈支庁)八丈町大賀郷
7659.62　(八丈支庁)八丈町中之郷

神奈川県

6607.81　愛甲郡愛川町
6608.80　横浜市緑区
6617.43　伊勢原市高森
6617.88　藤沢市善行
6626.37　小田原市鴨宮
6628.47　横須賀市富士見町
6638.14　三浦市白石町

新潟県

4637.20　岩船郡粟島浦村
4638.01　岩船郡山北町
4643.46　佐渡郡相川町関
4647.69　村上市本町
4652.79　佐渡郡相川町下相川
4653.66　両津市長江
4658.42　岩船郡関川村

4666.42　新潟市四ッ屋町
4667.22　新発田市中曽根町
4672.19　佐渡郡小木町
4675.45　西蒲原郡巻町
4676.57　五泉市本町
4677.98　東蒲原郡津川町
4684.77　三島郡出雲崎町
4686.51　南蒲原郡下田村
4694.72　柏崎市東本町
5695.46　長岡市栖吉町
4696.95　北魚沼郡入広瀬村
5602.99　上越市中央
5604.28　刈羽郡小国町
5605.57　北魚沼郡堀之内町
5611.95　糸魚川市大字大野
5612.62　西頸城郡能生町
5613.28　東頸城郡安塚町
5614.96　中魚沼郡津南町
5615.20　十日町市昭和町
5615.67　南魚沼郡六日町
5622.19　中頸城郡中郷村
5625.61　南魚沼郡湯沢町

富山県

5527.89　氷見市本町
5537.77　西礪波郡福岡町
5539.15　魚津市本町
5539.80　富山市新庄町
5547.42　西礪波郡福光町
5548.55　婦負郡八尾町
5549.32　上新川郡大山町
5557.85　東礪波郡上平村
5558.19　婦負郡細入村
5558.21　東礪波郡利賀村
5620.22　下新川郡朝日町

石川県

4597.66　輪島市河井町
4598.07　珠洲市大谷町
5508.16　鳳至郡能都町
5516.19　羽咋郡富来町
5517.75　鹿島郡田鶴浜町
5518.20　鹿島郡能登島町
5527.81　羽咋郡志雄町
5546.66　金沢市広坂
5556.91　小松市松岡町
5565.12　加賀市大聖寺本町
5565.29　小松市赤瀬町
5566.37　石川郡吉野谷村
5566.95　石川郡白峰村

福井県

5574.80　丹生郡越廼村
5575.11　坂井郡丸岡町
5575.52　吉田郡松岡町
5584.79　武生市上大坪
5585.09　大野市中野町
5586.56　大野郡和泉村
5594.81　敦賀市常宮
6512.15　大飯郡大飯町
6512.66　遠敷郡名田庄村
5513.24　遠敷郡上中町

山梨県

5693.05　北巨摩郡長坂町
5694.79　塩山市上於曽
5695.47　北都留郡小菅村
6603.52　南巨摩郡早川町
6603.68　南巨摩郡増穂町
6604.01　甲府市富竹町
6605.36　大月市大月町
6613.68　南巨摩郡身延町
6615.12　富士吉田市上吉田

長野県

5623.94　飯山市本町
5624.84　下水内郡栄村
5631.26　北安曇郡小谷村

5631.78 上水内郡鬼無里村
5632.18 上水内郡信濃町
5633.42 下水内郡豊田村
5642.29 長野市大字大豆島
5651.04 大町市社
5652.74 小県郡青木村
5653.33 小県郡真田町
5653.96 小諸市滝原
5661.77 松本市島立区
5662.78 小県郡和田村
5670.47 南安曇郡奈川村
5671.77 上伊那郡辰野町
5672.89 茅野市大字湖東
5673.18 南佐久郡八千穂村
5680.23 木曽郡開田村
5681.22 木曽郡楢川村
5681.79 上伊那郡南箕輪村
5684.26 南佐久郡川上村
5690.28 木曽郡上松町
6600.34 木曽郡南木曽町
6601.37 上伊那郡中川村
6610.08 下伊那郡清内路村
6611.15 下伊那郡喬木村
6620.15 下伊那郡平谷村
6621.07 下伊那郡南信濃村

岐阜県

5567.46 大野郡白川村
5568.14 吉城郡河合村
5569.10 吉城郡神岡町
5577.88 大野郡荘川村
5579.12 高山市塩屋町
5579.79 大野郡高根村
5587.74 郡上郡白鳥町
5588.78 益田郡萩原町
5595.89 揖斐郡徳山村
5597.42 武儀郡板取村
5597.68 郡上郡八幡町
5598.95 益田郡金山町
660.50 吉城郡上宝村
6506.49 山県郡美山町
6508.60 武儀郡武儀町
6509.07 恵那郡付知町
6515.79 不破郡関ケ原町
6516.13 揖斐郡揖斐川町
6517.35 各務原市須衛
5519.09 中津川市駒場
6519.90 瑞浪市稲津町
6526.55 海津郡平田町

静岡県

6615.89 駿東郡小山町
6621.77 磐田郡水窪町
6622.97 榛原郡本川根町
6623.54 静岡市梅ケ島
6624.54 富士宮市淀師
6634.32 庵原郡由比町
6635.21 沼津市一本松
6636.30 田方郡函南町
6641.25 周智郡春野町
6642.32 榛原郡川根町
6642.57 藤枝市滝沢
6643.17 静岡市小鹿
6645.47 田方郡天城湯ケ島町
6650.06 引佐郡引佐町
6650.72 湖西市鷲津
6651.40 浜松市大瀬町
6651.93 磐田市鮫島
6652.43 小笠郡菊川町
6655.44 賀茂郡松崎町
6656.31 賀茂郡東伊豆町
6662.49 榛原郡御前崎町

愛知県

6527.20 尾西市三条
6527.95 名古屋市西区
6528.52 瀬戸市本郷町
6536.18 海部郡佐屋町

6538.42　愛知郡東郷町
6539.22　東加茂郡足助町
6547.33　知多市南粕谷
6548.53　安城市西町
6549.51　額田郡額田町
6557.65　知多郡南知多町
6558.24　幡豆郡幡豆町
6559.55　豊橋市柱二番町
6568.16　渥美郡渥美町
6620.70　北設楽郡稲武町
6630.18　北設楽郡豊根村
6630.78　北設楽郡東栄町

三重県

6525.98　員弁郡藤原町
6546.12　四日市市川島町
6554.76　伊賀上野市才良町
6555.06　安芸郡芸濃町
6564.23　名張市上本町
6565.14　一志郡白山町
6566.73　松阪市豊原町
6575.43　飯南郡飯高町
6575.86　度会郡大宮町
6576.85　度会郡南勢町
6577.43　鳥羽市松尾町
6584.38　多気郡宮川村
6587.35　志摩郡大王町
6595.01　北牟婁郡紀伊長島町
7504.08　尾鷲市三木里町
7504.72　熊野市金山町

滋賀県

6504.96　伊香郡西浅井町
6513.86　高島郡朽木村
6515.41　東浅井郡浅井町
6523.87　滋賀郡志賀町
6524.67　彦根市上岡部町
6534.67　蒲生郡蒲生町
6543.37　大津市大字田上里町
6544.72　甲賀郡信楽町
6545.31　甲賀郡土山町

京都府

5590.74　竹野郡丹後町
6409.48　熊野郡久美浜町
6500.66　与謝郡岩滝町
6510.74　福知山市長尾
6511.27　舞鶴市字堂ノ奥
6521.20　綾部市本町
6521.94　船井郡瑞穂町
6522.32　北桑田郡美山町
6522.89　北桑田郡京北町
6532.51　船井郡八木町
6533.61　京都市左京区
6553.22　綴喜郡井手町

大阪府

6541.09　豊能郡能勢町
6542.64　高槻市原
6552.80　大阪市東区
6570.99　泉南郡阪南町
6571.48　和泉市松尾寺町
6572.14　南河内郡河南町

兵庫県

6407.69　美方郡温泉町
6409.00　城崎郡竹野町
6418.54　美方郡村岡町
6419.10　城崎郡日高町
6419.18　出石郡但東町
6428.09　養父郡養父町
6437.94　佐用郡佐用町
6438.02　宍粟郡波賀町
6439.51　神崎郡神崎町
6448.42　揖保郡新宮町
6449.68　加東郡社町
6457.29　相生市川原町
6458.39　姫路市的形町

6459.96　明石市大久保町
6469.77　津名郡北淡町
6479.95　洲本市本町
6488.48　三原郡南淡町
6520.90　氷上郡氷上町
6531.61　多紀郡篠山町
6540.79　三田市戎町
6551.70　神戸市東灘区
6560.22　神戸市垂水区

奈良県

6563.30　生駒郡安堵村
6563.87　宇陀郡榛原町
6573.32　高市郡高取町
6573.79　吉野郡東吉野村
6583.30　吉野郡西吉野村
6593.00　吉野郡大塔村
6593.98　吉野郡下北山村
6594.20　吉野郡上北山村
7503.32　吉野郡十津川村

和歌山県

6572.94　橋本市橋谷
6580.88　和歌山市吉原
6581.45　那賀郡打田町
6590.44　有田市箕島
6591.47　有田郡清水町
7500.46　御坊市藤田町
7501.69　日高郡竜神村
7503.91　東牟婁郡本宮町
7512.05　西牟婁郡中辺路町
7513.69　新宮市熊野地
7521.16　西牟婁郡白浜町
7522.94　西牟婁郡すさみ町
7523.93　東牟婁郡古座町

鳥取県

6404.92　西伯郡中山町
6407.43　岩美郡岩美町
6413.55　米子市下新印
6415.00　東伯郡大栄町
6415.70　東伯郡関金町
6416.22　気高郡鹿野町
6416.59　八頭郡郡家町
6423.39　日野郡江府町
6426.49　八頭郡智頭町
6433.00　日野郡日南町

島根県

5462.29　隠岐郡五箇村
5463.73　隠岐郡西郷町
5471.49　隠岐郡西ノ島町
6339.06　邇摩郡仁摩町
6348.34　浜田市国分町
6349.68　邑智郡石見町
6357.64　益田市津田町
6358.43　那賀郡弥栄村
6368.60　美濃郡匹見町
6377.11　鹿足郡津和野町
6411.31　平田市口宇賀町
6412.22　松江市幸町
6412.87　能義郡広瀬町
6420.49　簸川郡佐田町
6421.57　大原郡木次町
6422.93　仁多郡横田町
6430.53　邑智郡邑智町
6431.51　飯石郡頓原町
6440.35　邑智郡大和村

岡山県

6452.37　苫田郡上斎原村
6426.92　苫田郡加茂町
6434.04　真庭郡美甘村
6434.50　新見市菅生
6435.04　苫田郡富村
6436.55　勝田郡勝央町
6437.05　英田郡東粟倉村
6443.43　阿哲郡哲西町

6445.13　久米郡旭町
6446.93　和気郡佐伯町
6454.24　高梁市本町
6455.57　岡山市金山寺
6457.60　和気郡日生町
6464.30　井原市東江原町
6465.42　都窪郡早島町
6466.36　邑久郡牛窓町
6474.83　笠岡市真鍋島
6475.07　玉野市宇野

広島県

6359.38　山県郡大朝町
6359.61　山県郡芸北町
6369.32　山県郡加計町
6378.06　佐伯郡吉和村
6379.13　広島市安佐南区
6389.20　佐伯郡大野町
6431.76　比婆郡高野町
6441.61　双三郡布野村
6442.34　比婆郡西城町
6450.98　高田郡吉田町
6451.36　三次市向江田町
6452.85　甲奴郡上下町
6453.31　神石郡油木町
6461.78　賀茂郡大和町
6470.11　広島市高陽町
6471.65　竹原市新庄町
6472.37　尾道市美之郷町
6473.15　福山市多治米町
6480.23　呉市苗代町
6480.89　安芸郡蒲刈町
6482.27　因島市土生町
6490.31　安芸郡倉橋町

山口県

6366.25　阿武郡須佐町
6374.58　長門市仙崎
6375.28　萩市大井
6378.90　玖珂郡錦町
6383.28　豊浦郡豊北町
6384.87　美禰市大嶺町
6385.98　山口市錦町
6387.62　都濃郡鹿野町
6393.86　下関市安岡新町
6396.62　防府市八王子
6397.11　徳山市大字大道理
6398.07　岩国市岩国
7305.22　宇部市西岐波区
7308.05　大島郡大島町
7308.37　柳井市大字日積
6496.96　美馬郡穴吹町
6497.18　板野郡板野町
6497.57　名西郡石井町
6498.50　徳島市蔵本町
7405.10　三好郡山城町
7405.86　三好郡東祖谷山村
7407.66　勝浦郡上勝町
7408.46　阿南市富岡町
7416.34　那賀郡木頭村
7427.06　海部郡牟岐町

香川県

6475.60　丸亀市本島町
6477.12　小豆郡内海町
6485.21　丸亀市御供所町
6485.49　綾歌郡国分寺町
6486.58　大川郡寒川町
6494.07　三豊郡豊中町
6495.07　仲多度郡琴南町

愛媛県

6482.41　越智郡上浦町
6491.78　今治市高橋
7339.04　西宇和郡伊方町
7339.76　西宇和郡三瓶町
7349.91　宇和島市大字日振島
7400.15　温泉郡中島町

7401.80　松山市山越
7402.52　東予市周布
7403.40　新居浜市大生院
7404.20　伊予三島市寒川町
7411.51　伊予郡砥部町
7420.76　喜多郡内子町
7421.38　上浮穴郡美川村
7440.72　宇和島市元結掛
7441.02　北宇和郡日吉村
7460.22　南宇和郡御庄町

高知県

7414.61　土佐郡土佐町
7415.74　香美郡香北町
7422.56　吾川郡吾川村
7424.62　高知市弥生町
7427.71　安芸郡東洋町
7431.34　高岡郡檮原町
7433.61　須崎市西古市町
7436.40　安芸郡田野町
7442.45　高岡郡窪川町
7446.21　室戸市室津
7450.19　幡多郡西土佐村
7460.39　宿毛市土居下
7460.98　幡多郡大月町
7462.00　幡多郡大方町
7471.38　土佐清水市栄町

福岡県

7302.56　遠賀郡芦屋町
7311.28　宗像郡津屋崎町
7312.88　鞍手郡小竹町
7313.07　北九州市小倉南区
7320.95　糸島郡二丈町
7321.67　福岡市南区
7322.91　筑紫郡太宰府町
7323.74　田川郡添田町
7324.56　築上郡新吉富村
7332.69　朝倉郡朝倉町
7341.77　三潴郡大木町
7342.65　八女市大字長野

佐賀県

7229.75　東松浦郡呼子町
7249.35　伊万里市土井町
7331.41　神崎郡三瀬村
7340.42　多久市西多久町
7341.21　佐賀市鍋島町
7350.54　鹿島市古枝

長崎県

6267.09　上県郡上対馬町
6277.12　下県郡豊玉町
6287.81　下県郡厳原町
7219.20　壱岐郡芦辺町
7219.50　壱岐郡石田町
7237.67　北松浦郡生月町
7238.82　平戸市築地町
7238.98　松浦市調川町
7248.97　佐世保市母ヶ浦町
7258.64　西彼杵郡大島町
7259.54　東彼杵郡川棚町
7266.14　南松浦郡有川町
7269.48　大村市池田
7269.52　西彼杵郡琴海町
7275.24　福江市久賀町
7279.32　長崎市手熊町
7284.24　南松浦郡玉之浦町
7289.51　西彼杵郡野母崎町
7361.72　南高来郡国見町
7370.30　北高来郡飯盛町
7370.96　南高来郡南串山町
7381.02　南高来郡有家町

熊本県

7354.43　阿蘇郡南小国町
7361.38　玉名郡長洲町
7362.09　鹿本郡鹿本町

7363.12　菊池市住隈府
7373.31　熊本市秋津町
7373.99　上益城郡矢部町
7374.12　阿蘇郡久木野村
7382.21　宇土郡三角町
7382.67　八代郡宮原町
7383.98　八代郡泉村
7390.70　天草郡高浜町
7391.41　天草郡栖本町
7392.76　八代郡坂本村
7393.63　球磨郡五木村
8300.81　牛深市牛深町
8301.68　芦北郡津奈木町
8303.39　球磨郡湯前町
8303.70　人吉市南町

大分県

7316.65　東国東郡姫島村
7325.86　宇佐市橋津
7333.97　日田市清水町
7334.34　下毛郡耶馬渓町
7336.38　東国東郡安岐町
7336.81　速見郡日出町
7344.26　玖珠郡玖珠町
7345.53　大分郡湯布院町
7346.94　大分市敷戸
7347.54　北海部郡佐賀関町
7356.77　大野郡野津町
7365.25　竹田市竹田町
7366.13　大野郡三重町
7366.87　南海部郡宇目町
7367.69　南海部郡米水津村

宮崎県

7374.97　西臼杵郡五ケ瀬町
7377.63　東臼杵郡北浦町
7385.04　西臼杵郡日之影町
7386.47　延岡市牧町
7394.05　東臼杵郡椎葉村
7395.63　東臼杵郡南郷村
7396.44　日向市大字富高
8304.66　児湯郡西米良村
8306.52　児湯郡都農町
8313.72　えびの市小田
8314.52　西諸県郡須木村
8315.25　西都市大字南方
8324.40　西諸県郡高原町
8325.00　東諸県郡綾町
8325.95　宮崎郡清武町
8334.36　北諸県郡山之口町
8345.56　日南市油津
8345.84　南那珂郡南郷町
8354.28　串間市大字西方

鹿児島県

8229.96　薩摩郡里村
8248.18　薩摩郡下甑村
8300.29　出水郡東町
8311.63　出水市武本
8312.95　伊佐郡菱刈町
8320.28　阿久根市大川
8321.58　薩摩郡宮之城町
8322.68　姶良郡横川町
8331.60　串木野市本浜町
8332.42　姶良郡蒲生町
8333.50　国分市中央
8341.43　日置郡日吉町
8342.32　鹿児島市冷水町
8343.28　曽於郡大隅町
8350.57　川辺郡笠沙町
8351.75　川辺郡川辺町
8352.08　垂水市田神
8352.61　揖宿郡喜入町
8353.74　鹿屋市寿
8354.30　曽於郡大崎町
8361.42　枕崎市旭町
8362.31　揖宿郡頴娃町
8363.82　肝属郡田代町

8364.33　肝属郡内之浦町
8372.47　肝属郡佐多町
8394.21　西之表市国上
9249.94　鹿児島郡十島村
9311.67　熊毛郡屋久町
9313.46　熊毛郡南種子町
0228.96　大島郡笠利町
0246.88　大島郡瀬戸内町
0247.31　大島郡宇検村
0248.01　名瀬市小湊
0275.97　大島郡伊仙町
0276.51　大島郡徳之島町
0294.66　大島郡和泊町
0330.80　大島郡喜界町
1213.88　大島郡与論町

沖縄県

1157.92　島尻郡仲里村
1169.62　島尻郡座間味村
1221.48　島尻郡伊是名村
1231.72　国頭郡伊江村
1231.99　国頭郡今帰仁村
1232.38　国頭郡国頭村字佐手
1233.52　国頭郡国頭村字安田
1241.49　名護市字名護
1242.26　国頭郡東村
1250.59　中頭郡読谷村
1251.04　国頭郡恩納村
1251.27　国頭郡金武町
1260.68　那覇市首里赤平町
1261.16　中頭郡勝連町
1261.22　中頭郡北中城村
1261.92　島尻郡知念村
1270.26　糸満市字糸満
1271.05　島尻郡知念村
2068.07　宮古郡多良間村
2072.20　八重山郡与那国町
2074.69　八重山郡竹富町
2076.25　石垣市字川平
2076.96　石垣市字石垣
2076.98　石垣市字宮良
2085.16　八重山郡竹富町字古見
2086.03　八重山郡竹富町字竹富
2086.60　八重山郡竹富町字黒島
2095.60　八重山郡竹富町字波照間
2141.52　平良市字大神
2150.17　宮古郡伊良部村
2151.21　平良市字下里
2151.51　宮古郡下地町

D　今後の予定

次年度以降は，引き続いて下記の調査研究を行う。

(1)　電算機に入力したデータを出力して校正作業を行うとともに，この資料をデータベースとして利用するための各種のプログラムを作成する。また，それらのプログラムを用いて，項目間の関連，その他について考案する。

(2)　57年度までの調査結果に基づいて言語地図を作成する。

(3)　本年度と同一の地点で体系的調査を実施する。次年度は表現法(2)の項目を中心とする予定。

方言研究法に関する基礎的研究

A 目　　的

方言調査法，及び，調査結果の処理・分析法に関する基礎的な調査研究を行う。また，今後に発展させるべき研究計画についての小規模な実験的調査研究を実施する。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長　佐藤亮一　　主任研究官　沢木幹栄　　研究員　小林隆　白沢宏枝

調査には，上記のほか，真田信治氏（大阪大学文学部助教授）が参加した。

C 本年度の調査研究

本年度は，「方言アクセントの社会言語地理学的研究」と題するテーマについて，調査研究を行った。この調査のねらいは，語アクセントの地理的分布に大きな差違が認められる地域において，各年齢層を対象としたアクセント調査を実施し，アクセントの地理的変化と時代的変化の連動して現れる様相を明らかにしようとするところにある。

調査地域として，新潟県佐渡郡（佐渡島）の相川町から佐和田町を経て金井町に至る直線上の地点を対象とし，各地点とも，中学生，18歳～25歳，30歳台，40歳台，50歳台，60歳～79歳の各年齢層の者一人ずつをインフォーマントとすることを目標として調査を行った。調査語は，1拍～3拍名詞，2拍～4拍動詞，3拍形容詞を中心とし，準備調査では約600，本調査では約200の単語について調査した。原則として，名詞は一拍の助詞（「が」「を」など）が付いた文節を文頭に持つ短文（例「山が見える」）及び単語言い切り（例「山」）の形，動詞は終止形・連体形・過去形を文末に持つ短文（例「早く寝る」

「早く寝るとき」「早く寝た」)，形容詞は「赤い」を例にとると，「赤いりんご」「赤くなる」「赤かった」「りんごが赤い」の各活用形について，それぞれの形式（短文・文節・単語）をインフォーマントに読ませる形で調査を行った。

本調査における調査地点並びに各地点のインフォーマントの生年は下記のとおりである（Mは明治，Tは大正，Sは昭和)。

相川町姫津（T13・S 6・S15・S27・S40)
同　達者（M38・T13・T 7・S 9・S12・S24・S43・S46)
同　小川（T 4・S 8・S19・S24・S43・S47)
同　相川（M32・M42・M44・S 8・S18・S30・S47)
同　鹿伏（T12・S 4・S15・S29・S35・S48)
同　大浦（T13・S 5・S20・S30・S41・S46)
同　高瀬（T 7・S 2・S20・S26・S41・S47)
同　橘　（T10・S 7・S18・S39・S47)
同　稲鯨（M35・T11・S 4・S11・S30・S35・S44・・S46)
同　米郷（T 4・T15・S 7・S27・S35・S46)
同　元村（T 4・T14・S19・S26・S40・S47)
同　新地（T 4・S 6・S17・S28・S40・S47)
佐和田町羽二生（T13・S 2・S17・S29・S40・S46)
同　　上　町（M42・T15・S17・S30)
同　　籠　町（T13・S 6・S14・S26・S38・S46)
同　　炭屋町（T 6・S 7・S18・S25・S35・S46)
同　　上　組（S 3・S15・S27・S47)
同　　鍛冶町（T14・S 9・S19・S28・S36・S46)
同　　下長木（T12・S 7・S16・S24・S39・S47)
金井町　五丁弓（T10・S 3・S16・S25・S41・S45)

上記のように，一部の地点では求めた年齢層についてのインフォーマントが得られていないが，これについては次年度に補充調査を実施する予定である。

この研究は佐藤亮一が中心となって行った。調査結果はすべて録音し，あとで佐藤が録音を聴いて現場での調査者の記録をチェックすることとした。調査の実施は，予備調査を２月に佐藤が担当し，本調査を３月に全員で行った。

この調査で，120余人のインフォーマント（準備調査を含む）のほか，下記の方々のお世話になった（敬称略）。

土屋仁夫（相川町教育長），坂本外次（相川町教育委員会課長補佐），岩崎　照（相川町公民館長），高野秀樹（相川町稲鯨公民館長），渡部義純（佐和田町教育長），仲川多喜夫（金井町教育長），関根宣昭（金井町教育委員会総務課長），石塚伊佐雄（金井町教育委員会総務課長補佐），曽我信夫（金泉中学校長），川原芳太郎（相川中学校長），加藤　洋（相川中学校教頭），倉澤甚一郎（二見中学校長），中川三二（佐和田中学校長），今井利男（佐和田中学校教頭），原　昌（金井中学校長）。

各地区嘱託員（括弧内は地区名）

森川和治（姫津），小松幸吉（達者），北村雅治（相川），秋野　清（鹿伏），中川幸作（大浦），渡部正一（高瀬），岩崎徳治（橘），坂口春太郎（米郷），竹内一雄（元村），市野重治（新地），山本達二（羽二生），土居原定司（上町），山田長次郎（籠町），大坂勝司（炭屋町），山口靖司（上組），中村　章（鍛冶町），伊藤藤一（下長木）

なお，本年度は，上記の調査のほか，前年度実施した調査研究について整理・分析を行い，その成果の一部を中間報告として発表した（小林隆「方言通信調査法の検討」〈『言語生活』411号〉）。

D　今後の予定

本年度のテーマについて補充調査を実施し，また，調査結果の整理及び分析を行う。なお，次年度は「方言談話の研究」と題するテーマについて探索的研究を行う。そのほか，これまでに実施した調査研究について，報告書の原稿を執筆する予定である。

明治時代における漢語の研究

A　目的・意義

明治時代は，現代語の直接的な源流となった時代であり，日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い，日本語は大きく変化した。中でも，語彙の変化が激しく，それは漢語に最も著しく現れている。そこで，本研究は明治時代の各種文献に現れた漢語の実態を調査し，さらに大正末期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって，明治以降における漢語及び漢字表記の変遷の条件と方向とを見極め，現代語成立の歴史的背景を明らかにする。

B　担　当　者

言語変化研究部第二研究室

部長　飛田良文　(1)～(4)　　室長　梶原滉太郎　(1)～(4)　　研究員　高梨信博　(1)～(3)　　研究補助員　中山典子　(1)～(3)

C　これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度までは近代語研究室）では，昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し，明治初期漢語辞書８種の用語索引を作成し，48年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集９）を刊行した（『年報21～30』参照）。現在，明治初期の代表的翻訳小説『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の漢語について，また英和辞書の訳語について調査を行っている。

D　本年度の作業

(1)　『花柳春話』における漢語の研究

上記の作業は行わなかった。

(2) 英和辞書における訳語の研究

本年度は，語別訳語対照一覧表の検討・調整を行った。その際の整理基準を次のように定めた。

1. 訳語の音訓について

① 同じ漢字表記に対し，音読みと訓読みのふりがなのある場合，別語として扱う。ふりがなのないものは，音読みにする。

- 形體(カタチ)≒形體＝形體(ケイタイ) (Construction)
- 所得(マウケ)≒所得＝所得(ショトク) (Income)
- 俸禄(フチカタ)≒俸禄＝俸禄(ホウロク) (Income)
- 技倆(ハタラキ)≒技倆＝技倆(ギリヤウ) (Art)
- 詐偽(イツハリ)≒詐偽＝詐偽(サギ) (Art)
- 交通(ツキアヒ)≒交通＝交通(カウツウ) (Association)
- 藝(テワザ)≒藝＝藝(ゲイ) (Art)
- 手藝(テワザ)≒手藝＝手藝(シユゲイ) (Art)

② 訓読みのふりがながあって，音読みのふりがなのない場合，ふりがなのない語で音読みできる可能性があれば，それを音読みとする。

- 小舍≒小舍(コヤ) (Cell)
- 領承≒領承(ウケガヒ) (Acknowledgement)
- 報酬≒報酬(ムクヒ) (Acknowledgement)
- 眞物≒眞物(ホンモノ) (Life)
- 股分(ワケマヘ)≒股分≒股分(マタケヒ) (Interest)
- 活物≒活物(イキモノ) (Life)
- 活業(ナリハヒ)≒活業≒活業(クラシ) (Life)
- 行為＝行為(オコナヒ) (Life)

③ 一字の漢字でふりがながなく，音読みと訓読みの可能性がある場合，一部の漢字にどちらかのふりがながあるか，あるいは読み方の判断になる注釈のある時は，その読みに従う。ただし，判断の手掛りのないものについては，担当者がこれを判断した。

- 情(ジョウ)＝情 「(喜怒哀楽の) ―」が手掛り (Emotion)
- 動(ウゴキ)＝動 「(心の) ―」が手掛り (Emotion)
- 義(ギ)＝義≒義(イミ) 「義(ギ)」が手掛り (Import)
- 失ヒ＝失　この単語に「しつ (＝あやまち)」の訳はあてはまらないため (Sacrifice)
- Shirushi＝印 (Impression)
- 考へ(カンガ)＝考 「考へ(カンガヘ)」が手掛り (Impression)
- 業(ワザ)＝業 (Art)
- 盧(ロ)＝盧≒盧(イホリ) (Cell)
- 思ひ＝思≒想≒念 (Notion)

④　音読みと訓読みの混じった語は，その語全体を和語に準じて扱う。

- 忍性(コラヘゼウ)＝コラヘ情 (Patience)

2.　訳語の字音について

①　漢音読みと呉音読みのふりがなのある時は別語とする。ただし，ふりがなのないものは，現代読みの方に入れる。(慣用読みについても同じ扱い。)

- 前例(ゼンレイ)＝前例≒前例(センレイ) 〔前〕(漢)セン (呉)ゼン (「大字典」より) (Authority)
- 文體(ブンテイ)≒文體＝文體(ブンタイ) 〔體〕(漢)テイ (呉)タイ (「大字典」より) (Construction)
- 祭物(サイモツ)＝祭物≒祭物(サイブツ) 〔物〕(漢)ブツ (呉)モチ 慣モツ (「角川漢和中辞典」より) (Sacrifice)

②　漢音読みと呉音読みの可能性があり，ふりがながそのどちらか一方である場合は，ふりがなのある語に統一する。(慣用読みについても同じ扱い。)

- 正直＝正直(セイチョク) 〔直〕(漢)チョク (呉)ヂキ (「大字典」より) (Reason)
- 心像＝心像(シンゾウ) 〔像〕(漢)シャウ (呉)ザウ (「大字典」より) (Image)
- 椿事＝椿事(チンジ) 〔椿〕(漢)チン (呉)なし 慣チユン (「大字典」より) (Accident)

③　ふりがなが音読みの語で，その漢字表記にその音のない場合は当て字と考え，本来の漢字表記と一緒にする。(二字以上の熟語のうち一字だけが当て字であっても同じ扱い。)

- 一致(イッチ)=聯合(イッチ) (Association)
- 役人=有司(ヤクニン) (Authority)
- 意味=旨意(イミ) (Construction)

3. 訳語の字訓について

訓読みの語は，漢字表記が何種類あっても一語と認める。

- 業(ワザ)=業=技(ワザ) (Art)
- 藝(テワザ)=手藝(テワザ) (Art)
- 命=生命(イノチ) (Life)

4. 訳語のローマ字表記について

① 『和英語林集成（初版・再版・三版)』のローマ字表記の訳語は英和の部で漢字表記が推定できない場合，和英の部をひく。

(例) Life

1867『和英語林集成（初版)』Seimei →性命 (inochi) Life

1872『和英語林集成（再版)』Seimei →性命 Life

1886『和英語林集成（三版)』Seimei →生命 Life

和英の部にない場合は今日の表記による。ただし，現代の漢字が二とおり以上ある場合は，先に出てきた表記の方による。

② 「An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language」では，同音の類義語がある場合，先に出てきた方に合わせる。

- 主意=Shui≒趣意 (Import)

(3) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き，漢語に関する研究文献を収集し，目録に補充した。

(4) 近代語研究資料の調査

昭和60年12月 4～7 日の 4 日間にわたり，大阪府立図書館所蔵の漢訳洋書について調査を行い，57年度に作成した『漢訳洋書目録』草稿の大阪府立図書館蔵本についての確認作業を行った。調査に当たっては同図書館企画協力室・閲覧係の方々のお世話になった。

E　今後の予定

次年度は，本年度の作業を継続し，下記の作業を行う予定である。

(1) 『花柳春話』の漢語の研究は文体別の用例集を作成する。

(2) 英和辞書における訳語の研究は語別訳語対照表の索引作成作業を始める。

現代語彙の源流に関する研究

A　目的・意義

現代の文化現象を表現するために不可欠である現代語彙の重要な部分は，西洋文化の影響を強く受けた幕末の開国以後に成立したものが少なくない。その中でも自然科学用語は現代語彙の一つの中心的存在である。そこで，この研究では現代の自然科学用語について日常生活になじみの深い語を取り上げ，訳語を中心に，主として幕末・明治大正期に起源をもつものを見つけ出し，それらの用語が定着してゆく過程を明らかにする。

B　担　当　者

言語変化研究部第二研究室

部長　飛田良文　　室長　梶原滉太郎　　研究員　高梨信博　　研究補助員　中山典子

C　本年度の作業

(a)57年度の作業で選び出した訳語・外来語について，それらの発生と定着の過程を明らかにするため，前年度に引き続き自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書及び教科書から用例採集を行った。本年度は数学・物理学・化学・生物学・医学・天文学・地学の７科目について，主に幕末・明治大正期の文献141冊から合計約20,000枚の用語カードを作成した。

数学……合計10冊，同2,519ページ

『小学算術書』巻上・下　　明治９年　　林多一郎・松本時敏

『東京数学会社雑誌』第11～35号（合本２冊）　　明治11～14年　　大村一秀

『平面幾何学』上編・上編答式　　明治12年　　雨森菊太郎・上田勝行（訳）

『数理釈義』　　明治19年　　菊池大麓（訳）

*『理科通志』巻上・中・下　明治24年　山県悌三郎・杉山文悟（訳補）

物理学……合計20冊，同3,803ページ

『訓蒙窮理便解』巻上・中・下　明治5年　望月誠（纂訳）

*『格物探原』巻1～5　いずれも明治11年　韋廉臣

*『造物原因推理問答』巻1～4　いずれも明治11年　竹下廉之（抄訳）

*『尋常中学理化学示教』　明治28年　沢吹忠平

*『物理学初歩』　明治35年（8版）　後藤牧太・篠田利英・滝沢菊太郎

*『物理学詳解講義』　明治40年（7版）　本多光太郎

*『農学校用物理教科書〈三訂〉』　明治43年（改訂3版）　草野正行・中村春生

*『実科高等女学校理科教科書（理化篇）』　明治45年（3版）　竹島茂郎・近藤耕蔵

*『ウォルカー氏物理化学』　大正3年　湯田重太郎（訳）

*『簡易と興味とを主眼とせる小学理化教授の実際』　大正7年（再版）　瀬谷真吉郎

『新定物理学教科書』　大正10年（修正再版）　板橋盛俊

化学……合計30冊，同7,018ページ

*『西洋百工新書』前・後編，外編1～3　明治4～6年　宮崎柳条

『化学闢要』　明治5年　土岐頼徳（訳述）

『定性化学試験要領』巻1～5　いずれも明治9年　永松東海

『舎密階梯』巻1・2　いずれも明治9年　原田道義（編述）

*『格物探原』巻1～5　いずれも明治11年　韋廉臣

『近世化学示要』　明治12年　小林義直（訳述）

*『薩克氏著容量分析』上・下冊　いずれも明治18年　平賀義美（訳）

『羅斯珂氏化学』上・下冊　いずれも明治20年（再版・3版）　茂木春太（訳）

『中等教育有機化学・全』　明治23年　鳥居烋夫

*『肉食篇・全』　明治28年　辻暢太郎

*『尋常中学理化学示教』　明治28年　沢吹忠平

『普通教育化学教科書』　明治38年（訂正8版）　亀高徳平

*『ウォルカー氏物理化学』　大正3年　湯田重太郎（訳）

『理論応用最新化学集成』上・下巻　いずれも大正7年（6版・3版）　水津嘉之一郎

生物学……合計29冊，同4,141ページ

*『ラ氏初学須知』巻1～11（巻4・6は上・下冊，巻5は上・中・下冊）　明治8～9年　田中耕造（訳）

『小学動物教授書』巻上・下　明治15～16年　堤辰二

『動物小学』巻上・下　明治16年（3版）　松本駒次郎（纂訳）

『動物学新書』　明治28年（4版）　八田三郎

*『特用作物教科書・全』　明治44年（11版）　大脇正諄

『女子用植物教科書』　大正12年（3版）　瀬川光行

『女子用動物教科書』　大正13年（訂正再版）　瀬川光行

『動物学綱要・改版』　昭和2年（改訂再版）　田口於菟吉・寺崎留吉

*『博物学綱要』　昭和3年　安東伊三次郎

*『低学年自然科の実際』　昭和5年　高村広吉

『女子理科植物学〈改訂版〉全』　昭和5年（訂正4版）　大日本図書株式会社（著作兼発行）

*『中学新理科　一箇年課程』　昭和6年　東京開成館編輯所（編）

『上名対照鮮満植物字彙』　昭和7年　村田懋麿

医学……合計35冊，同2,889ページ

『丹水子』　貞享5＝1,688年　名古屋玄医

『蔵志』　宝暦9＝1,759年　山脇東洋

（以上の2文献はいずれも『復刻日本科学古典全書・3所収』）

『医事或問』　昭和6＝1,769年　吉益東洞（『日本思想大系・63』所収）

『解体新書』序図，巻1～4　安永3＝1,774年　杉田玄白ほか（昭和48年に講談社から出た覆刻版によった）

『狂医之言』　安永4＝1,775年（成立）　杉田玄白（『日本思想大系・64』所収）

『薬徴』　天明5＝1,785年　吉益東洞（『日本思想大系・63』所収）

『和蘭医事問答』　寛政7＝1,795年　杉田玄白ほか（『日本思想大系・64』所収）

『形影夜話』　文化7＝1,810年　杉田玄白（『日本思想大系・64』所収）

『眼科新書』　文化12＝1,815年　杉田立卿（訳述）

『病学通論』　嘉永２＝1,849年　緒方洪庵（『復刻日本科学古典全書・３』所収）

『遁花秘訣』　嘉永３＝1,850年　馬場佐十郎（訳）（『日本思想大系・65』所収）

『独徐氏外科新説』巻１～10　明治７年　森鼻宗次（訳述）

『新纂薬物学』巻１～７　明治10年　桎村清徳

『衛生概論』上・中巻　上巻は明治15年（３版），中巻は明治13年（初版）　柴田承桂（訳述）

『新薬纂論』　明治20年　青木純造・小此木信六郎

天文学……合計11冊，同747ページ

*『乾坤弁説』　慶安３＝1,650年（成立か）　沢野忠庵（訳）（『文明源流叢書・２』所収）

*『二儀略説』　寛文７＝1,667年（までに成立）　小林謙貞（『日本思想大系・63』所収）

『天文瓊統』巻１のみ　元禄11＝1,698年（までに成立）　渋川春海（『日本思想大系・63』所収）

*『管蠡秘言』　安永６＝1,777年（成立）　前野良沢（『日本思想大系・64』所収）

『和蘭天説』　寛政８＝1,796年　司馬江漢（『日本思想大系・64』所収）

『暦象新書』上・中・下編　それぞれ寛政10＝1,798年・寛政12＝1,800年・享和２＝1,802年に成立　志筑忠雄（訳述）（『文明源流叢書・２』所収）

『ラランデ暦書管見』（抄）　享和３＝1,803年　高橋至時（訳）（『日本思想大系・65』所収）

*『博物浅解問答』上・下篇　明治２年　柳沢信大（訳述）

地学……合計６冊，同460ページ

*『乾坤弁説』　慶安３＝1,650年（成立か）　沢野忠庵（訳）

*『二儀略説』　寛文７＝1,667年（までに成立）　小林謙貞

*『管蠡秘言』　安永６＝1,777年（成立）　前野良沢

『和蘭通舶』　文化２＝1,805年　司馬江漢（『日本思想大系・64』所収）

*『博物浅解問答』上・下篇　明治２年　柳沢信大（訳述）

以上の７科目の総計141冊，同21,577ページである。なお，上記の書名のうち＊印をつけたものは，その内容が２科目以上にわたっていて，用例採集作業を２科目以上の視点で行ったものである。

(b) 次に，明治期の専門語辞典である次の諸文献について訳語・外来語の調査を行った。

『数学ニ用ヰル辞ノ英和対訳字書』(明治22年，藤沢利喜太郎)・『英和数学字彙』(明治28年，駒野政和)・『BUTSURIGAKU NI MOCHIYURU GO NO WA-EI-FUTSU-DOKU TAIYAKU JISHO』(明治21年，山口鋭之助)・『人名医語字典』(明治27年，三宅秀)

これらのうち『数学ニ用ヰル辞ノ英和対訳字書』は昭和59年度文部省科学研究費補助金・特定研究(1)「日本語の正書法及び造語法とそのあり方」の調査研究のため，研究分担者である森岡健二・松岡洸司の両氏によって，昭和60年に復刻されたものを使用した。

D 今後の予定

次年度は，次の作業を行う予定である。

(a) 自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書及び教科書の訳語・外来語の用例採集。

(b) 明治期の専門語辞典の訳語・外来語の調査。

児童・生徒の言語習得に関する調査研究

A 目　　的

児童・生徒の母国語の習得過程を明らかにすることを目的として，本年度から行っている。

B 担 当 者

言語教育研究部

部長　村石昭三（室長事務取扱）　　研究員　島村直己　茂呂雄二　川又瑠璃子

C 本年度の作業

1）漢字について

1.　常用漢字の習得度調査

文部省科学研究費補助金特定研究(1)「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」（代表　村石昭三，昭和57年度～59年度）の一部として行ってきた漢字の習得度調査の集計作業を行った。また，この漢字の習得度調査の補足的な資料を得るために，次の二つの調査を行った。

①常用漢字表の付表の語の読み書きテスト

- 調査内容　常用漢字表の付表の語についての読みと書きの調査。
- 調査学年　小５・小６・中１・中３・高１。（学年によって調査した語は異なる。）
- 調 査 校　東京都北区立滝野川第一小学校
  同　港区立青南小学校
  同　田無市立柳沢小学校
  同　北区立稲付中学校

同　練馬区立豊玉中学校

東京都立忍岡高等学校

同　　向丘高等学校

- 調査期間　昭和60年11月

②100字テスト

- 調査内容　昭和25・26年に文部省が行い，そして昭和50・51年に国民教育研究所と日本教職員組合が再び行った100字テストの漢字を取り上げた。
- 調査学年　小4・小6・中1・中2・中3。
- 調 査 校　①の付表の語のテストと同じ。
- 調査期間　　同　上。

なお，前記の漢字の習得度調査の一部として，昭和58年度に行った予備調査の結果を次のものにまとめた。

島村直己「小学校配当漢字外常用漢字の読み―中1，高1を対象にした自己判定方式による調査の結果から―」『研究報告集7』(報告85)，昭和61年3月。

2.　児童の漢字使用に関する探索的研究

次の要領で採集した課題作文を対象にして，児童の漢字使用を見た。

- 課　　題　1.わたしの学校　2.先生　3.友達（それぞれに1学年3学級ずつ割り当てた。なお，「友達」を課した学級には，約2週間後に同じ課題でもう一度書かせた。）
- 調査学年　小2・小4・小6。
- 調 査 校　千葉県松戸市立新松戸南小学校

同　　大橋小学校

同　　和名ケ谷小学校

- 調査期間　昭和58年2月，3月

前年度，それぞれの課題について各学年60人（各校男女各10人）を抽出して，記号数，文字種別文字数を数え，一覧表に整理した。本年度は，それを

もとにして，各作文の漢字含有率を計算し，種々の分析を行った。

主な結果について簡単にまとめると，次のようになる。

1.　学年間，課題間での漢字含有率の違い

三つの課題それぞれについて，各学年での平均漢字含有率をグラフに表わすと，図1のようになる。(「友達」については，1回目に書いたものを取り上げた。) なお，漢字含有率は，「漢字数÷総文字数×100」という式によって求めた。

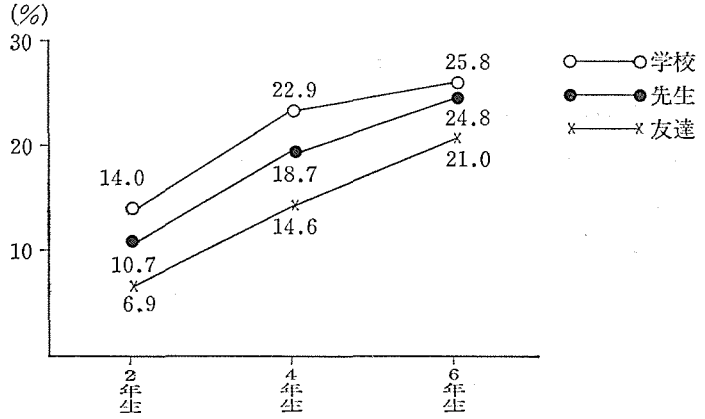

図 1　学年間・課題間の平均漢字含有率

①どの課題でも，2年生・4年生・6年生と学年が進むにつれ平均漢字含有率は増大していく。課題別に，学年間での平均漢字含有率の差を検定すると，次のようになる。(t検定による。)

〔学校〕	〔先生〕	〔友達〕
2年生：14.0%	2年生：10.7%	2年生：6.9%
4年生：22.9%	4年生：18.7%	4年生：14.6%
6年生：25.8%	6年生：24.8%	6年生：21.0%

(　) のところでは1%水準で，) のところでは5%水準で，両側検定で有意差が認められた。)

②しかし，学年ごとに，平均漢字含有率の最も大きい課題と最も小さい課題の漢字含有率の差を見ると，

2年生―― 7.1%

4年生―― 8.3%

6年生―― 4.8%

というように，かなりの開きがある。学年別に，課題間での平均漢字含有率の差を検定すると，次のようになる。（t検定による）

〔2年生〕	〔4年生〕	〔6年生〕
学　校：14.0%	学　校：22.9%	学　校：25.8%
先　生：10.7%	先　生：18.7%	先　生：24.8%
友　達：6.9%	友　達：14.6%	友　達：21.0%

（　）のところでは1%水準で，）のところでは5%水準で，両側検定で有意差が認められた。）

③2年生・4年生では，「学校」「先生」「友達」の順に平均漢字含有率は小さくなっていき，しかも図1に見られるように，グラフに画くとほぼ平行となる。しかし，6年生では，「学校」「先生」「友達」の順は変わらないものの，「学校」と「先生」の差がほとんどなくなる。この理由についてはわからない。

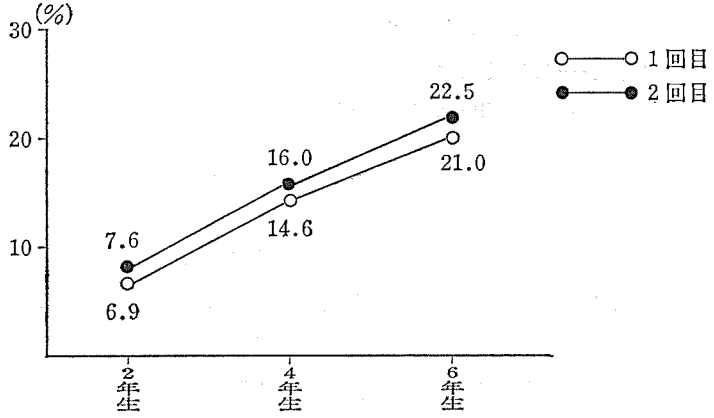

図 2　1回目と2回目の平均漢字含有率

2.　同一児童の同一課題の作文での漢字含有率の違い

同一児童が「友だち」という課題で2回作文を書いている。1回目に書いた作文の漢字含有率と2回目に書いた作文の漢字含有率を比べることによって，同一児童の漢字使用の安定性を見た。各学年での1回目と2回目の漢字含有率の平均をグラフで示すと，図2のようになる。

A.　集団内での変動

①平均で見ると，漢字含有率は，2・4・6のどの学年でも1回目よりも2回目の方が大きい。1回目と2回目の平均漢字含有率の違いを評価するために，対応のある場合の平均値の差の検定によってt値を計算すると，次のように学年が上がるにつれ，t値が増大する傾向が見られる。(両側検定による確率を（　）の中に示す。)

2年生――1.14 ($0.2<P<0.3$, df=59)

4年生――2.22 ($0.02<P<0.05$, df=59)

6年生――2.34 ($0.01<P<0.02$, df=59)

②なお，作文の長さ（文字数）は，同じく平均で見ると，2・4・6のどの学年でも1回目よりも2回目の方が短い。①と同様に対応のある場合の平均値の差の検定によってt値を計算すると，次のようになる。(両側検定による確率を（　）の中に示す。)

2年生――1.72 ($0.05<P<0.1$, df=59)

4年生――1.65 ($0.1<P<0.2$, df=59)

6年生――4.95 ($P<0.01$, df=59)

③①のことから，1回目よりも2回目の方が漢字含有率は高くなり，しかも，このことは，2・4・6年生と学年が上がるにつれよりはっきりしてくる，と言うことができよう。この理由についてはっきりしたことは言えないが，②で見たように，作文の長さが1回目よりも2回目の方が短くなることとあわせて考えると，児童は，2回目に書くときはだらだらと書かずに叙述をまとめようとし，しかも文章表記に気を配るようになる，ということが推測される。

B．　個人内での変動

1回目と2回目の漢字含有率の相関係数は次のようになる。

2年生――0.476

4年生――0.652

6年生――0.497

それほど相関が高いとは思われない。

なお，以上のことを中心として，次の口頭発表を行った。

島村直己「作文の漢字含有率」筑波大学人文科教育学会，昭和60年7月。

同　　「児童の漢字使用」第68回全国大学国語教育学会昭和60年7月。

2）　作文について

1.　児童の作文使用語彙調査

文部省科学研究費補助金特定研究(1)「言語使用能力の発達段階とその標準化」(代表　岡部慶三，昭和57年度～59年度）の一部として行ってきた作文使用語彙調査のうち，小学校高学年の使用語彙を調査した。国語研のα単位（『婦人雑誌の用語』〈報告19〉を参照。）で，異なり約2万1千，延べ約20万単位を得た。この使用語彙を，学年別使用頻度並びに品詞情報をつけた五十音順語彙表にまとめた。(『作文使用語彙調査―中間報告6―小学校高学年児童の作文使用語彙表』1983年3月。)

また，小学1年生から6年生までの使用語彙全体についての語彙表をまとめるための修正作業を行った。

2.　文章化能力と作文

作文を生成的な記号活動とする理論的な考察を下記の論考にまとめた。

Moro, Y. 1985 How children cope with the sentential mode of representation in writing. Literacy and Languages : The Second Yearbook of Literacy and Languages in Asia, p 23-36.

3）　幼児及び小学校低学年児童の語彙調査

文部省科学研究費補助金一般研究A「幼児・低学年児童の語彙調査」(代表　芦沢節，昭和51年度：村石昭三，昭和52年度～53年度）の一部として行い得られ

た絵本ポインテイング調査資料により，使用語彙の特徴に関して分析した。

D　次年度の予定

1. 常用漢字の習得度調査に関しては，小学校配当漢字について集計結果をまとめ，中間報告を印刷する。
2. 児童の漢字使用に関する探索的研究に関しては，語彙使用との関係について調べる。
3. 児童の作文使用語彙調査に関しては，①小学校全学年の語彙について計量的な分析を行う。また，②人名・地名を主とする別表を作成する。
4. 文章特性の発達に関する研究に関しては，小学1年生の書いたものを縦断的に収集し，文章特性（Textuality）の発達的な変化を検討する（千葉県下の小学校，4クラス，約120名の小学1年生の作品を資料とする）。
5. 幼児及び小学校低学年児童の語彙調査に関しては，さらに使用語彙の分析を続ける。

言語計量調査

語彙調査自動化のための基礎的研究

A 目　　的

これまでに開発された電子計算機を用いた語彙調査システムは，きめ細かい調査・分析ができるようになったものの，自動処理，及び調査結果の管理運用方法などについては十分ではない。そこで，これらを目標とした新しい語彙調査システムを開発する。

具体的には次の4点について，研究開発・調査分析を進める。

1. 自動処理プログラムの開発
2. 効率的な修正システムの開発
3. 調査結果の蓄積・検索・分析方法の開発，及びその運用方法の研究
4. 新しい電子計算機・日本語処理システムの調査研究

B 担 当 者

言語計量研究部第一研究室

室長　中野洋　研究員　石井正彦（60.9.1　第二研究室から配置換え）

山崎誠　研究補助員　小沼悦（60.9.1　第二研究室から配置換え）

C 本年度の研究経過

本年度の研究は，大きく二つに分かれる。すなわち，語彙調査自動化のための準備的研究と，これまでに行われてきた中学校教科書，及び高校教科書の語彙調査の実施とまとめとである。

1. 語彙調査自動化の準備的研究

電子計算機を用いた語彙調査の中では，語の並べかえ・用例の作成・頻度や比率の計算・作表を計算機によって行い，文章の単語分割・漢字の読み仮名つけ・品詞の認定・同じ語か異なる語かの判定などを人間によって行って

きた。ところが，電子計算機の性能が上がったことにより，人間が担当してきた作業の一部も計算機によって行うことが可能になった。一貫処理システムは自動単語分割・自動漢字解読の機能を持ったそのようなプログラムシステムである。

本年度は，これまでに作成した一貫処理システムの性能の評価実験を行い，問題点を明らかにした。語彙調査データの作成作業において，人手作業による場合と機械処理による場合との比較では，以下の結果を得た。すなわち，

1. 処理精度は，単位切りでは機械でほぼ90%，人手では97%～98%が見込まれることがわかった。これは明らかに人手の方がよい。
2. 処理時間は検査の時間を含めても機械が約5時間，人手が約53時間であり，人手は機械処理の10倍以上かかっている。
3. 入力パンチ量については，機械は人手の約20%の入力で済む。
4. 以上の結果として今後の語彙調査には機械による自動処理を用いても良いことは明らかである。しかし，今まで以上によい修正システムを作る必要があると思われる。

2月17日には外部の研究者8名を招いて，評価実験の結果について研究会を開いた。発表題目は以下のとおりである。

1. 「語彙調査自動化のための基礎的研究」の概要　中野　洋
2. 一貫処理システムの評価実験の結果について
   (1) 一貫処理システムの概要　中野　洋
   (2) 人手作業との比較（精度と所要時間について）小沼　悦
   (3) 自動単位分割の精度と問題点　石井正彦
   (4) 自動漢字解読の精度と問題点　中野　洋
   (5) 自動品詞認定の精度と問題点　中野　洋
3. 代表形変換について　山崎　誠

なお，研究成果や研究経過報告は本年度から発刊した言語計量研究部の内部資料『ＣＬ通信』に随時報告した。すなわち，

研究目的の１「自動処理プログラムの開発」については，

中野洋「語彙調査自動化における一貫処理システム」

中野洋「複合語の自動分割の方法について」(以上CL通信第1号)

中野洋・小沼悦「一貫処理プログラムの評価実験(1)実験の概要」

石井正彦「一貫処理プログラムの評価実験(2)自動単位分割の精度」

(以上CL通信第2号)

研究目的の2「効率的な修正システムの開発」には,

中野洋「語彙調査自動化のねらいとその概要」(CL通信第1号)

研究目的の3「調査結果の蓄積・検索・分析方法の開発,及びその運用方法の研究」には,

石井正彦「総合辞書の思想」(CL通信第1号)

研究目的の4「新しい電子計算機・日本語処理システムの調査研究」には

中野洋・古田啓「ACOS 4システムにおけるマークカードの使い方」

(CL通信第1号)

中野洋「日本語ワードプロセッサー「松」(管理工学研究所)と

「LANWORD」(日本電気)のコンバートプログラム」(CL通信第2号)

がある。

2. 語彙調査の実施とまとめ

中学教科書の語彙調査は,中学校社会科理科教科書7冊(社会科一地理的分野・歴史的分野・公民的分野,理科一第一分野・第二分野各上・下)の本文部分をすべて取り出し,全数調査するものである。言語量は約25万語(単位は形態素に近い比較的短い単位のM単位)である。この調査は「高校教科書調査」より自動化が図られている。すなわち,入力段階では,読み仮名等の情報を省き,高校教科書のデータを辞書として読み仮名・代表形を自動的につける。そののち,検査を行い,情報のつかなかった箇所・情報の違っている箇所のみに,人手による修正を行った。

本年度は,M単位の語彙表を作成し,『中学校教科書の語彙調査』(報告87)を刊行した。なお,研究経過について次の報告がある。

山崎誠「中学教科書語彙調査経過報告」(CL通信第1号)

高校教科書の語彙調査では，新しい電子計算機 ACOS 550 システムで使えるように，M単位・W単位のデータの整備を行った。

D　次年度の予定

語彙調査自動化の研究では，昭和60年度の研究成果を受けて，新しい計算機の上で動くメインシステムを作成する。特に，データの修正・集計・作表機能の充実を図る。語彙調査では，中教教科書のW単位の語彙表の作成，高校教科書の用語の分析を行う。

現代の文字・表記に関する研究

A 目　　的

現代の文字・表記の実態を記述するとともに，そこに含まれる諸問題について種々の観点から，理論的な検討を行い，あわせて研究方法の開発を試みる。

B 担 当 者

言語計量研究部第二研究室

部長　野村雅昭　　室長　鷲岡昭夫　　主任研究官　佐竹秀雄　　研究員　石井正彦（60.9.1第一研究室へ配置換え）　　研究補助員　小沼悦（60.9.1第一研究室へ配置換え）　　沢村都喜江（60.9.1第三研究室より配置換え）

C 本年度の研究及び作業

本年度の研究及び作業は以下のとおりである。

1.　漢字の機能の研究

新聞（昭和41年度の朝日新聞，毎日新聞，読売新聞の三紙）用語調査のデータによる，二字漢語の用法の整理は，前年度に終わった。本年度は，補足的な整理を行いつつ，報告原稿の執筆にとりかかった。

2.　表記テーブルの整理

昭和57年度で終了した特別研究「大量用語用字調査のための表記テーブルの作成に関する研究」で作成した漢字テーブルと語表記テーブルについて，前年度に引き続き，最近の新聞のデータを中心にデータの補充と修正を行った。また，それに基づいて，第三研究室と共同で，電子計算機システムの漢字辞書の拡充に務めた。

3.　文字・表記の研究に関する情報の整備

海外における研究，科学研究費による研究の報告，他の分野の雑誌等に掲載された文字・表記関係の論文などの収集に努めた。

D　今後の予定

漢字の機能度の研究（報告原稿の執筆）と，表記テーブルの整理，及び文字・表記の研究に関する情報の整備については，引き続いて研究と作業を行う。高校教科書語彙調査データと，現在進行中の中学校語彙調査の終了をまってそのデータの，文字・表記についての調査・研究を行う予定である。

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A　目的・意義

本研究は，各種の調査に使用するシステム及びプログラミング技術の開発と，言語のモデル化などの理論面に中心をおいた，二つの側面を対象にする。これらの研究は，各研究者間の横断的研究に供する基礎資料の作成，データ提供手段としてのデータベースの構築，用語・用字調査の効率化を図る方法論の開発に有効である。その他，電子計算機導入に伴う，基本機能とシステム構成を検討する場合に重要なものとなる。

B　担　当　者

言語計量研究部第三研究室

室長　斎藤秀紀　　主任研究官　田中卓史　　研究補助員　小高京子

沢村都喜江（60.9.1　第二研究室へ配置換え）　　米田純子

C　本年度の研究及び作業

1.　言語処理に関する基礎的研究

現代日本語の用例集を対象としたデータベースを作成し，言語分析に利用するため，新聞３紙（昭和41年発行・朝日・毎日・読売各１年分）の逆引きKWIC用例集の作成を開始した。逆引きKWIC用例集は，見出し語の語尾をキーとし，五十音配列したものである。用例数は，数字・記号類をはぶいた1,944,826件である。基本データは，作成済みKWIC用例データからの転用を図ったため，データ形式の変更を最少限にし，用例作成期間の短縮に重点をおいたシステム設計法を取った。

その他，用例集作成の省力化と効率化を図るため，漢字プリンタ，OCR装置を使用したターンアラウンド処理システムを辞書編集準備室が行ってい

る「国定読本の用語」調査に使用した。OCR 方式の導入によって，50万の長単位語調査が，調査期間・費用ともに大幅に削減できることを確認した。同時に，OCR 方式の改善を目的とした基礎的な分析を行い，人間・機械系の相補処理による仮名・漢字変換方式が，単位切り，漢字の仮名づけ，同語異語判別処理の効率化に利用できることを示した。

また，単語の配列・分類（SORT）処理において，キーの並列指定への拡張，会話処理の採用，キー情報及び二次情報の辞書からの引用ができることを明らかにした。特に，会話処理の導入は，ターンアラウンド時間の短縮と試行処理への道を開き，閉じたソート処理から開いた形式への移行を容易にする。さらに，キーの辞書化は，付加情報の均一化から各種の調査結果の統一的見方を可能にする。付加情報の基準化は，作成される資料の比較検討の基本的な事項となり，将来のデータベース化のためにも不可欠なものである。

この二つの考え方をもとに，直木賞受賞作品6点について，実用化の実験をかねた KWIC 用例集の作成を開始した。

発表論文

1) 斎藤秀紀「同形異語判別への仮名・漢字変換処理の応用」『研究報告集(7)』(報告85，109-134，1986)。

2) 斎藤秀紀「電子計算機による用語調査法の開発」『国定読本第1期「尋常小学校読本」の用語』(昭和59・60年度文部省科学研究費補助金一般研究A，国定読本の用語の研究，代表者飛田良文，139-147，1986)。

2. 新しい言語処理システム

計算機による言語処理の質を向上し，意味内容にまで立ち入った高次の処理へと進むために，言語理解，推論，言語生成などの過程を情報処理の立場からモデル化する。計算機上に実現されたモデルは計算機の動きとして，モデルの妥当性を確認することができる。すなわち言語研究に，モデル化（理論化）と計算機実験の繰り返しにより理論を精密にしてゆく自然科学・実験科学の方法を用いている。

言語理解の研究は，単一文の理解と文章理解（文脈をなす複数の文）に分けて研究を進めている。単一文の理解には文法規則に基づく構文解析が重要な役割を果たす。60年度は，日本語のように語順のゆるやかな文法を記述することを目的として，確定節文法（文脈自由文法を述語論理の確定節で表す方法）を語順をもたない言語に適用する方法を開発した。文法から述語論理式へ変換するメカニズムは VAX 計算機（東大計算センター）上に実現した。この新しく拡張した確定節文法は，単に文法記述だけでなく，広く推論規則の記述にも用いることができる。

一方，文章理解には言外の情報を補い，文と文の間に意味的な関係を与えるため，対象世界の知識が必要になる。対象世界の知識は計算機内部に静的に蓄えられているだけでは不十分で，入力された文に対して動的に適用されねばならない。そこで知識は辞書のような形を取らずに，すべて述語論理に基づく推論規則の形を用いている。60年度は童話の世界を例に取り物語理解の実験を行った[1)]。実験は VAX 計算機上の演繹システム Duck（エール大学開発）を用いて行った。システムは与えた世界の知識を公理として，入力文との間に次々に定理を導いてゆく。導かれた定理の集合が近似的に物語の理解状態を実現している。実験を通して，この演繹システム上での物語理解のモデルの不十分な点も明らかになってきた。解決すべき点として非単調推論（加えられた公理がそれまで導かれていた定理を消す），確からしい推論，帰納推論などの問題が現れている。次年度は理科の説明文などについても文章理解の実験を行いたい。

1) 田中卓史「物語理解のメカニズム」，情報処理学会自然言語処理研究会資料50-5 (1985)。

3. 装置の導入及び運用に関する研究

前年度に引き続き，電子計算機更新に伴う環境整備の一環として，新システム（ACOS システム 550）の自動運転制御装置と，既存設備間の調整を行った。また，電子計算機の導入後のデータの整合を図るため，総合漢字辞書の作成を開始した。その他，光ディスク装置用ソフトウェアの開発，空調設

備の改善に伴う電子計算機の運用管理面の省力化，教育面の問題点を検討した。

3.1 総合漢字辞書の作成

旧システムから新システムへのデータの移行処理の一貫として，コード変換処理と，コンピュータ処理で標準的な情報を引用できる，総合漢字辞書の作成を開始した。本研究所における機械辞書は，漢字テレタイプライタの盤外字（1967年）用コードブックとしての利用が最初である。その後，高速漢字プリンタの導入（1975年），JIS コードの採用（1978年），日本語入力装置の導入（1980年）など，データ間の変換用として拡張されてきた。しかし，調査の多様化と研究領域の拡大に対応するため，相互参照可能なデータの方向づけが必要になった。このなかには，資料の共有化を図るためのデータベース化も含まれる。共通化には，支援用辞書が必要である。

以上の背景を持つ機械用辞書に対して，1985年の新コンピュータ導入を期に，総合的な漢字辞書の作成と，新国語研メタコードの設定を計画した。これは，過去に作成された漢字属性辞書（言語計量部第二研究室作成）と，漢字コード辞書，メーカ提供の漢字属性辞書の3種を整理総合したものである。辞書の総合化に当たって，基本的な考え方及び辞書項目は，以下のとおりである。

総合辞書作成に関する基本的な考え方

1） 保存データは，現行コードへ変換できること。

2） 新国語研コードを設定し，統一配列基準を設けること。

3） 統一配列基準は，部首順とし，基準は大漢和によること。

4） コードブックは，市販辞書のうち大漢和・新字源・大字典の3種とし，各辞書は相互参照可能なこと。また属性からも検字が可能なこと。

辞書項目の入力予定内容

1） 漢字テレタイプライタ用盤内・盤外字コード。

2） JIS・日本電気・日立・JIS 区点の各コード。

3） 大漢和，新字源，大字典の検字番号・部首・総画・部首内画数・読み

情報。

4) 教育・当用・常用・人名漢字識別記号。

5) 雑誌九十種・新聞・教科書調査における出現度数。

前年度の作業は，日本電気から提供された11,525字のうち，JIS対応漢字について，新字源から，読み・部首・総画・検字番号の各情報を付加し，第一次の修正を行った。また，拡張分3,382字に対し，大漢和・新字源の検字番号の入力準備と，漢字属性情報を付加するための基準を検討した（漢和辞書からの第一次の転記作業は，3,382字中，大漢和870字，新字源1,834字については終了)。続いて，JIS 第一及び第二水準の漢字に付加した新字源情報（旧版昭和54年発行第137版）と，新版（昭和60年発行第230版）の相違点を確認する予定である。

新国語研コード設定の際，条件となるのは，(1)保存データとの互換性を図ること，(2)利用者への便宜を図るため，多くの辞書をコードブックとして利用できること，の2点である。この条件を満たすためには，辞書内に単一配列基準を持ったメタコードが必要になる。メタコードは，新出漢字をコードブックへ追加する際，基本順序，入出力コード双方の変更部分を吸収する。漢字辞書は，メタコードへの統一配列基準を与えるとともに，コードブックとしての役割を満たす。コードブックとしての漢字辞書は，漢字・単語を一意に識別できる番号が付加されていることが必要になる。辞書の選択は，統一配列を決めるために市販辞書のなかで，できるだけ規模の大きいものを選び，新出漢字の追加の際，他への影響の少ないことを前提にした。他の，収容字数の少ない辞書は，実用上のコードブックとして利用する。

統一コードによる配列基準の設定とメタコードの導入は，大漢和の検字番号の整理が必要である。検字番号の設定には，次の作業基準を設けた。(1)新国語研コードの配列順序を規定するため，大漢和の「′」，「″」記号にも検字番号を付けること，(2)補遺版は，しかるべき位置へ漢字を挿入し，これに検字番号を与えること，(3)新出漢字は，枝番号による追加ができること，などである。枝番号には，新出漢字であるか，大漢和に収録されている漢字で

あるかを判別する情報も含まれる。判別情報は，新出漢字の追加にも大漢和の基本配列基準をくずすことはない。将来，中国漢字を追加する際も，同一部首内の総画順序は維持される。

漢和辞典をコードブックとして使用する理由

1) 印字可能な字種と入力対象になる字種間に開きがある。出力できない漢字についても入力対応させる。
2) 外字入力は辞書の検字番号を使用し，入力の標準化と簡易化を図る。
3) 漢字の読みなど，調査に必要な情報を利用する場合がある。漢和辞書にコンピュータ処理辞書・データ索引としての機能を持たせる。
4) 漢字に対する多面的な入力手段を用意する。しかし，コードブックの作成は避ける。
5) 異なった調査間の相互参照辞書として使用する。
6) JIS，漢字辞書の変更，漢字パターンの追加に伴うデータ変更を最少にする。

3. 2 光ディスク装置用ソフトウェアの開発

大量データを長期間保存する媒体は，磁気テープの使用が多かった。しかし，安定性の点で問題があった。光ディスク装置は，磁気テープに代わる大量データを長期間安定的に記録するために導入した。

従来，光ディスクの利用は，イメージ・図形処理が主なものであり，コードデータを直接記録した例は少なかった。このため，実用化には各種の基礎的な実験を行わなければならない。これらの利用環境に対して，前年度は，情報の収集を目的とした各種実験を行った。光ディスク装置に対するプログラム作成作業は，次のとおりである。

1) 光ディスクの信頼性をテストするためのプログラムを開発する。
2) 通信回線上抵触する旧国研コードに対する変換プログラムを作成する。
3) 最適データ処理単位を測定する（現在は 255 Byte 長，40050 件）。
4) 光ディスクで使用できるコードを，旧国研コード，JIS 及び日本電気コード，両者の併用コード，の 3 種とする。

5) 基本システム設計及びプログラム作成のための仕様書を作成する。

D 今後の予定

日本電気から提出された漢字辞書をもとに，新字源・大漢和・大字典からの情報の付加及びディスク処理用のソフトウェアの開発・機能の拡張を行う。作業予定は，以下のとおりである。

1) 空調設備の新設工事に伴う，自動運転制御装置の再調整を行う。
2) 光ディスク装置の基本ソフトウェア開発と応用プログラム利用上の問題点を調査する。
3) 新聞 KWIC を使用した用例検索プログラムの作成と，関係形式データベースの実用化の実験を行う。
4) 機械処理用の漢字辞書について，新コードの設計と漢和辞書からの情報付加を行う。
5) 仮名・漢字変換方式によるデータ入力を応用した，単位切り・読み仮名づけ・同語異語判別処理用プログラムを開発し，各種の実験を行う。
6) ソート処理のプログラムについて，キー情報の指定法の改良を行う。

日本語の対照言語学的研究

A　目的と内容

本研究は，「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなすものであり，日本語を外国語としてとらえ，諸外国語と対照しつつ記述研究を行うものである。本年度は以下の２点に沿って研究を行った。

ａ．　日本語の記述的研究

これまで研究を続けてきた「日本語，ドイツ語，フランス語，スペイン語の基本語彙の比較」については，研究の取りまとめを行い，『日独仏西基本語彙対照表』（報告88）として刊行した。

これと並行して，日本語の音声，特にアクセントについて，その機能を明らかにし，日本語教育の中に正当に位置づけるための予備的研究を行った。

ｂ．　個別対照文法記述のための研究

日本語と個々の外国語との対照研究の一般的方法論を確立することを目指すもので，前年度に引き続き，日本語とドイツ語との動詞結合価の比較を中心に研究を行った。

B　担　当　者

日本語教育センター第一研究室

室長　高田　誠　　研究員　相澤正夫

C　本年度の研究経過

ａ.について

前年度に引き続き，岩崎英二郎・早川東三・子安美知子・平尾浩三・鉄野善資編集『ドイツ基本語辞典』，ジョルジュ＝マトレ著，野村二郎・滑川明彦訳編集『フランス基本語辞典』，高橋正武・瓜谷良平・宮城昇・エンリケ

＝コントレラス編集『スペイン基本語辞典』(いずれも白水社刊) に採録されている基本語彙について，それぞれの訳語に『分類語彙表』(資料集6) で与えられている意味分類コードを引き当てる作業を行い，これまで引き当て困難として残してあったものについても，最終的に担当者 (高田) の主観をもって，一応の分類を行った。

これらの結果を取りまとめ，上記各辞典の編著者，並びに，発行者である白水社の了解を得たうえで，『日独仏西基本語彙対照表』(報告88) として刊行した。

b.について

日本語の側の記述研究は，別項に報告する特別研究「日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究」として独立した。したがって，本年度はドイツ語の側について，前年度に引き続き，ドイツ語雑誌 "der Spiegel" の中からドイツ語動詞の用例を採集し，それぞれの動詞の名詞句支配のありようを記述する研究を行った。

D　今後の予定

a.について

アクセントの機能面に関する研究を発展させる一方，新たに単語の意味記述に関する対照語彙論的な観点からの研究に着手する予定である。

b.について

ドイツ語動詞については当分の間研究を中断し，日本語についての特別研究の方に専念する予定である。

日本語動詞の名詞句支配に関する文法的研究

A 目　　的

日本語動詞の名詞句支配について，動詞結合価理論の立場からの研究を進め，個々の動詞が実際に文を作るときに要求する名詞句の種類とその分布を求め，外国人のための日本語教育における，語彙・文法的側面からの教材開発の基礎資料を提供することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第一研究室
室長　高田　誠　　研究員　相澤正夫

C 本年度の経過

特別研究として計画した3年計画の初年度に当たり，資料の採集のための基本的な枠組みを設定した。

資料としては，総合雑誌，新聞等の比較的「硬い」文章を用いることにした。書きことばを中心とするということである。動詞結合価という観点から見て，場面依存の比較的少ない資料がさし当たって好ましいと考えたからである。話しことばの録音資料のような，場面依存の度合の高いと考えられるものについては，企画を改めて取り組みたいと考えている。

用例は，データとしてコンピュータファイル上に作成することとした。研究室備え付けのパーソナルコンピュータ，N5200モデル05（NEC）のファイル処理ソフトウェアLANFILE 2を用い，用例を入力した。今後，これに名詞句支配の付加情報を入力し，それぞれの付加情報をキーとして検索することによって，必要な用例を得ることができるようにする予定である。

D　今後の予定

次年度は，もっぱら用例の採集を行う予定である。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

A　目　　的

外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について，教授法，教育内容，教材に関する問題点を収集整理し，日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を検討し，日本語教育の内容方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

B　担　当　者

日本語教育センター第一研究室

室長　高田　誠　　研究員　相澤正夫

C　本年度の研究経過

技術者研修の分野において，日本語教育，及びそれに関連する事業を行っている７機関に委員を委嘱し，年度内に２回の日本語教育研究連絡協議会を開催した。これによって，この分野における日本語教育の現状を把握する一方，各機関が相互に情報・意見の交換を行えるような場を提供した。委員を委嘱した機関は，次のとおりである。

国際協力事業団

㈶国際協力サービスセンター

㈳国際交流サービス協会（国際研修課）

㈶海外技術者研修協会

オイスカ産業開発協力団

雇用促進事業団中央技能開発センター

㈱海外技術者研修調査会

第１回協議会（昭和60年11月30日開催）は，各機関の日本語教育に関して全

体を統括する立場の方々に出席を依頼し，研修事業・日本語教育の概要，当面する諸問題などを議題に協議を行った。出席者は，次の5人である。

石崎光夫（国際協力事業団研修事業部管理課長）

岡田恒雄（㈶国際協力サービスセンター業務第二部日本語研修室長）

雨谷弘夫（㈶海外技術者研修協会研修部長）

畑　博道（雇用促進事業団中央技能開発センター技術援助課長）

有馬俊子（㈶海外技術者研修調査会主任講師）

第2回協議会（昭和61年3月24日開催）は，各機関の日本語教育の現場において，実際に教壇に立っている方々，教材開発に携わっている方々に出席を依頼し，特に次の3点に関連する諸問題について協議を行った。

①文型・語彙等の教育内容・到達目標の設定

②到達度の客観的な測定

③教材・補助教材の開発・作成

出席者は次の10人である。

梶山敏子（㈶国際協力サービスセンター）

吉川仲子（国際協力事業団大阪国際研修センター）

柏原淳江（同　兵庫インターナショナルセンター）

西　雅恵（同上）

山田基久（㈶国際協力サービスセンター業務第二部日本語研修室）

中島　清（㈶海外技術者研修協会研修部日本語班）

蛭川泰夫（同上）

石沢弘子（同　横浜研修センター）

渡辺道行（オイスカ産業開発協力団中部日本研修センター）

有馬俊子（㈶海外技術者研修調査会）

D　今後の予定

引き続き，技術者研修の分野の日本語教育を取り上げ，その内容と方法についての調査研究を行う。

日英対照による日本語の発話行為の研究

A 目　　的

日本語教育の目標の一つには，学習者に日本語の運用能力を身につけさせることがある。このためには，日本語が発話の実場面でいかなる運用の規則に支配されているかを明確にとらえ，学習者の母語における場合と比較対照し，両者の違いを把握していることが必要である。本研究は，日本語の発話行為（Speech Acts）を話し手・聞き手に関与する側面並びに発話行為の成立する場面・文脈を焦点を当てて研究し，英語の場面と対照させ，より普遍的側面と個別的特性とを明らかにし，上述の目的のための基礎資料を得ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

室長　上野田鶴子（60. 9.15まで）　室長（取扱）南不二男（60. 9.16から）

C 本年度の経過

(1) 日本語における発話行為に関する問題点を概観し，話し手・聞き手に関与する側面並びに発話行為の成立する場面・文脈について研究する。

(2) 日本語について得られた結果を英語の場合と比較・対照し，検討する。

(3) 発話行為の普遍的側面と個別的特性を明らかにする。

前年度に引き続き，上記(1)，(2)，及び(3)の手順により命令・依頼の遂行機能を成立させる直接的並びに間接的発話行為の研究を続けた。

D 今後の予定

これまでの研究をまとめ，報告することを予定している。

日本語とインドネシア語との対照言語学的研究

A 目　　的

日本語とインドネシア語との比較・対照研究を行い，インドネシア語を母語とする学習者に日本語を系統的且つ効果的に教授する際の指針として役立ち得る両言語の対照文法の基礎を築くことを目的とする。本年度は，次のテーマに関して，日本語とインドネシア語との比較・対照研究を行った。

1)　日本語とインドネシア語の倒置構文の比較

2)　日本語とインドネシア語の受動構文の比較

B 担 当 者

日本語教育センター第三研究室

室長　正保　勇

C　本年度の作業

1)　昨年度に引き続き，日本語とインドネシア語の倒置構文を，主として次のような観点から考察した。

a）　日本語の後置文と談話法的省略文との関係

b）　情報構造的観点より見たインドネシア語の倒置構文

以上のような観点から考察を行い，次のような知見を得た。

㋐　後置文は右方転位変形（Right Dislocation）の結果生じたと考えるよりもむしろ，久野暲が主張するように，二つの省略文の連結と考えられる。

㋑　久野暲は，「馬鹿だよ，山田は。」のような後置文においては，前半の部分は，先行する言語文脈あるいは非言語的文脈による談話法的省略であり，後半の部分は，前半の「馬鹿だよ」を先行詞とした，言語的文脈

による構文法的省略であると考えている。しかし「子供たちは変った模型がほしいのです，日本にないような」（井上和子〈1978〉『日英対照　日本語の文法』大修館書店）という例においては，後半部が前半部の何を先行詞とした省略であるかが，先に挙げた例ほど明らかではない。さらに「僧で，ございますわ。相遠寺の，跡取りの」（有黒頼義『風熄まず』）という例を考え合わせると，後置文の後半部はそれ自体で独立した文であり，そこに生じている省略は，談話法的省略と同様に取り扱ってもよいように思われる。

㋒　後置文の後半部は，前半の部分で言い足りなかった要素についての敷衍・詳述，もしくは，前半の部分で言い落とした要素の補足となっており，これらの機能は，談話法的省略により生じた文の一部が有している機能と重なり合うものである。

㋓　インドネシア語の自動詞構文においては，前置した動詞に -lah が付いているもの，もしくは，-lahを付けることが可能な構文は倒置構文とみなせるが，そうでないものは，倒置構文ではなく，後置したように見える名詞句は，深層構造においても，その位置にあったと考えられる。そして自動詞の倒置構文においては，後置された主語は旧情報であることが圧倒的に多い。

㋔　インドネシア語の受動構文においては，動詞句が前置することは非常に数が少なく，また，そうなる場合には，受動構文の主語は常に旧情報でなければならない。

2)　日本語とインドネシア語の受動構文の比較を行うための枠組みを構築するために，内外の受動構文関係の文献に当たるとともに，日本語とインドネシア語から，例文の予備的収集を行った。

D　今後の予定

上記(2)における枠組構築のための予備的作業の過程で，これまでインドネシア語において受動構文として取り扱われてきたもののうちの一部が受動構

文とは異なるものであることが明らかになった。そこで，日本語とインドネシア語の受動構文を比較するに先立って，インドネシア語における受動構文と，これとの区別が問題となる能格構文との区別立てをする必要がある。これが次年度に行うべき課題の一つである。

日本語と中国語との対照言語学的研究

A　内容と目的

漢字は，日中でその共通の性格を残しながらも，言語と時代と国家・地域によって異なった役割・機能をになわされて，今日まで使用されている。この研究では，現代日本語と現代中国語において使われる漢字の諸相について比較対照を行い，日本語教育及び中国語教育に役立てることのできる基礎的な資料を作成することを目的とする。

調査研究は次の四つについて行う。

a．　各種漢字資料，各種語彙資料の収集整理

b．　字種を中心とする日中漢字対照表の作成

c．　語と漢字の対応関係を中心に，日中両語間における字種，字体，用法・意味等についての比較考察

d．　漢字に関する研究文献の収集

B　担　当　者

日本語教育センター第四研究室

室長　菱沼　透

C　本年度の経過

1.　前年度に作成した「日中漢字対照表」に，音訓，中国音，使用度数順位などを追加した。

2.　「日中漢字対照表」の中の漢字について，それぞれの漢字によって表記される語を収集整理し，漢字表に対応する語彙対照表の作成を進めた。資料及び範囲は，『日本語教育のための基本語彙調査』の母体となった1万2千語と北京語言学院『漢語詞彙的統計与分析』中の上位1万2千語であ

る。

D　今後の予定

上記1，2の作業を完成し，「日中基本漢字・基本語彙対照表」（仮称）としてまとめる。

日本語教育のための照応現象に関する比較・対照的研究

A　内容と目的

日本語教育に資することを目的として，以下の調査研究を行う。

a．　日本語の照応現象についての記述的研究。

b．　外国語（英語，インドネシア語，中国語，ポルトガル語）の照応現象についての記述的研究。

c．　a，bに基づき，日本語と外国語との，照応現象に関する比較・対照研究を行い，日本語の照応現象についての，学習指導のための資料を得る。

B　担　当　者

日本語教育センター

第二研究室　室長　上野田鶴子（60. 9.16部長昇任）　第三研究室　室長　正保勇　　第四研究室　室長　菱沼透　　日本語教育指導普及部日本語教育研修室　室長　田中望　　同日本語教育教材開発室　室長　日向茂男

C　本年度の経過

1.　映画シナリオ『男はつらいよ１』（語学春秋社，日英対訳版）を，話しことばの分析・検討の資料として利用するために，出典情報などを付し，機械処理を行い，内部資料としてまとめた。

2.　『男はつらいよ１』（日英対訳版）をもとに，インドネシア語訳，中国語訳，ポルトガル語訳を作成し，それぞれについて比較，検討を行った。

なお，本研究は本年度をもって一応終了する。

日本語教育研修の内容と方法についての調査研究

A 目　　的

外国人に対する日本語教育に関して，教員の資質能力の向上を図ること，また，教育の効率化を目ざすことは，現在大きな社会的要請となっている。本研究は，教員研修一般についてそのあり方を検討するとともに，当研究所で実施している研修に対して適切な指針を樹立するため，具体的な研究及びその方法の開発を行うことを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長　田中　望　　研究員　石井久雄　古川ちかし（60.10. 1から）　研究補助員　早田美智子　　事務補佐員　下羽勝美

C 本年度の経過

本研究は内容を二分し，

1. 日本語教育の評価及び測定に関する研究
2. 研修効率向上に資するための調査研究

とする。

1. 日本語教育の評価及び測定に関する研究

日本語教育の研修の内容として，どのようなものが適当であるかということを，日本語教育研修室の担当する日本語教育研修をとおして，検討した。その一環として前年度に引き続き，『日本語教育論集　―日本語教育長期専門研修昭和59年度報告―２』（Ａ５，105ページ）を刊行した。昭和59年度の日本語教育研修の報告と合わせて，昭和59年度までの日本語教育長期専門研修の修了生の論文４篇，すなわち，

足高智恵子（昭和59年度修了生），池上摩希子（昭和59年度修了生）
理科系の学生のための読解教材に関する一考察

河東　郁子（昭和59年度修了生）　とりたて詞としてのダケ，バカリの用法

奥津　令子（昭和59年度修了生）　聴解を優先する教授法の応用

小林　悦夫（昭和58年度修了生）　「中国帰国者」と日本語教育

を収録した。これによって，修了生の研究能力の水準を知ることができる。

同論集には，また，

田中望　日本語教育のためのコースデザイン法

が併録されている。これは，昭和59年度日本語教育長期専門研修における講義録に基づくもので，日本語教育の基本的な枠組みと手順をまとめており，日本語教員のコースデザイン上の基本的能力を示唆する資料となる。

なお，従来，教員研修のための教材に関する研究を行い，プログラム教材を発行してきたが，本年度は前年度に引き続き，プログラム教材の統合化，体系化など，基礎的な事項を検討するにとどまった。

2.　研修効率向上に資するための調査研究

研修の需要・供給の実態について，的確な情報・知識を得るために，従来日本各地の実地調査を行ってきたが，本年度は実施しなかった。

D　今後の予定

次年度には以下のことを予定している。

1.　日本語教育の評価及び測定に関する研究

『日本語教育論集　3』の発刊を予定している。昭和60年度日本語教育長期専門研修修了生の論文数篇を収録する。

日本語教育長期専門研修及び日本語教育夏季研修のあり方について，見直しをする。

2.　研修効率向上に資するための調査研究

研修修了者の動向を調査し，研修実施のための資料を得る。各地の実地調査は行わない。

国内の日本語教育機関におけるテストに関する基礎的調査

A 目　　的

外国人の日本語学習者に対する標準的な日本語能力試験の必要性は年々高まっている。特に，外国人留学生のための能力試験の標準化は急務である。しかし，現状では測られるべき能力の設定の仕方がまちまちであり，その方法にも標準的なものがあるとは言えない。本調査は，現在国内の日本語教育機関で施行されている種々のテストを収集し，その内容を検討するとともに，測るべき能力を特定し，その評価手法を開発するための基礎的調査である。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長　田中　望　　研究員　石井久雄　古川ちかし（60.10. 1から）　研究補助員　早田美智子　　事務補佐員　下羽勝美

C 本年度の経過

本年度は，以下のような予備的な調査，研究を行った。

1. 収集した各種テストのうち，私費外国人留学生統一試験及び日本語能力試験について内容を検討した。
2. テスト項目を検討するに当たって，外国人の日本語能力についてその基本的な能力を各要素別に検討した。
3. 外国人インフォーマントに試行するためのテスト（主に口頭テスト）を準備，検討した。
4. 同試行テストで得られるデータの測定法，評価法について検討した。

D　今後の予定

次年度は以下のことを予定している。

1.　前年度に引き続き，各種テストの収集，検討を行う。この際，諸外国での第二言語能力試験も検討の対象とし，国内の試験との比較対照も行う。

2.　テスト項目の検討に当たっては，各要素の集合からは特定できない総合的な能力について検討してゆく。

3.　前年度に引き続き，外国人インフォーマントに試行するためのテストを準備し，試行する。この際，1.2.の結果に基づいて，筆記試験についても準備，試行を行う。

4.　インフォーマントの学習背景，言語環境調査を行うことを含めて，試行テストの測定法，評価法の信頼性を検討し，修正を加えてゆく。

日本語教育教材開発のための調査研究

A 目　　的

既存初級教科書及び当研究所作成の日本語教育映画基礎編について語彙・構文・文法上のいくつかの単位区分及び場面の比較対照を行い，その結果を教材開発に役立てると同時に資料として提供する。語彙教材開発のための日本語語彙の意味論的分析を進める。これらの成果を応用して教材試作実験を行い，また教授者向けの資料を作成提供する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長　南不二男　　部長　川瀬生郎（60. 9.15まで）　　上野田鶴子（60. 9.16より）　　室長　日向茂男　　研究員　中道真木男　　文部技官　清田　潤

C 本年度の作業

1.　日本語教育映画30巻分のせりふのワードプロセッサ・データに，付加情報として，日本語教育的観点から仮設定した下位分類について入力作業をした。

2.　既に発表されている各種の意味分析結果を利用して記述の効率化に役立てるための研究の一部として，意味記述に用いる用語の統一を図る方法の検討に着手した。本年はその第一段階として，既存国語辞典等で語釈に用いられている用語の実態を，ワードプロセッサを用いて調査する方法を開発した。

D　今後の予定

日本語教育映画基礎編の通巻文型表を作成するため，単位切り，文型の抽象化，場面構成要素の拾い出しなど各種基準の設定を行い，計算機入力をして一覧表を完成させる。入力済みデータはデータベースとして保存し各種の使用に供する。既存初級教科書のうち数種類についてもこのような操作を施す。

多種類の情報媒体に同一テーマの学習内容を盛り込んでおき，それらを適切に利用することで相乗的な効果を生み出す方法について基礎的な考察を続行し，またそれによる教材作成のための指針を構築する。

意味記述の手法開発の一環として，既存国語辞典等で用いられている意味記述用語の実態調査を試行する。

国語及び国語問題に関する情報の収集・整理

A 目　　的

国語に関する学問の研究成果一般を知り，合わせて関係学会の動向，言語及び言語生活に関する世論の動きをとらえるために，国語及び国語問題に関する情報を収集・整理し，国語研究の基礎的資料を整備する。このために次のことを行う。

1. 刊行図書・雑誌論文等の調査を行い，分類別文献目録カードを作成する。
2. 諸新聞から関係記事を切り抜いて整理・製本し，研究資料を作成する。
3. 『国語年鑑』を編集する。

B 担 当 者

言語変化研究部文献調査室

部長　飛田良文　　研究員　田原圭子　伊藤菊子　中曽根仁

C 本年度の作業

前年度に引き続き，昭和60年度に発行された各種文献を調査し，情報を収集・整理した。昭和60年１月から12月までの情報については分類別文献目録カード及び「新聞所載国語関係記事切抜集」37冊を作成した。これらの文献の目録は，その他の資料・情報とともに『国語年鑑』〈昭和61年版（1986)〉に掲載する。

『国語年鑑』は，昭和60年版（1985）を編集した。昭和59年１月から12月までの国語に関する研究成果，関係学会の動向，ことばに関する世論などを主な内容とし，次の各部に分けて編集し，昭和60年８月に刊行した。

第一部展望　「話しことば」「国語学」「国語政策」「国語教育」「海外にお

ける日本語の研究と日本語教育一ソ連(2)一」「言語関連諸科学一翻訳とことば一」など18項目。

第二部文献　刊行図書（1,029件），雑誌論文（2,560件），新聞記事（主な記事のみ298件）の文献目録ほか。

第三部雑報　各学会・関係諸団体（75団体）の活動報告，59年度文部省科学研究費による研究題目（233件）・刊行費補助による学術図書（33件）一覧ほか。

第四部国語関係者名簿　国内1,721人，国外92人。

第五部資料　「国語審議会仮名遣い委員会試案　改定現代仮名遣い（案）」「ことばに関する放送（おもな番組）」ほか。

索　引　文献の部（刊行図書，雑誌論文，新聞記事）の編著者名索引である。

なお，本年度は，『国語年鑑』昭和29～60年版に掲載の，国語関係者名簿（約3,000件）及び文献目録の著編者名のうち難読氏名（約4,000件）を，電子計算機に入力し，次の「名簿資料」を作成した。

1. 国語年鑑掲載国語関係者総合名簿（校正中）
2. 名簿掲載者氏名一覧（校正中）
3. 国語年鑑掲載文献著編者名難読氏名一覧

これは，今後『国語年鑑』編集のための資料にすると共に，別掲（109ページ）の文部省科学研究費による「国語学関係分野別文献総合目録（刊行図書）」の著編者別文献索引作成に利用しようとするものである。

○入力準備作業

(1) 国語年鑑掲載国語関係者総合名簿については，その後の訂正・確認を行い，姓名，姓名のよみ，掲載年，生年月・出身県，学歴・学位，専門，役職，備考の8項目を基礎データとする入力原稿を作成した。

(2) 国語年鑑掲載文献著編者名難読氏名一覧については，本年度は，昭和49～60年版掲載の難読氏名リストをカード化し，原典の奥付，掲載誌，各種人名録の調査及び出版社への問い合わせなどにより，姓名の

「よみ」の確認を行い，入力原稿を作成した。

○入力は外注によった。

次年度以降は，1．と2．については，国語年鑑61年版以降の補充を，3．については，48年版以前の難読氏名リストを作成し，それぞれ追加入力する。

以下，国語及び国語問題に関する昭和60年の情報の傾向を知る手がかりとして，採録した文献の冊数（または点数）を項目別に示す。（　）内は59年の数である。

外国発行の刊行図書・雑誌論文等については，その採録範囲を日本語の研究及び日本語教育に関するものに限定した。

Ⅰ　刊行図書の調査

国語関係の刊行図書について，書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数，並びに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては，『日本全国書誌週刊版』（国立国会図書館編），その他から情報を補い，総数1,228冊についての分類別目録カードを作成した。

刊行図書の分類とその冊数

国語（学）	39	(25)
国語史	26	(49)
音声・音韻	11	(15)
文字・表記	16	(9)
語彙・用語	60	(37)
文法	9	(17)
文章・文体	13	(13)
方言・民俗	50	(46)
ことばと機械	2	(7)
コミュニケーション		
コミュニケーション一般（言語生活）	27	(17)
言語技術（話し方・書き方）	38	(17)
マス・コミュニケーション	1	(2)
国語問題	7	(3)
国語教育	68	(131)
外国人に対する日本語教育	15	(23)
言語学その他	51	(46)
辞典・用語集		
辞典・用語集	148	(86)
索引	17	(23)
資料	145	(127)
計	743	(693) 冊
追補（昭和59年12月以前刊行分）	485	(333) 冊
総計	1,228	(1,026) 冊

なお，国文学関係の刊行図書については，作品の本文及び注釈に関するも

の190冊（うち追補分71冊）の目録カードを作成した。

Ⅱ　雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，並びに寄贈された大学，学会，研究所などの刊行物や雑誌から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月及びページ数を記載したカードを作り，分類別目録カードを作成した。採録した論文・記事の総数は，4,043点である。（連載物については各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。）

1　一般刊行雑誌，及び大学・研究所等の紀要報告類

a．一般刊行雑誌（学会誌等を含む）…… 506（469）種

国語・国文・言語ほか	218	(197)	週刊誌・総合誌	1	(1)
方言・民俗	17	(14)	文芸・詩歌・芸能	3	(2)
国語問題	6	(6)	その他（教育・社会学・心理学ほか）	100	(80)
国語教育	25	(26)	臨時に入った雑誌	21	(37)
日本語教育	6	(3)	外国誌	82	(77)
マス・コミ関係	12	(10)			
外国語	15	(16)			

b．大学・研究所等の紀要・報告類…… 346（359）種

2　論文・記事の分類とその点数

国語（学）	197	(167)	国語問題	117	(80)
国語史	85	(117)	国語教育	1,110	(925)
音声・音韻	130	(112)	外国人に対する日本語教育	124	(125)
文字・表記	66	(94)	言語（学）	336	(237)
語彙・用語	533	(335)	資料	17	(30)
文法	198	(206)	書評・紹介	134	(146)
文章・文体	196	(183)	計	3,827	(3,448) 点
古典の注釈	93	(53)			
方言・民俗	176	(218)			
ことばと機械	54	(50)	追補（昭和59年12月以前発行分）	216	(205) 点
コミュニケーション	213	(261)	総計	4,043	(3,653) 点
マス・コミュニケーション	48	(109)			

Ⅲ　新聞記事の調査

下記の諸新聞から，関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し，資

料として保存し，閲覧に供している。

切り抜き点数は3,872点で，その内訳は次のとおりである。

1　新聞の種類と切り抜き点数

日（夕）刊紙		
朝　日	528	(725)
毎　日	553	(633)
読　売	573	(485)
東　京	493	(503)
サンケイ	312	(429)
日本経済	378	(420)
北海道	521	(481)
西日本	259	(290)

週刊・その他		
日本読書新聞*	0	(26)
週刊読書人	62	(78)
図書新聞	42	(27)
新聞協会報	36	(38)
教育学術新聞	15	(11)
その他	100	(104)
計	3,872	(4,250) 点

*(日本読書新聞は休刊)

2　月別の切り抜き点数

1月	276	(317)	2月	328	(332)	3月	324	(388)
4月	327	(372)	5月	351	(402)	6月	303	(403)
7月	366	(378)	8月	242	(259)	9月	306	(323)
10月	323	(400)	11月	356	(357)	12月	370	(319)

3　新聞記事の分類とその点数

国語（学）一般	406	(405)
音声・音韻	28	(60)
文　字		
文字・表記	56	(65)
活字	8	(7)
語　彙		
語彙一般	176	(151)
各種用語	60	(60)
新語・流行語・隠語	152	(157)
外国語・外来語	130	(149)
辞書	58	(85)
問題語・命名	145	(183)
人名・地名	207	(186)
文　法	15	(15)
文　体		
文体・表現	60	(111)

方　言		
方言一般	19	(44)
方言と標準語	10	(12)
各地の方言	87	(97)
言語生活		
言語生活一般	114	(171)
ことばの問題	72	(40)
ことばづかいの問題	71	(64)
敬語の問題	30	(61)
情報化社会	88	(—)
言語活動		
言語活動一般	36	(31)
話すこと（聞くこと）	63	(49)
書くこと（読むこと）	44	(57)
読書	92	(104)
ことばと機械	120	(112)

国語問題		
国語問題一般	18	(25)
表記の問題		
表記一般	12	(21)
常用漢字など	4	(8)
仮名遣い	53	(18)
送り仮名	0	(0)
仮名書き	2	(4)
横書き・縦書き	7	(6)
人名・地名の表記	44	(76)
外来語表記	16	(21)
ローマ字	6	(3)
国語教育		
国語教育一般	37	(67)
学習指導の問題		
学習指導一般	8	(17)
話す（聞く）	7	(1)
読む（読書指導）	41	(32)
書く（作文指導）	15	(17)
文学・古典教育	9	(4)
特殊教育	15	(20)
視聴覚教育	3	(7)
学力テスト	32	(26)
幼児教育	29	(34)
海外帰国子女教育	90	(37)
ローマ字教育	0	(0)
言語学		
言語学一般	67	(109)
外国語一般	51	(77)
比較研究	39	(48)
翻訳の問題	42	(52)
外国語教育	124	(160)
外国語に関する紹介ほか	52	(53)
日本語の研究と教育	183	(212)
マス・コミュニケーション		
マス・コミ一般	11	(54)
新聞	25	(28)
放送	43	(40)
広告・宣伝	49	(44)
出版	82	(109)
書評・紹介ほか	309	(344)
計	3,872	(4,250) 点

切り抜き点数は，前年より378点少なかった。（主な記事は『国語年鑑』〈昭和61年版〉に掲載）。本年の主な動向を示す。

国語審議会の「改定仮名遣い(案)」が２月12日の各紙に掲載された。これに関する意見が，文化欄やコラム欄，投書欄などに取り上げられた。

若い人達に浸透している“丸文字”の是非について，各紙の投書欄に読者の意見が掲載された。これに関しては，前年，各紙の家庭欄や社説などに，その流行についての指摘があった。

「婦人差別徹廃条約」が「女子差別徹廃条約」と名称変更され，「婦人」「女子」という呼称が話題になった。各紙の家庭欄やコラム欄でこの呼称問題を取り上げた。２月23日の衆議院予算委員会で，石本環境庁長官は，野党議員の「女子と婦人と女性の違いを教えてほしい」という質問に対して，「婦人といえば一定年齢以上の女子か女性を表現するものと考えている。婦人より

女子の方が幅が広い。女性というのは男性と対比して性の区別の意味で使われている」と答弁した。(2.24. 朝日新聞)

なお，本年から「言語生活一般」の下位分類として「情報化社会」の項を新たに設けた。

〔付　所外からの質問について〕

昭和60年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

月 / 計	60年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	61年 1月	2月	3月
1,019	94	94	95	86	76	84	93	75	75	97	73	77

(前年度の質問件数は992件であった。)

質問の内容は例年どおり多方面にわたっていた。件数の多かったものを示すと次のとおりである。用字用語について348件（用語一般149件，用字一般80件，ゆれのある語51件，同音類義語27件)，漢字の読み155件，(姓名に関して24件)，語源67件，字体47件，語（字）の意味37件，敬語33件，送り仮名32件，仮名遣い31件，ことわざの由来25件などである。

上記の件数のうち，同一（又は，同類）の内容について2回以上質問を受けた事項を仮名遣い，送り仮名，字体などから例示する。

仮名遣い		女・女	2	味わわせる・味あわせる	2
ず・づの使い分け	8	塚・塚	2	行（イク・ユク）	2
じ・ぢの使い分け	7	戻・戻	2	ご用達（タツ・タシ）	2
こんにちは	3	辶・辶	2	十～（ジッ～・ジュッ～）	2
送り仮名		同音類義語		出生（ショウ・セイ）	2
行（な）う	4	体制・態勢	3	ニホン・ニッポン	2
恥ずかしい	2	夏期・夏季	2	マチガイ・マチガエ	2
字体		発音にゆれのある語			
吉・吉	2	大～（ダイ・オオ）	5		

また，くり返しの「々」は文字なのか，名称があるのかなどが7件，原稿用紙の書き方5件，「ケ」を現代の表記に用いることの是非とその由来につ

いて４件，などが件数の多い事項であった。

なお，研究所及び研究所の刊行物についての照合が16件あった。電話による質問のほかには，はがき，封書による質問が14通，直接来所しての質問が２件あった。

以上の件数は，すべて文献調査室で受けた質問で，研究員等が個人的に受けた質問は含んでいない。

文部省科学研究費補助金による研究

日仏語の基本語彙の対照言語学的研究

（代表　野元菊雄）〈総合研究(A)〉

〈研究目的〉

フランス語と日本語の基本語彙をその使用される場面との関係において比較することを目的とする。具体的には，①日仏両語の基本語彙の意味分野別の比較対照表を作成し，②そのうち政治関係の分野について，語彙の使用条件等を比較検討する。

〈研究組織〉

研究代表者

野元　菊雄

研究分担者

会津　　洋　（早稲田大学語学教育研究所教授）

青井　　明　（国際基督教大学助教授）

石綿　敏雄　（茨城大学教授）

泉　　邦寿　（上智大学教授）

川口さち子　（早稲田大学語学教育研究所講師）

川口　順二　（慶應義塾大学助教授）

木下　光一　（白百合女子大学教授）

CHICHE, Didier

鈴木　シルヴィ（玉川大学講師）

田島　　宏　（明治大学教授）

田中　　望　（日本語教育指導普及部日本語教育研修室長）

玉村　文郎　（同志社大学教授）

寺村　秀夫　（筑波大学教授）

遠山　一郎　（早稲田大学助教授）

DHORNE, France（青山学院大学講師）

長嶋　善郎　（独協大学教授）
林　　大　（名誉所員）
松原　秀一　（慶應義塾大学教授）
三宅　徳嘉　（学習院大学教授）
宮島　達夫　（言語体系研究部第二研究室長）
六鹿　　豊　（白百合女子大学講師）
早田美智子　（日本語教育指導普及部日本語教育研修室研究補助員）

〈研究協力者〉

下記〈研究経過〉①の「意味分野別日仏語基本語彙対照表」作成のためのパーソナルコンピュータ操作等について，日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室清田潤の協力を得た。また，研究の全般にわたって LAMARRE, Christine の協力を得た。

〈研究経過〉

本年度は，研究の最終年度に当たるので，全体のまとめとして以下の研究報告を刊行した。

① 資料「意味分野別日仏語基本語彙対照表」の改訂版及び同索引。

昨年度までに作成した「意味分野別日仏語基本語彙対照表」の誤りを訂正しより見やすい形の表に改訂した。また，そこに収録されているフランス語語彙のＡＢＣ順索引を作成した。

② これまでに進めてきた語彙関係の研究を論文９篇にまとめた。論文は以下のとおりである。

受動形日仏対照の一考察　―文芸作品とその仏訳とを比べて―
（会津　　洋）

とき，と／quand の語彙的対応について（青井　　明）

対談相手の発言を確認する表現について　―日本語のインタビューとフランス語のインタビューの分析―（川口さち子）

語形と語義の体系性　―日本語とフランス語の動詞転成合成名詞の対照―（玉村　文郎）

Préverbe *com-* について（遠山　一郎）

「知る」，「分かる」と「savoir」，「connaître」

—対照言語学的一考察—（France DHORNE）

移動動詞と格・前置詞（宮島　達夫）

日本語とフランス語の談話構造の比較　—政治関係のインタビューの場合—（Sylvie GILLET，田中望，早田美智子）

Sens et fonctionnement de TOKORO（TERAMURA Hideo）

以上の①，②は『日仏語の基本語彙の対照言語学的研究論集』として刊行した。

国定読本の用語の研究

（代表　飛田良文）〈一般研究(A)〉

〈研究目的〉

文部省著作の小学校用国語教科書，いわゆる国定読本第1期～第6期（明治37～昭和24年まで使用）の文脈付き用語索引を作成し，その分析をとおして，その用語が標準語の確立に果たした役割を明らかにする。また，用語索引作成のための，電子計算機利用の新しい方法の開発を試みる。

〈研究組織〉

研究代表者

飛田　良文　（言語変化研究部長・国語辞典編集準備主幹）

研究分担者

林　　大　（名誉所員・国語辞典編集準備調査員）

見坊　豪紀　（国語辞典編集準備調査員）

斎藤　秀紀　（言語計量研究部第三研究室長）

高梨　信博　（言語変化研究部第二研究室研究員）

〈研究経過〉

研究対象とした国定読本は下記のとおりである。

第1期（明治37年より）　尋常小学読本（イエスシ読本）　8冊

第２期（明治43年より）	尋常小学読本（ハタタコ読本）	12冊
第３期（大正７年より）	尋常小学国語読本（ハナハト読本）	12冊
第４期（昭和８年より）	小学国語読本（サクラ読本）	12冊
第５期（昭和16年より）	ヨミカタ	２冊
	よみかた	２冊
	初等科国語	８冊
第６期（昭和22年より）	こくご	４冊
	国語	11冊

第１期・２期の国定読本については，用語の分析を行うため，国語辞典編集準備室で採集してあった用例カードをもとに集計カードを作成し，使用度数・表記・意味コードを記入した。

第１期の用語については，注目すべき用語の分析及び各種の語彙表を作成した。語彙表は以下の４種である。

①度数順語彙表

②品詞別語彙表

③意味分類語彙表

④漢字用法一覧表

第２期の用語については，意味体系の分析を行った。

第１期の成果については，報告書「国定読本第１期『尋常小学読本』の用語」にまとめた。

第３期については国定読本の原文データとOCRシート（OCRは光学文字読み取り装置のこと。Optical Character Reader）を読み取って作成した単位切りデータとをマッチさせて，原文データに単位切りを加えた。次に，単位切りの誤りを修正し，JISコード順排列のKWICを作成した。

第４期～６期については，入力原文及び単位切りの修正を行った。

〈「国定読本第１期『尋常小学読本』の用語」〉

報告書「国定読本第１期『尋常小学読本』の用語」は次の内容からなっている。目次は以下のとおり。

はじめに
Ⅰ　国定読本第１期の調査の概要
(1)　尋常小学読本について……飛田　良文……　1
国定読本とは
国定読本第１期の書誌
編纂者
編集方針
底本
誤植
用語の特色
人称代名詞と親族名称
注目すべき用語
時代思想の反映
(2)　特色ある用語・表記……見坊　豪紀……　7
Ⅱ　国定読本第１期の各種語彙表
(1)　度数順語彙表……飛田　良文……　17
(2)　品詞別語彙表……飛田　良文……　31
(3)　意味分類語彙表……林　　大……　99
(4)　漢字用法一覧表……高梨　信博……　115
Ⅲ　電子計算機による用語調査法の開発……斎藤　秀紀……　139
付表　国定読本第３期 KWIC 索引見本……　149

国語学研究の動向の調査研究

（代表　佐竹秀雄）〈一般研究(A)〉

〈研究目的〉

近年，国語研究は，研究領域がひろがり，研究者数，研究発表数が増大している。研究テーマも専門化し，細分化して全体の傾向がつかみにくい現状である。そこで，国立国語研究所編『国語年鑑』をもとにして，過去33年間の研究成果の国語学研究文献総合目録を作成し，それによって国語学研究の

動向について分析と展望を行うことを目的とする。

具体的には，『国語年鑑』昭和29～61年版の文献目録刊行図書の部約3万件を統合して，「音声音韻」「文字表記」「語彙用語」「文法」「国語問題」など，約20項目の「分野別文献総目録」を作成する。そして，それと，それをもとに作成できる索引とを利用して，分析・展望を行い，国語学研究の動向を明らかにする。

〈研究組織〉

研究代表者

佐竹　秀雄　（言語計量研究部主任研究官）

研究分担者

野元　菊雄　（所長）

飛田　良文　（言語変化研究部長）

田原　圭子　（言語変化研究部研究員）

伊藤　菊子　（言語変化研究部研究員）

〈研究経過〉

研究の初年度に当たる本年度は，国語学研究文献総合目録を作成するためのデータ（文献データ）の作成を中心に進めた。文献データの作成に当たっては，コンピュータに入力する方法を取った。これによって，データの検索・ソート（配列並べかえ）などが容易になり，文献データをさまざまな角度から分析することが可能になっている。文献データ作成のために今年度に行った作業は，概略次のとおりである。

(1)　コンピュータ入力のための原稿作成。

(2)　データ入力。

(3)　データ校正。

(4)　データ追加・修正のためのシステム開発。

(5)　コンピュータ端末を使っての修正作業。

なお，文献データには，単に書誌学的な情報が蓄えられているだけでなく，文献の分類コードや著者の読みがなコードなども付加できる形式に整えた。

これは，今後の分析だけでなく，将来にわたって，この文献データを文献検索などにも広く利用できる可能性をもたせるためである。

以上の作業はほぼ予定どおりの進行をみた。その結果，現在約２万５千件の文献データが入力されている状態にある。

〈今後の予定〉

文献データには，一部に，未入力のもの，記載内容にミスのあるものなどまだ不十分なところがある。また，「分野別文献総目録」を作成するためには，分類体系を確立し，分類コード表を作成し，それに基づいて各文献に対して分類配列のためのコードを付加する必要がある。来年度は，文献データ内容の確認，補充，整備を行うとともに，分類コード付加の作業を進める予定である。

方言研究資料の電子計算機による作成および分析に関する研究

（代表　佐藤亮一）〈一般研究(B)〉

〈研究目的〉

『日本言語地図』をはじめとする方言資料の蓄積は今や膨大なものとなっている。本研究はこの方言資料をより有効に生かすために電子計算機を利用する技術を確立し，数量的研究を行うことを目的とする。具体的には

1. 当研究所で行った「方言における音韻・文法の諸特徴についての全国的調査研究」によって得られた資料の一部を電子計算機で利用できる形態に加工し，データベース化する。
2. １．のデータについて電子計算機を用いて言語地図の作成，各地点における活用表などの所要の文法関係の表の作成を行う。
3. 『日本言語地図』(285 項目 2400地点）について50項目を選び，そのデータを電子計算機に入力して，項目間相互の関係・地点間相互の関係などについての数量的研究を行う。

〈研究組織〉

研究代表者

佐藤　亮一　（言語変化研究部第一研究室長）

研究分担者

沢木　幹栄　（言語変化研究部主任研究官）

小林　　隆　（言語変化研究部第一研究室研究員）

白沢　宏枝　（言語変化研究部第一研究室研究員）

〈研究経過〉

研究目的の１．のデータベースを実験的に稼動した。

『日本言語地図』のデータについて分析を加えた。出現度数別の語形数の分布を図表化し，分布の仕方に一定の傾向を見出した。また孤例を多く回答する地点を地図にプロットし，分布について考察した。孤例の回答数によって地点を分類し，それぞれの地点数を算出した。

以上の成果について，報告書『方言研究と電子計算機』を印刷した。

〈今後の予定〉

本年度は３年計画の最終年度に当たる。今後はデータベースを実用的に利用し，改良していくことが必要となろう。『日本言語地図』の数量的研究から得られた所見については，それが285項目全体を通して見られるものであるかどうか，現在のデータ（48項目分）にできるだけ多くを付け加えることによって検証する必要があろう。

日本語教育用学習辞典の記述法に関する研究

（代表　川瀬生郎〈60.11.24まで〉日向茂男〈60.11.25から〉）

〈一般研究(B)〉

〈研究目的〉

外国人に対する日本語教育の必要性は国内外において急激に増大し，学習者の数も増加の一途をたどっている。しかし，一般の学習者が利用できる実用的な日本語学習辞典の整備は極めて不十分な状態にある。

学習辞典は，学習者の目的分野別，補助教材用／独習用，基本語展開用／語数拡大用，初級用／中上級用など各種用途によりその性格・内容を異にす

る。本研究は，当面最も必要性の高い中級段階の学習辞典として「基本語のさらに複雑高度な用法を習得するための辞書（基本語展開用)」と「理解・使用語の数を増すための辞書（語彙拡張用)」の両者について，1．採録語彙の選定，2．記述すべき内容（語義・用法・使用場面・用例・文化的事項など）の両方面に関し具体的な基準を設定することを目的とする。また，本研究は，各種用途に適する辞典の設計法を定めるための基礎的な参考資料を得ることも目的としている。

〈研究組織〉

研究代表者

川瀬　生郎　（日本語教育センター日本語教育指導普及部長.
60.11.24まで）　――総括・基本語彙

研究分担者

南　不二男　（日本語教育センター長）　――言語場面・基本文型

日向　茂男　（日本語教育センター日本語教育教材開発室長.
60.11.25から代表者）　――言語場面・語義記述

正保　　勇　（日本語教育センター第三研究室長）　――外国語辞書

中道真木男　（日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員）
――資料整備・語義記述・基本語彙

〈研究経過〉

本年度は2年計画の最終年次に当たり，上記の目的のために行った研究のうち，特に次の諸点について成果をとりまとめ，資料を印刷した。

1.　辞書の採録語選定に関する問題

日本語教育のための基本語彙として公表されている6種類の語彙表・辞書の採録語彙を対照し，その間の異同を一覧する資料を作成した。この資料の分析から，現実に用いられている語彙表の内容には相当の不一致があり，それは必ずしもそれぞれの語彙表の選定目的の違いから必然的に生じるものではないことが確認された。

各種の目的に沿って辞書を編集するためには，目的別に採録語彙を選定す

る合理的な基準が必要であるが，それを求める際には，使用頻度調査を始めとする客観的資料を各学習目的別に整備することに加えて，特に日本語学習者の立場から，学習指導要素とされる言語要素や現実の言語場面で用いられることの多い語形を立項すること，また，学習の際に各々の語がどのような意味で重要性を持つかを認識し，その認識を選定基準に含めること，などが望まれる。

2.　語義の記述方法に関する問題

日本語教育センター日本語教育教材開発室において開発された手順によって，国語辞典において語義記述に用いられた語の文脈つきリストを作成し，種類・頻度を調査した。

語釈に使用する語は十分に明瞭な意味を持ち，多義などによるあいまいさがなく，多くの人々の間で一致した理解の得られるものに限られるべきであり，特殊なニュアンスを含む語や文学的な効果をもつ慣用的表現などは，語義の輪郭を正確に規定することができず，同時に不必要な喚情的情報をも伝達するおそれがあるので，記述に適さない。この観点から，現在公刊されている国語辞典の語義記述は非常に不統一であり，十分な客観性を備えているとは言いがたい。

語義記述一般，また特に外国人学習者に対して場合によっては翻訳して提示される語義記述のための用語を整理・限定し，意味を定義する作業は膨大なものとなり，直ちに実現することは望みがたいが，そのための基礎的研究は継続して行われるべきである。

3.　外国語翻訳における訳語の選択に関する問題

辞書の記述内容を外国人学習者に提示する際には，外国語によらなければならない場合が多く，当然，語義又は語の指示内容を外国語の単語に置き換える形の説明が含まれる。その対訳語の選択における問題点を，現存する日本語―インドネシア語辞典の実態を例として調査した。

訳語の選択が不適当であるために，指示対象の同定に誤りが生じる場合，指示対象が十分に限定されずより広い範囲が含まれてしまう場合，などが数

多く指摘される。

4.　特定の語を記述する際の問題例

感動詞を例として，その実際の用例を収集し，日本語学習者用辞書に記述すべきことがらを考察した。そのため，日本語教育センター日本語教育教材開発室において作成された「日本語教育映画基礎編　全30巻」のシナリオから，感動詞の用例を採集し，文脈つきリストを作成した。

感動詞のようにその使用条件が場面の状況と密接な関連をもつ語の場合，そのような条件を辞書に記載する方法は未解決の課題であり，辞書における情報提示方法一般を含めて，今後の研究が望まれる。

〈今後の予定〉

本年度の取りまとめに含められた問題のうち「1．語義記述方法の問題」は，日本語教育教材開発室の経常研究テーマに含め，基礎資料の作成を継続する予定である。また，ここに含まれなかった諸問題も，日本語教育教材開発室における「母語別日本語学習辞典の編集」と並行して取り上げられる予定である。

日本語語彙教育のための分類用例集の開発と試作

（代表　南　不二男）〈一般研究(B)〉

〈研究目的〉

外国人に対する日本語教育において，文型という抽象的な枠組みを導入する初級段階は，いわば準備段階にすぎず，実質的な言語能力の開発は，応用文型の補充や，複文などさらに複雑な文の構成法，文章構成法などを扱う中級以上の段階において行われる。そこでは，文型の拡充のためには文型を構成する機能語や文型にあてはめられる具体的な個々の語，複文構成・文章構成のためには接続語など，種々の語の個別的な意味・用法を習得することが主眼となる。これらの語は一般に，多義であったり文脈によって異なる多くの用法をもっており，それらのうち，教授過程のある段階で扱うべき意味・用法と，他の機会に譲るべきものとを選別することは，教師にとって不可欠

の，しかし必ずしも容易でない作業である。したがって，これら基本的な語の用法を網羅し分類した資料が作成され，当面の授業の中で提示すべき意味・用法とその適当な具体例がそこから得られるならば，教師の負担を軽減し教授内容を向上・適性化するために大きく貢献するものとなる。

本研究は，そうした基本語分類用例集を作成する方法を考案し，実際にそれを試作することを目的とする。そこには，利用効率を高めるために有効な各種形式リストの整備と，ワードプロセッサの利用を含む具体的な提示・検索方法，及び用例補充をはじめとする改良手順の用意が含まれる。

〈研究組織〉

研究代表者

南　不二男　（日本語教育センター長）

研究分担者

日向　茂男　（日本語教育センター日本語教育教材開発室長）

中道真木男　（日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員）

土屋　博嗣　（亜細亜大学教養部講師）

〈研究経過〉

２年計画の第１年次に当たり，次の２点について作業を行った。

１．各形式のリストの設計と試作

見出し語ごとにその用例をあげた「辞書形式リスト」の作成方法を開発し，以下に述べる資料から収集した用例についてこの形のリストを作成した。各見出し語の内部で用法ごとに分類を加え，さらに学習者に提示するに適した形に書き直す手順を引き続き検討する。また，この「辞書形式リスト」に基づき，類義語・類義表現を対照させ，意味・用法の違いを知るための「類義表現リスト」，ある発話意図を伝達するために用いられる種々の表現形式を列挙し，そのバラエティを知るための「表現意図別リスト」の形式と作成手順を決定した。

2.　用例採集の実行

現実の言語資料から用例を採集する方針に基づき，ラジオ放送文字化資料，

一般人向け科学技術書，及び日本語教育映画からそれぞれ一部分を取り，見出し語ごとに文脈つきリストを作成した。

〈今後の予定〉

本年度に決定された方針により，見出し語内での用法分類の実行，形態素・語を超える長い言語単位の収集，「類義表現リスト」「表現意図別リスト」の試作，などを行う予定である。また，さらに用例を補充し，必要に応じて分類方法を修正する手順，これらの産物を，印刷物，ワードプロセッサ上のデータ，などの形で利用に供する方法，なども検討する予定である。

古代（的）言語表現の享受と創造——現代日本語における

（代表　石井久雄）〈一般研究(C)〉

〈研究目的〉

われわれの日用の言語にまぎれこんで，非日用的な言語というものも，話・聴・書・読のいずれを問わず，存在する。例えば，文芸作品のなかで，現代の標準的な日本語のなかにあって，古代語的な「おぬし，知ってござるか」，方言的な「おら，知らねえもんだ」，外国語的な「知っているのことよ」，などなど。これらは，文語でも，あるいは現実に存在する言語でも，あり得るようには見えない。むしろ，人為的に作られ，しかも，そうとも反省されずに受け入れられるものであると，思われる。

一つの言語のうちにあって，しかもその言語ではない，そのような言語が存在することを確認し，その実態の概要を記述する，ということを，現代日本語をめぐって，歴史小説・時代小説の会話文につき，行う。くだんの言語が，必ずしも存在しなくともよいにかかわらず，存在しているのは，それなりの表現効果をになっているからである，ということを，あらかじめ見込んでもいる。

〈研究組織〉

石井　久雄　（日本語教育センター指導普及部研修室主任研究官）

〈研究経過〉

1.　資料

以下のように資料を収集した。どのような検討の対象であるか，コメントを加える。

まず，研究の趣旨にそって，次の歴史小説時代小説短編選集。59作家の106作品が収められる。代表的な長編小説などを取ることも考えたが，概観をとらえるためには，短編多数についた方がよかろうと考えた。

日本文芸家協会編『歴史ロマン傑作選』全9冊（講談社文庫）

ただし，長編も参考とすることとし，数作家が扱かったものとして太閤記関係作品。

海音寺潮五郎『新太閤記』（文春文庫）

司馬遼太郎『新史太閤記』（新潮文庫）

吉川　英治『新書太閤記』（講談社文庫）

山岡　荘八『豊臣秀吉　異本太閤記』（講談社文庫）

舟橋　聖一『太閤秀吉』（講談社文庫）

吉田　　豊『太閤記　原本現代語訳』（教育社新書）

その他の長編。特に，上記アンソロジー収録作家のもの。

また，次の作品集。剣客の生涯を画くという，統一的テーマのもとに，10作家の10作品が集められている。

朝日新聞社編『日本剣客伝』全5冊（朝日新聞社文庫）

以上のような歴史・時代小説は，古代の言語を意識しつつ創作されるかも知れないが，それに決定的に拘束されることはないであろう。参考のため，古代語に拘束されるものを，かえりみる。すなわち，次の，作家等による『源氏物語』現代語訳。

谷崎潤一郎（中公文庫）　　円地　文子（新潮文庫）

与謝野晶子（角川文庫）　　田辺　聖子（新潮文庫）

今泉　忠義（講談社学術文庫）　　玉上　琢弥（角川文庫）

以上の全体の参考として種種の古典文芸作品。直接の資料ではない。

2.　知見

図式化してまとめるならば，次ぎのとおり。

1) 現代語として非日用的である時代小説語なるものが，歴史小説・時代小説のうちの会話文について，想定し得る。

2) 作品による異り，作家による異りは，そのどの部分を取っているかという形で，おそらく処理し得る。

3) くだんの言語は，主として，江戸時代の武家のことばとして用いられる。

4) ただし，江戸時代の他の身分の人物のことばとして，あるいは他の時代の人物のことばとして，応用して用いられることもある。

5) くだんの言語は，おそらく，現実に存在しはしなかった。

6) しかしながら，登場人物にその言語が用いられているとき，読者は，おそらく，その言語の非現実性といったものを感じていない。

一例をあげる。池波正太郎『同門の宴』(『歴史ロマン傑作選』第1冊所収)に現れるもの。作品は，江戸時代の武士二人を主人公とし，その市井の生活の一場面にふれる。

わし　おりゃ　われら　おぬし
母者　おまへさま　母御　それがし
たれ　どこぞ　こたび　まこと　ゆるりと　なれど
さよう　おのれ　のう　あい
かわゆい　よい
まいる　もうす　いたす　いかぬ　言うにや及ぶ
…なさる　…ておる　…てつかわす　…てござる　…でござる
…まする　…ぬ　…なんだ　…いでか　…たは
…そうな　…じゃ　…だの　…ぞ
…より　…どの
動詞命令形「よ」
ハ行動詞連用形ウ音便　形容詞連用形音便　形容詞連体形非音便

現代日用的であると認めてよいようなものもあるが，詳細はここには省略す

る。使用例。武士とその母と中間との会話。

「すまなんだな，母者」「お前さまも大変なことで……」

「権次郎。母者を勝手門から……よいな」「心得ておりまする」

町人や農民のことばについては，現代非日用的な表現が全く現れないわけではないが，むしろ，べらんめえ口調や転訛の表現効果といったものを，考慮しなければならない。ということは，現代の日用的な表現をも含め，あらゆる文体について，表現上の地位を検討しなければならないということである。本研究は，そうしたところまでは検討が及ばず，今後の課題とする。

現代非日用的なもののいま一例として，黒岩重吾『新説信太狐』(『歴史ロマン傑作選』第5冊所収）に現れるものを，あげる。作品は，信太妻の伝説の一解釈を小説としたもの。

わし　それがし　そなた　そち　おぬし

あやかし者　なんぼ

申す　(…て，…で）ござる

…おる　…いただく　…くださりませ　…てくだされ

…まする　…とうない　…ぬ　…じゃ　…ぞ

動詞未然形をともなう助詞「ば」　形容詞連用形音便

使用例。安倍保名が妻葛の葉に言ったことば。

「馬鹿な，どうしてわしが，そなたに対し愛をなくそうぞ。わしの眼，鼻，唇，足，それがばらばらに切り放されても，その一つ一つは，世の中のどの男よりも，そなたを愛しようぞ。葛の葉，そちがそれ程申すなら，占の事はあきらめよう」

なお，古代語の影響を考えるためにみた『源氏物語』現代語訳からは現代語らしくない部分がつまりは古代語の流用である，ということがわかった。その，文法的な例。同一格助詞の重複「…に…に」が，現代語として不自然である。

谷崎訳　北山に，某寺という所に，

円地訳　北山に某寺というのがございまして，そこに

与謝野訳　北山の某という寺に

田辺訳　（該当部分欠如）

今泉訳　北山にでございますね，なにがし寺と申します所に，

玉上訳　北山に，何々寺という所に

原文　北山になむ，なにがし寺という所に，（『若紫』から）

『源氏物語』現代語訳についても，検討の対象を会話文にしぼったが，地とともに考察すべきであった。

3.　報告など

資料について未検討の部分が多いが，補助金交付期間に行い得たことの報告として，次の研究報告書を作成した。

古代的言語の享受と創造

Ａ５版　本文47ページ　1986年３月28日　160部

ここでは，『源氏物語若紫』現代語訳諸種と，『歴史ロマン傑作選』収載諸作品とについてのみ，標本集の形で，非現代語の整理を行った。検討したがこの報告書に盛り込むことのできなかったもの，あるいは，未検討のものについては，何らかの手段で，おいおい発表してゆきたい。

また，本研究は，言語研究の本筋の上にあるものではないであろうが，さまざまに展開し得る可能性を持っている。細かくは，上にも今後の課題として触れたように，転訛形や方言形を含む種類の表現ないし文体をもあわせて，言語を総合的にとらえる，という方向で。ややひろげて，本研究で扱った資料を補い，例えば，時代劇のせりふを検討する，という方向で。また，例えば，古典文芸をふまえながらも翻訳ではない，次のような作品を，対象に加える，という方向で。

瀬戸内晴美『中世炎上』（新潮文庫）

大きくは，方言的表現，外国語的表現の観察に進む，という方向で，そうした課題にも，いずれ取り組みたいと思っている。

文献資料と方言分布の対照による語史構成のための基礎的研究

（代表　小林　隆）〈奨励研究(A)〉

〈研究目的〉

語史研究は，これまで文献国語史と言語地理学とが独自に研究を進め，両者の提携が遅れていた。そこで，両者の成果を対照することにより，双方の語史を修正・補強し，さらに両者の統合からなる地理的・位相的・意味的に幅をもった語史を構成する必要があると考えた。しかし，その作業を行うについては，従来，方法論と資料の面で不十分なところがあった。したがって，本研究では，対照における様々な問題点の検討と，資料の収集・整備という基礎的な仕事を目的とした。具体的には，『日本言語地図』（報告30-1～30-6昭和41～49年）所収の項目を中心に，以下の事項を計画した。(1)中央文献からの用例採集，(2)地方文献からの用例採集，(3)関連意味項目の全国調査，(4)以上を基にしての対照における方法論の検討。

〈研究組織〉

小林　　隆　（言語変化研究部第一研究室研究員）

〈研究経過〉

(1)中央文献からの用例の採集

『日本言語地図』所収の項目のうち，主に身体関係語彙と農業関係語彙について，口語性・庶民性の強い文献からの用例の採集・カード化を進めた。

(2)地方文献からの用例の採集

これまで国語学の分野ではほとんど利用されることのなかった江戸時代の農書について，農業関係語彙の調査を行い，用例の採集・カード化を進めた。

(3)関連意味項目の全国調査

この調査が本研究の中心的作業として行ったものであり，少し詳しく経過を述べてみたい。

①調査の目的：『日本言語地図』がかかえる調査項目上の課題の中で，これまでの文献との対照研究において問題となり，新たな調査が望まれるものの一つに意味の関連項目がある。例えば，αの意味の言語地図に見られる語

が，文献ではβの意味で使われているというような意味上の不対応が観察された。こうした現象には，地方あるいは中央における意味変化や意味のゆれが関与していることが考えられ，その点を明らかにするためには，βの意味の方言分布を知ることも必要となってくる。また，文献上ある語がαからβへ意味変化を起こしたとして，これを方言分布の上から確認したいときにも，両方の意味の言語地図が必要とされる。このような意味の関連項目について，全国的な方言分布を調査しようとした。

②調査項目：身体関係項目を中心に，関連意味項目の抽出を行ったが，これはかなりの数にのぼった。次に述べるように通信調査法を用いることもあって，今回は45項目にしぼり，残りは次回以降の調査にまわすこととした。選定した45項目は，以下のとおりである。

- 睫毛，眉（部位としての用法），眉（眉墨としての用法），マミの意味，マミエの意味……以上111図「眉毛」との関連
- 顔面，人相，表情，器量，カオをスタイルの意味で使うか……以上106図「顔」との関連
- 下顎，下顎の先，下顎の脇，下顎の角，上顎，顎全体，歯茎，動物の顎，魚のえら，鶏の蹴爪，歩くことをアグオツルと言うかなど……以上108・109図「顎」，129図「踵」との関連
- 頬骨，へらず口をたたく，余計なおしゃべりをする，カマチとカバチの意味……以上主に107図「頬」，108・109図「顎」との関連
- 膝頭，膝，手首の関節……以上128図「踝」との関連
- そばかす，しみ，ふきでもの，こぶ，いぼ……以上132図「あざ」，133・134図「ほくろ」との関連
- 牛馬のつむじ，山頂，辻……以上102図「つむじ」との関連
- 籾殻，糠，籾殻と糠をまとめてヌカと言うか，麦殻，麩（ふすま），スクモとスクボの意味……以上171図「籾殻」，172図「糠」との関連
- 粃（しいな）
- ぼうふら……180図「かぼちゃ」との関連

• つくつくぼうし（蟬）……244図「つくし」との関連

なお，以上の項目のうち，「ぼうふら」と「つくつくぼうし」は，語形上の関連項目で，同音衝突や類形牽引の現象を見ようとしたものであって，直接意味の関連項目とは関わらない。また，「粃（しいな）」は，農書から知られる近世の方言分布からの変遷を追おうとした項目である。これらの観点に立った項目も抽出したが，今回の調査ではほとんど採用することができず，上の3項目のみを取り入れたにとどまる。

③調査方法：通信調査法を用いた。通信調査法については，前年度，言語変化研究部第一研究室で行った方言研究法に関する基礎的研究「通信調査法の有効性と限界」の成果（一部は，「方言通信調査法の検討」『言語生活』411に報告）を基に，次のような方法を採用した。

まず，質問法はナゾナゾ式で，参考として掲げた俚言形を見ながら自分の俚言を発音通り記入してもらうという方法を主とした。また，内容によっては，共通語形を提示して質問したり，語形や語義を選択肢の中から選び丸をつけてもらう方法を併用した。

次に，調査票の形式としては，葉書形式で数回に分けて発送することはせず，内容を12ページの帳面形式の調査票にまとめ封書で発送した。調査票は「方言記入票」と題し，1ページ目がフェイスシート，2ページ目が記入上の注意，3ページ以降が俚言についての質問と記入欄である。

最後に，協力機関として各市町村の教育委員会に回答者の選定を依頼した。すなわち，「方言記入票」は，まず市町村教育委員会に送り，こちらが指定した条件に合う方に渡して回答してもらうようお願いした。なお，回答者には，調査の趣旨を説明した「方言調査についてのお願い」と切手をはった返信用封筒も同時に渡してもらった。

④調査地点と回答者：調査地点は，全国3,253市町村（昭和60年4月1日現在）のうち1,907市町村を選び，原則として1市町村1人の回答者をお願いした。ただし，面積の広い市町村については，地点を指定し2人以上を選定してもらった場合がある。そのため，記入を求めた回答者の数は，全国で

2,040人となった。市町村の選定にあたっては，なるべく全国まんべんなく等間隔に回答が集まるようなバランスを第一に考えたが，同時に都市部は少なく，山間部は多く地点を選ぶような配慮をした。そうすることで，多少でも古い俚言の採集が可能になると考えたためである。

各教育委員会に選定を依頼した回答者の条件は，次のとおりである。該当市町村内に生まれ育ち，成人してからもほとんど他市町村に出たことのない人。かつ，65歳以上の男性で，回答可能なかぎり高齢の人。

⑤回収状況など：調査票は，昭和61年3月5日に発送し，5日後の3月10日から回収が始まった。2か月を過ぎた5月6日現在の回収率は53%弱である。ですに回収のピークは終わったが，まだ少しずつ戻ってきている。この53%という数字は，実は予想していた回収率をかなり下回る数字であり，今後催促状を出すなどして，もう少し回収率を高めたいと考えている。

なお，回答者とその回答者を選定してくれた教育委員会には，調査協力に対する礼状を送っている。

(4)対照における方法論の検討

この奨励研究以前に進めてきた仕事と，以上の(1)〜(3)の作業をとおして得られた知見を基に，文献資料と方言分布との対照から語史を組み立ててゆく方法について，問題点並びに今後の課題を検討した。内容は，次に発表した。

小林隆「文献国語史と言語地理学の対照による語史構成の方法」

（『国語論究』1　昭和61年5月　明治書院）

〈今後の計画〉

収集した文献の用例を整理するとともに，今後も用例採集を続ける。全国通信調査については，先にも述べたとおり催促状により，もう少し回収率を高めた段階で一応の区切りをつけ，回答を整理する。結果は，全国方言分布図の形にまとめ，文献国語史との対照に用いたいと考える。また，共通語化が急速に進む今日，少しでも古い俚言を採集しておくために，分量の都合で見送った項目についても，引き続き調査を行いたいと希望している。

なお，全国通信調査の概要については，「『日本言語地図』の関連意味項目

の全国調査」(『研究報告集』8，昭和62年3月予定）として，比較的詳しく報告するつもりである。

言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現

（代表　杉戸清樹）〈奨励研究(A)〉

〈研究目的〉

日本語の日常的な言語行動に現れる次の2種類の言語表現類型に注目し，その実態と機能を明らかにすることを目的とする。

(1)言語行動の目的・機能を明示する言語表現――「オ尋ネシマスガ……」「デハ御説明シマス。」「タノムカラ……」など。

(2)言語行動における対人的な配慮を明示する言語表現――「オ忙シイトコロ恐縮デスガ……」「本来ナラバオ目ニカカッテ申上ゲルベキトコロデハゴザイマスガ，オ電話デ失礼シマス。」「オ言葉ヲ返シテナンデスケレド……」など。

(1)は質問・説明・依頼などその言語行動自体の目的や機能を言表し，(2)は状況・媒体・談話規範など言語行動の成立要素にまつわる対人的な配慮を言表する表現である。これらは，言語表現の類型として日常の言語行動の中で大きな比重を占めており，言語表現の明確さや待遇表現的な配慮（改まり，丁寧さ）と深いつながりを持つものと考えられる。本研究では，具体的な言語資料を対象にして，従来ほとんど注目されていないこれら2種類の表現の，言語行動の種類に応じた現れの実態と機能を把握しようとする。

〈研究組織〉

杉戸　清樹　（言語行動研究部第一研究室長）

〈研究経過〉

a．　調査対象とした資料

(1)　公文書・公用文――実際に作成された文書，あらかじめ書式の定められた文書様式，及び公文書の文範類に掲げられた実例。

(2)　個人文学全集に収められた書簡――夏目漱石，森鷗外，志賀直哉，

谷崎潤一郎，永井荷風，亀井勝一郎など。

(3) 書簡文の文範に掲げられた実例——樋口一葉，大町桂月，福澤諭吉など。また，仏教寺院で行われる書簡文の文範も。

(4) 演説・挨拶などの文字化資料——歴代首相，文相の演説集，公用挨拶事典などに所収の演説・挨拶の実例。

b． 資料の整理と分析

(1) 当該の言語表現の各種資料における出現をカード化する作業を進め，計約3,500枚の基礎カードを得た。これをもとにして，当該表現の具体的な出現状況の整理を進めた。

(2) どのような種類の言語行動において出現しやすいか，どのような場面で出現しやすいか，などの観点からの分析を進めた。

(3) 上記についての研究報告は昭和61年度に行う予定である。

c． 関連する研究発表

本研究は昭和59年度まで継続した科学研究費補助金・特定研究(1)『情報化社会における言語の標準化』のうちの「言語行動の規範とその運用の実態」（分担者・杉戸清樹。『年報36』を参照のこと）と内容的に関連させつつ進めた。これに関して以下の研究発表を昭和60年度に行った。執筆はいずれも杉戸。

(1)「文書の定型表現」（『言語生活』昭和60年11月号。筑摩書房）

(2)「公文書のあて名の敬称」（『研究報告集7』〈報告85〉昭和61年3月刊）

日本語教育研修の実施

A 目　　的

日本語教育センター日本語教育指導普及部では，日本語教育の社会的要請に答えるために，専門家としての日本語教員の育成とその資質能力の向上とを目的として，教育研修の機会と場を提供している。本年度も，これまで実施してきた日本語教育長期専門研修，日本語教育特別集中研修，東京・大阪両地での日本語教育夏季研修を実施した。

長期専門研修は，将来，日本語教育の中心となる人材を養成することを目的として，日本語教育の実務及び研究の基礎知識について研修を行うものである。特別集中研修は，緊急に日本語教育の実務に従事しなければならなくなった者に対し，約1か月の短期間に最小限の教授能力を授ける事を目的とする。夏季研修は，日本語教育の研究もしくは実務に現に従事していてその経験が豊かな者のための現職者研修と，経験まだ浅いか全くない者のための初級研修との2種類に分け，日本語教育の内容及び方法について，ごく短期間に研修を行うものである。これらの研修に共通する特色は，研究所の調査・研究の成果を十分に取り入れた研修内容にある。これらの研修によって育成された「研究する教員」は，将来の日本語教育の質的向上に重要な役割を果たすものと思われる。

B 担当者名

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

センター長　南　不二男　　部長　川瀬生郎（60. 9.15まで）　　上野田鶴子（60. 9.16から）　　室長　田中　望　　研究員　石井久雄　　古川ちかし（60.10. 1から）　　研究補助員　早田美智子　　事務補佐員　下羽勝美

C　本年度の経過

I　日本語教育長期専門研修

昭和60年度日本語教育長期専門研修は，昭和60年４月15日より61年２月28日までの約10か月にわたって行った。

1　募集方法及び応募者の資格

本年度は，59年12月23日に案内書を公表し，募集を開始した。案内書を配布したのは，各大学，日本語教育機関，日本語教育関係団体，各都道府県教育委員会など約700機関である。

応募者の資格は，従来どおり，日本語教育又は他の言語教育の経験を有する者については四年制大学卒業以上の学歴をもつこと，経験を有しない者については大学院在学以上の学歴をもつこととした。また，いずれの場合も大学（指導教官）又は日本語教育機関・日本語教育関係団体などからの推薦を求めた。また，機関推薦枠を設け，四年制大学以上の学歴を有し推薦機関の専任教員として昭和58年４月１日に在職していて，それ以後現在に至るまで在職し，かつ，昭和61年４月１日以後在職する予定であることを条件とした。

2　研修生数と選考方法

60年度の有資格応募者は82名であった（機関推薦わく応募７名，一般募集わく75名）。定員は30名であるが，次の選考により，20名の受け入れを決定した。

第一次選考　昭和60年３月４日実施，９日発表。日本語の理解・表現に関する筆記試験。受験者72人，合格者20人。

第二次選考　昭和60年３月11日実施，13日発表。面接（発音・聴解を含む）。受験者20人，合格者20人。

3　研修年間日程

研修日程は次のとおりであった。

昭和60年12月23日　　募集要項配布開始

59年２月13日　　応募締切り

３月４日　　第一次選考（筆記）

３月11日　　第二次選考（面接）

４月15日　　レジストレーション，開講式，第一学期開始

７月19日　　第一学期終了

７月20日より夏季休業

９月９日　　第二学期開始

12月13日　　第二学期終了

12月14日より冬季休業

昭和60年１月14日　　第三学期開始

２月28日　　修了式

４　研修内容

講座名	こま数	講師及び内容（１こま75分）	所属
開講特別講演Ⅰ	1	野元　菊雄	国立国語研究所
開講特別講演Ⅱ	1	南　不二男	国立国語研究所
開講特別講義Ⅰ　表記を中心として			
	1	斎賀　秀夫	国立国語研究所
Ⅱ　文法を中心として			
	1	高橋　太郎	国立国語研究所
Ⅲ　英語を中心として			
	1	上野田鶴子	国立国語研究所
Ⅳ　文章表現を中心として			
	1	田中　　望	国立国語研究所
Ⅴ　意味・用法を中心として			
	1	川瀬　生郎	国立国語研究所
Ⅵ　読解を中心として			
	1	南　不二男	国立国語研究所
（第一学期）			
言語学概論	7	野元　菊雄	国立国語研究所

日本語概説	6	林　　大	
日本語音声学	6	水谷　　修	名古屋大学
現代日本語資料	7	南　不二男	国立国語研究所
日本語文法Ⅰ	7	松本　泰丈	千葉大学
日本語表記法	7	武部　良明	早稲田大学
対照言語学Ⅰ	7	陳　文　芷	日本大学
		菱沼　　透	国立国語研究所
国語学演習	7	石井　久雄	国立国語研究所
日本語教育概論	9	川瀬　生郎	国立国語研究所
日本語教育コースデザイン法	24	田中　望	国立国語研究所
英語教育法	6	M. スタインバーグ	金沢工業大学
教育実習・準備	33		
実習	15日間	日本語教育研究室	

（第二学期）

日本語音声学	8	大坪　一夫	筑波大学
日本語文法Ⅱ	7	南　不二男	国立国語研究所
日本語文法論Ⅲ	8	寺村　秀夫	筑波大学
文法論的文章論	7	永野　　賢	学芸大学
日本語語彙論	6	西尾　寅弥	群馬大学
日本語意味論	7	森田　良行	早稲田大学
海外の日本語研究	6	W. ジャコブセン	ミネソタ大学
日本語教授法	4	木村　宗男	日本語教育学会
言語心理学	6	芳賀　　純	筑波大学
言語教育演習	10	田中　　望	国立国語研究所
論文作成	6	石井　久雄	国立国語研究所

（第三学期）

特別講義

日本語の語彙	2	玉村　文郎	同志社大学
海外の日本語教育	2	椎名　和男	国際交流基金

日本語表現論	2	宮地　裕	大阪大学
表記の教育	2	伊藤　芳照	大阪外国語大学
日本語教育の歴史	2	斎藤　修一	慶応義塾大学
誤用例研究	2	堀口　和吉	天理大学
日本語教育と文学	2	吉田弥寿夫	大阪外国語大学

5　研修生

研修修了者20人（男２人，女18人）及びその修了レポート要旨は次のとおりである。

修了者氏名	性別	年齢	学歴	大学（院）での専攻
修了レポート題目				
赤羽　三千江	女	28	筑波大学大学院地域研究科	
マレーシア人高専留学生向け中・上級読解教材				
猪崎　保子	女	37	筑波大学大学院文芸言語研究科比較文学専攻博士課程	
大学の社会科学系講義の談話分析試論				
市川　智子	女	26	共立女子大学文芸学部英文学コース ウェールズ大学大学院史学科	
待遇表現としてのお世辞と謙遜――「日曜喫茶室」の場合――				
市原　幸江	女	26	筑波大学大学院地域研究科	
学習項目抽出のための談話調査について――その一例――				
内村　彩	女	27	津田塾大学学芸学部国際関係学科	
『中国からの帰国者のための生活聴解教材』の試み				
大越　泰子	女	47	早稲田大学第一文学部国文学専修	
否定の陳述副詞の構文上の位置				
梶井　恵子	女	50	お茶の水女子大学教育学部文学科	
依頼機能の分析――日本語機能分類一覧表作成の第一歩として――				
金田　智子	女	25	広島大学大学院教育学研究科在学中	
中国帰国孤児の子弟に対する算数の読解指導				
来嶋　洋美	女	23	西南学院大学文学部外国語学科	

「福岡市方言のショーとシトー——そのアスペクトと意味——

工藤　節子　女　27　明治大学文学部英米学科

自動詞の語彙的意味傾向——中国語との比較から——

久野　寛之　男　26　北海道大学文学部文学科

日本語の格と格助詞に関する一考察

桑原　憲子　女　35　お茶の水女子大学大学院史学専攻中退

漢字の二字熟語における逆説可能な語の研究

澤　　纓　女　37　東京神学大学大学院神学科組織神学専攻

日本語と韓国語における自称詞・対称詞の比較

新内　康子　女　32　津田塾大学学芸学部英文科

陳述緩和表現の日・英語比較——『ガラスの動物園』の場合——

新間　英世　女　41　中央大学大学院文学研究科仏文学専攻

現代の修辞意識——譬喩表現からみた'80年代の文学的言語感覚

田中　幸子　女　28　上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻

博士課程後期在学中

ゼミにおける報告——談話分析と中級シラバスへの提案——

東井　充子　女　45　大阪外国語大学大学院外国語学研究科ロシア語学

専攻

複合動詞「～きる」と「～はてる」ほか

堀内　みね子　女　33　独協大学外国語学部英語学科

教養番組に現れた縮約形——そのはたらきと指導法の考察——

村岡　英裕　男　27　北海道大学法学部

文章理解過程についての一考察——表現態度としての段落——

岩本(横山)あずさ　女　25　東京学芸大学教育学部中等部教育教員養成課程国語科

「一が～てある」と「一を～てある」

Ⅱ　日本語教育特別集中研修

1　日程及び会場

日程　昭和61年2月3日（月）—2月28日（金）　22日間

午前9時30分～午後4時15分　1日4コマ6時間

会場　国立国語研究所

2　講義題目及び講師

講義題目	時間	講　師	所　　属
日本語概説	3	南　不二男	国立国語研究所
日本語の音声	6	大坪　一夫	筑波大学
日本語の文法Ⅰ	3	上野田鶴子	国立国語研究所
日本語の文法Ⅱ	6	西原　鈴子	お茶の水女子大学
日本語の語彙・意味	6	玉村　文郎	同志社大学
日本語の表現	6	石井　久雄	国立国語研究所
日本語教授法Ⅰ	3	田中　　望	国立国語研究所
日本語教授法Ⅱ	6	古川ちかし	国立国語研究所
日英語対照研究	3	水谷　信子	米加十一大学連合 日本研究センター
欧米人に対する日本語教育	3	高見沢　孟	米国国務省 日本語研究所
オーストラリアの中等教育情報	3	畠　　弘巳	国際商科大学
オーストラリアの日本語教育事情	3	カッケンブッシュ　寛子	オーストラリア国立大学
ニュージーランド日本語教育事情	3	永保　澄雄	国際交流基金
日本語教育研究	60		日本語教育研修室
日本語教育情報収集	3		日本語教育研修室
機関見学	3	高見沢　孟	米国国務省 日本語研修所

3　受講者

中等教育教員派遣事業及び日本・ニュージーランド文化交流促進計画に基づき，文部省学術国際局長の依頼による4人を受講者とした。4人の派遣先，氏名及び所属は次のとおりである。

オーストラリア　　2人　　桜井　　博　東京都立日野台高校
　　岩本　裕州　福岡県立朝倉高校

ニュージーランド　2人　　富所　三郎　群馬県立高崎女子高校

田辺　真人　兵庫県立御影高等学校

Ⅲ　日本語教育夏季研修

1　日程及び会場

東京会場

日程　昭和60年7月22日（月）―7月26日（金）　　5日間

午前9時15分～午後4時15分　　1日4こま6時間

場所　国立国語研究所（東京都北区西が丘三丁目9番14号）

大阪会場

日程　昭和60年7月29日（月）―8月2日（金）　　5日間

午前9時15分～午後4時15分　　1日4こま6時間

場所　大阪府立労働センター（大阪市東区京橋三丁目15番地）

2　講義題目及び講師

次のとおり実施した。講義は一日4こまとし，その配分は

午前　9：30―10：45　　11：00―12：15

午後　13：30―14：45　　15：00―16：15

とした。

現職者研修

講義題目	こま数（1こま90分）	所　属　東京会場講師	所　属　大阪会場講師
書くことと日本語教授法	2	東京外国語大　河原崎幹夫	広島大　奥田　邦男
世界の文字・正書法	2	東京外国語大　橋本萬太郎	京都大　西田　龍雄
日本の文字表記	2	早稲田大　武部　良明	大阪大　前田　富祺
表記の教育の問題点	2	国際基督教大　石田　敏子	大阪外国語大　奥西　峻介
常用漢字	2		

林　　大　　甲南女子大　阪倉　篤義

現代仮名遣い　2

東京大　古田　東朔　　大阪大　宮地　裕

文章構成と作文教育　2

成蹊大　中村　明　　天理大　堀口　和吉

表記から見た読解教育　2

米加十一大学連合　　大阪外国語大　吉田弥寿夫

真田　和子

文字能力とその評価　2

国立国語研　田中　望　　国立国語研　田中　望

書式・符号・記号　1

国立国語研　南　不二男　　国立国語研　南　不二男

初級研修

講義題目　　こま数（1こま90分）

所　属　東京会場講師　　所　属　大阪会場講師

日本語と日本語教育　2

国立国語研　野元　菊雄　　国立国語研　野元　菊雄

教授法　2

慶応大　斎藤　修一　　大阪外国語大　小林　明美

語彙の研究・教育　2

早稲田大　森田　良行　　天理大　大鹿　薫久

表記の研究・教育　2

東京外国語大　伊藤　芳照　　同志社大　玉村　文郎

音声の研究・教育Ⅰ　2

名古屋大　水谷　修　　大阪樟蔭女子大　杉藤美代子

音声の研究・教育Ⅱ　2

名古屋大　土岐　哲　　名古屋大　土岐　哲

国立国語研　相澤　正夫　　大阪外国語大　山本　進

文法の研究・教育Ⅰ　2

日本語教育学会　木村　宗男　　京都府立大　紙谷　栄治

文法の研究・教育Ⅱ　2

筑波大　寺村　秀夫　　大阪外国語大　小矢野哲夫

教材・評価　1

国立国語研　川瀬　生郎　　国立国語研　川瀬　生郎

4　参加者

定員は，現職者研修が東京・大阪各会場40人，初級研修が東京・大阪各会場80人である。応募の資格は次のとおり。

(a), (b) いずれかの条件を満たし，日本語教育機関・日本語教育関係団体又は大学等からの推薦がある者。ただし，参加許可審査に当たっては，条件(a)による者に，条件(b)による者よりも，優先して参加を許可するものとする。

現職者研修

(a)　日本語教育の研究又は実務に現に従事し，又はかつて従事したことがあって，特に本研修の主題を追求しようとする者。

(b)　本研修の初級研修に既に参加していて，現職者研修で一層専門的な知識の充実を図ろうとする者。

初級研修

(a)　日本語教育の研究又は実務に現に従事していて，特に基礎的一般的知識の充実を図ろうとする者。

(b)　大学4年在学以上又はそれに準ずる学歴を有し，日本語教育の研究又は実務について関心がある者。

募集は，昭和60年4月24日（水）―5月8日（水）に行い，参加申し込み書及びレポートの提出を求めた。この書類2件の審査によって，参加の許可・不許可を決定した。応募及び参加許可の概要は次のとおりである。

現職者研修東京会場	これを参加第一希望とする応募	39
	その希望どおりの参加許可	36
	初級研修東京会場への繰入許可	3
	第一希望初級研修東京会場からの繰入許可	6

参加許可合計42

現職者研修大阪会場	これを参加第一希望とする応募	63
	その希望通りの参加許可	48
	第一希望初級研修大阪会場からの繰入許可	5

参加許可合計48

初級研修東京会場	これを参加第一希望とする応募	191
	その希望どおりの参加許可	92
	第一希望現職者研修東京会場からの繰入許可	3

参加許可合計95

初級研修大阪会場	これを参加第一希望とする応募	113
	その希望どおりの参加許可	67
	現職者研修大阪会場からの繰入許可	5

参加許可合計72

5　運営委員会

集中的な研修を円滑にするために，東京・大阪各会場にそれぞれ運営委員を委嘱し，委員及び国立国語研究所日本語教育センター研究員で運営委員会を組織した。研修の運営に関して必要な事項は，運営委員会の決定するところによった。

運営委員及び関係研究員は，次のとおり。

東京会場	東京外国語大学付属日本語学校教授	伊藤　芳照
	日本語教育学会理事	木村　宗男
	慶応義塾大学国際センター教授	斎藤　修一
大阪会場	同志社大学文学部教授	玉村　文郎
	天理大学文学部教授	堀口　和吉
	大阪大学文学部教授	宮地　　裕
	大阪外国語大学教授	吉田弥寿夫
	国立国語研究所	南　不二男
		川瀬　生郎
		田中　　望
		石井　久雄

日本語教育に関する情報資料の収集・提供

A 目　　的

第二言語としての日本語教育を有効に行うために，これまでの国内・国外における日本語研究，日本語教育の実態，及び日本語教育に関する教科書・副教材・視聴覚教材などの情報資料を収集整理し，今後の研究及び教育の参考資料として提供し得るよう整備することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

室長　上野田鶴子（60. 9.15まで）　室長（取扱）　南　不二男（60. 9.16から）　非常勤研究員　小出いずみ（60. 4. 1～61. 3.31）

C 本年度の作業

第二言語としての日本語教育に関する教科書，副教材，辞典及び対照研究に参考となる言語研究・外国語教育に関する文献を収集し，整理した。

一方，日本語教育に用いる文献リストを作成するために，学術雑誌等に掲載の論文及び関連資料のカード化を進め，その一部を内部資料『日本語教育学会誌・機関誌掲載論文等　文献一覧』(1985) にまとめた。収録文献は以下に示す２種の学会誌及び15教育機関の機関誌計27誌に掲載された論文等総計1,745 篇である。

学会誌

1　日本語教育学会『日本語教育』(*Journal of Japanese Teaching*) 1-54 号 (1962—1984)

2　The Association of Teacheres of Japanese (U. S. A.) *Journal of the Association of Teacheres of Japanese* (JATJ) Vols. 1 : 1 - 18 : 2 (1963—

1983)

機関誌

1 『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』1-7 (1978—1984)

2 大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』(*Japanese Language and Culure*) 第1-12号 (1969—1984)

3 慶応義塾大学国際センター『日本語と日本語教育』第1-12号 (1966—1984)

『日本研究』(*The Nihon-Kenkyu*) 第1-3号 (1971—1973)

4 言語文化研究所『日本語教育研究』第1-21号 (1970—1984)

5 『国際学友会日本語学校紀要』第1-8号 (1976—1984)

6 国際基督教大学語学科 *Annual Reports* Vols. 1-9 (1976—1984)

国際基督教大学夏期日本語講座『ICU 夏期日本語講座論集』1 (Bulletin of the ICU Summer Program in Japanese, Vol. 1) (1984)

7 国際交流基金『在中華人民共和国日本語研修センター紀要　日本語教育研究論纂』第1-2集 (1983—1984)

8 国際日本語普及協会 *AJALT* 創刊号 (第1号) —第7号 (1978—1984)

9 国立国語研究所『研究報告集』(Occasional Papers, The National Language Research Institute) 1-5号 (1978—1984)

国立国語研究所日本語教育センター『日本語教育論集』1 (1984)

10 『大東文化大学紀要〈人文科学〉』(*Bulletin of Daito Bunka University* 〈*The Humanities*〉 第1-22号 (1963—1984)

大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』1 (1984)

11 筑波大学文芸・言語学系内　外国人に対する日本語教育プロジェクト『外国人と日本語』1-5 (1976—1980)

筑波大学文芸・言語学系『文芸言語研究　言語篇』1-8 (1977—1984)

筑波大学外国語センター『外国語教育論集』第1-6号 (1980—1984)

筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第1-4号 (1981—1984)

12 『東海大学紀要　留学生教育センター』(*Bulletin of the Foreign Student Education Center, Tokai University*) 1-5号 (1978—1984)

13 『東京外国語大学特設日本語科年報』1-7 (1978—1984)

『東京外国語大学論集』第1-34号 (1951—1984)

東京外国語大学大学院外国語学研究科言語文化研究会『言語文化研究』第1-2号（1983—1984）

14　東京外国語大学附属日本語学校『日本語学校論集』(*Nihongogakko Ronshu*) 1-11号（1974—1984）

15　早稲田大学語学教育研究所『講座日本語教育』第1-20分冊（1965—1984）

なお，このほかに，1984年に刊行された単行本及び学術誌等を対象とし，国立国語研究所の蔵書より日本語教育のための関連文献1582篇を選出し，キーワード検索が可能となるよう「日本語教育文献索引　1984」を整備した。

D　今後の予定

引き続き，文献等の情報資料の収集・整理を行い，提供に備える。

日本語教育教材及び教授資料の作成

A 目　　的

日本語教育における有効適切な教材の開発を目ざして，モデル教材を作成し，また教授上の参考に供するために，日本語教育の基礎知識に関する教授資料を刊行する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長　南不二男　　部長　川瀬生郎（60. 9.15まで）　　上野田鶴子（60. 9.16より）　室長　日向茂男　　研究員　中道真木男　　文部技官　清田　潤

C 本年度の作業

1.　日本語教授資料の作成

日本語教育指導参考書シリーズの一つとして，下記参考書を編集・刊行した。印刷部数600部のうち500部を全国の主要な日本語教育機関等に配布した。別に大蔵省印刷局の手により市販された。

題名　『語彙の研究と教育（下）』（日本語教育指導参考書13）

執筆者　玉村文郎（同志社大学教授）

規格等　A 5 版　185ページ

2.　日本語教育映画関連資料の作成

日本語教育映画基礎編の関連文字教材資料を企画・作成した。これらは昭和58年度に作成完了した「日本語教育映画　基礎編」全30巻を教育の場で有効に利用するために企画した教授者及び学習者むけの教材・資料であり，前年度に作成した教材・資料に続くものである。その題名及び規格等は，次の

とおりである。

イ．　題名及び内容

○日本語教育映画　基礎編　総合語彙表（30巻分・全1冊）

映画30巻に現れたすべての語を一覧表にし，そこに使用文例をすべて配列した。使用文例には，「シナリオ集」と対応できるように付加情報をつけた。

ロ．　規格等

B5版　228ページ

企画・編集・発行　国立国語研究所

印刷　　日本シネセル株式会社

上記の教材資料は内部資料として600部印刷し，うち500部を全国の主要な日本語教育機関に配布する予定である。別に，上記印刷社の手により市販された。

3.　日本語教育映画解説書の作成

既作成日本語教育映画解説基礎編2巻を内部資料として各600部刊行した。その題名等は以下のとおりである。

日本語教育映画解説基礎編

第18巻「よみせを　みに　いきたいです」――意志・希望の表現――

第22巻「あそこに　のぼれば　うみがみえます」――条件の表現1―

4.　日本語教育映画ワークショップの開催

日本語教育指導普及事業の一環として，日本語教育映画基礎編30巻の効果的な利用をめぐり，昭和60年8月30日（金），31日（土）の二日間にわたって，国立国語研究所講堂においてワークショップを開催した。参加者は第1日約90人，第2日目約70人であった。所外から14人の講師を依頼し，次の内容について発表と討議を行った。

昭和60年8月30日（金）

あいさつ　　野元菊雄（国立国語研究所長）

進行説明・連絡事項　日向茂男（日本語教育教材開発室長）

〈映画企画委員による解説と講師による実践報告〉

映画企画にたずさわって　　木村宗男（日本語教育学会）

日本語教育映画の位置づけ　　石田敏子（国際基督教大学）

学習者の反応からみた映像教材ビデオとその利用　　伴　紀子
（南山大学）

使用報告１――名古屋大学で――　　藤原雅憲（名古屋大学）

使用報告２――早稲田大学で――　　川口義一（早稲田大学）

〈公募報告　教材としての長所と限界〉

日本語教育映画に何を求めるのか　　佐々木倫子（静岡大学）

教授者向けアンケートの提案　　石沢弘子（海外技術者研修協会）

使用報告３――国際学友会で――　　中込明子（国際学友会）

使用報告４――所沢センターで――
斎藤百合子（中国帰国孤児定着促進センター）

〈公募報告　発展的に使うために〉

映画を素材とした生活文化紹介ビデオ　　伊豆山敦子（日本女子大学）

映画を素材とした練習ビデオ　　中野泰子（元・アジア学生文化協会）

学生迎合型の使用法　　杉山太郎

コースディザインの提案　　ピロッタ丸山淳
（国際キリスト教青年交換計画）

〈グループ討議〉

- テーブルＡ「使用報告をめぐって」
- テーブルＢ「映画への提言とアンケートをめぐって」
- テーブルＣ「映画と生活文化情報をめぐって」
- テーブルＤ「教案をめぐって」

〈グループ討議報告〉

昭和60年８月31日（土）

〈報　告〉

視聴覚教材関連資料　　岩田保雄（学習研究社）

〈グループ討議〉

（テーブル分けは前日と同様）

〈グループ討議報告〉

〈まとめ〉

閉会あいさつ　　南不二男（日本語教育センター長）

D　今後の予定

引き続き『日本語教育指導参考書』『日本語教育映画解説』等について原稿作成，刊行を行う。

「日本語教育映画ワークショップ」の発表内容を刊行する。

日本語教育映画の現場での利用効果を上げることを目的として，「日本語教育教材開発のための調査研究」（95ページ参照）の成果を応用し，教授者向け参考資料，学習者向け教材資料を作成提供する。

国語辞典編集に関する準備調査

A 目　　的

国語辞典編集の具体的計画を定め，編集の準備，用例採集の実験的試行を行う。

B 担 当 者

国語辞典編集準備室

主幹　飛田良文　　書記　高梨信博

C これまでの経過

昭和52年度末，国語辞典編集準備委員会を設け，国語辞典の編集について，辞典の種類・規模・その他編集実行上の可能性・手順・体制などの検討を始めた（「国語辞典覚書」参照)。54年度からは調査員を委嘱し国語辞典編集準備室を開設した。また，国語辞典編集準備調査会を設け，国語辞典編集の具体的計画を定めるための準備及び用例採集の実験的試行を開始した。成果としてまとまったものは次のとおりである。

諸外国における大辞典（国語辞典編集準備資料　1）

現代語用例辞典の構想―用例採集法を中心にして（同6）

用例採集のための主要文学作品目録（同2）

用例採集のための主要雑誌目録（同3）

用例辞典編集作業のために（一），（二）（同5－1，5－2）

用語総索引作成のための電算機利用方式（同7）

スカウト式用例採集の手引き（同8）

用例採集のためのベストセラー目録（同4）

また，前年度から科学研究費（一般研究A「国定読本の用語の研究」研究代表者

飛田良文）を得て，編集の準備調査を充実させることができた。（別項参照）

D　本年度の作業

Ⅰ　国語辞典編集準備調査員の委嘱

本年度は，辞典編集の準備及び用例採集の実験のため，下記の調査員を委嘱した。

加藤　信明	(60. 4. 1～61. 3.31)	上智大学大学院生
木村　睦子	(60. 4. 1～61. 3.31)	計量計画研究所言語情報研究室主任研究員
見坊　豪紀	(60. 4. 1～61. 3.31)	元国立国語研究所第三研究部長
林　　大	(60. 4. 1～61. 3.31)	国立国語研究所名誉所員
瀧本　典子	(60. 4. 1～61. 3.31)	国学院大学大学院生
中田恵美子	(60. 4. 1～61. 3.31)	東京都立大学大学院生

Ⅱ　国語辞典編集準備調査会の開催

調査会の委員には所外委員11人，所内委員８人を委嘱した。

（所外委員）

菅野　　謙	日本放送協会文化調査研究所放送用語研究班主任研究員
見坊　豪紀	元国立国語研究所第三研究部長
阪倉　篤義	甲南女子大学教授
佐藤喜代治	フェリス女学院大学客員教授
惣郷　正明	朝日新聞社社友
田島　　宏	明治大学教授
林　　大	国立国語研究所名誉所員
松井　栄一	株式会社尚学図書顧問
馬渕　和夫	中央大学教授
山田　俊雄	成城大学教授
頼　　惟勤	お茶の水女子大学教授

（所内委員）

川瀬　生郎	日本語教育指導普及部長（昭和60年９月15日まで）
高梨　信博	言語変化研究部第二研究室研究員

高橋　太郎　　言語体系研究部長
中野　　洋　　言語計量研究部第一研究室長
野村　雅昭　　言語計量研究部長
飛田　良文　　言語変化研究部長
南　不二男　　日本語教育センター長
宮島　達夫　　言語体系研究部第二研究室長

調査会は２回開催し，下記の議題について検討した。

第１回　昭和60年12月18日

(1)『国定読本用語総覧』の解説について

(2)　中国の辞書について

第２回　昭和61年３月26日

(1)　昭和61年度計画について

(2)　漢字辞典の試み

(3)　その他

Ⅲ　国語辞典編集準備室の作業

①用例採集法の実験

〔A〕手作業による採集法（総索引方式）の実験

第２期国定読本『尋常小学読本』（明治42～43）について，集計カードの作成と『国定読本用語総覧２』の原稿作成作業（用例カードの複写・見出しの記入・注記の記入）を行った。

この作業は，飛田良文・高梨信博・加藤信明・見坊豪紀・瀧本典子・中田恵美子・林大が担当した。

〔B〕手作業による採集法（スカウト方式）の実験

夏目漱石の『坊っちゃん』を調査対象としたスカウト方式による採集実験の結果を分析し，『スカウト方式による用例採集の実験的試行』（仮題）として原稿の執筆を完了した。この分析及び執筆は見坊豪紀が担当した。

②国定読本の用語の研究（科学研究費の項参照）

③『国定読本用語総覧１』の刊行

用語総覧(1)の本文原稿を三省堂に渡し，校正作業・解説の執筆・付録の作成を行った。昭和60年11月25日，国語辞典編集資料１『国定読本用語総覧１』として三省堂から25,000円で刊行した。用語総覧(1)の後記に記した見出し語数・用例数に誤りがあったので訂正する。

見出し語数	3,864
参照見出し数	812
空見出し数	25
用例数	32,409

この作業を担当したのは，飛田良文，高梨信博，林大，見坊豪紀，中田恵美子，加藤信明，瀧本典子である。

解説は飛田良文が執筆し，付録は高梨信博が作成した。

④国定読本第１期「尋常小学読本」の用語統計

②の科学研究費の報告書作成に伴い，『国定読本用語総覧１』の見出し語（空見出し，参照見出しを除く）によって使用度数順と五十音順の用語統計表を作成したので報告しておく。

使用度数順用語統計表（国定読本第１期）

No.	度数	異なり語数	累積異なり語数	累積延べ語数	(%)
1	1562	1	1	1562	(4.82)
2	1505	1	2	3067	(9.46)
3	1449	1	3	4516	(13.93)
4	1176	1	4	5692	(17.56)
5	1126	1	5	6818	(21.04)
6	1111	1	6	7929	(24.46)
7	1008	1	7	8937	(27.57)
8	787	1	8	9724	(30.00)
9	601	1	9	10325	(31.86)
10	557	1	10	10882	(33.58)
11	413	1	11	11295	(34.85)
12	389	1	12	11684	(36.05)
13	339	1	13	12023	(37.10)

14	304	1	14	12327	(38.03)
15	265	1	15	12592	(38.85)
16	250	1	16	12842	(39.62)
17	238	1	17	13080	(41.36)
18	224	1	18	13304	(41.05)
19	213	1	19	13517	(41.71)
20	203	1	20	13720	(42.33)
21	199	1	21	13919	(42.95)
22	198	1	22	14117	(43.56)
23	184	1	23	14301	(44.13)
24	176	2	25	14653	(45.21)
25	162	1	26	14815	(45.71)
26	158	1	27	14973	(46.20)
27	146	1	28	15119	(46.65)
28	143	2	30	15405	(47.53)
29	124	1	31	15529	(47.91)
30	122	1	32	15651	(48.29)
31	118	1	33	15769	(48.65)
32	108	1	34	15877	(48.99)
33	106	1	35	15983	(49.32)
34	104	1	36	16087	(49.64)
35	101	1	37	16188	(49.95)
36	100	2	39	16388	(50.56)
37	99	1	40	16487	(50.87)
38	97	2	42	16681	(51.47)
39	95	1	43	16776	(51.76)
40	94	1	44	16870	(52.05)
41	91	1	45	16961	(52.33)
42	88	1	46	17049	(52.60)
43	87	1	47	17136	(52.87)
44	82	1	48	17218	(53.13)
45	76	2	50	17370	(53.59)
46	75	1	51	17445	(53.83)
47	74	1	52	17519	(54.05)
48	71	1	53	17590	(54.27)
49	70	1	54	17660	(54.49)
50	69	3	57	17867	(55.13)
51	67	1	58	17934	(55.33)
52	66	1	59	18000	(55.54)

53	65	1	60	18065	(55.74)
54	58	2	62	18181	(56.10)
55	57	1	63	18238	(56.27)
56	52	3	66	18394	(56.75)
57	51	1	67	18445	(56.91)
58	49	1	68	18494	(57.06)
59	48	2	70	18590	(57.36)
60	47	4	74	18778	(57.94)
61	44	1	75	18822	(58.07)
62	43	1	76	18865	(58.21)
63	42	2	78	18949	(58.47)
64	41	2	80	19031	(58.72)
65	40	1	81	19071	(58.84)
66	39	5	86	19266	(59.44)
67	38	2	88	19342	(59.68)
68	37	2	90	19416	(59.91)
69	35	3	93	19521	(60.23)
70	34	2	95	19589	(60.44)
71	33	2	97	19655	(60.64)
72	32	6	103	19847	(61.24)
73	31	3	106	19940	(61.52)
74	30	3	109	20030	(61.80)
75	29	4	113	20146	(62.16)
76	28	2	115	20202	(62.33)
77	27	8	123	20418	(63.00)
78	26	6	129	20574	(63.48)
79	25	8	137	20774	(64.10)
80	24	9	146	20990	(64.76)
81	23	5	151	21105	(65.12)
82	22	10	161	21325	(65.80)
83	21	7	168	21472	(66.25)
84	20	8	176	21632	(66.74)
85	19	10	186	21822	(67.33)
86	18	14	200	22074	(68.11)
87	17	18	218	22380	(69.05)
88	16	17	235	22652	(69.89)
89	15	14	249	22862	(70.54)
90	14	16	265	23086	(71.23)
91	13	27	292	23437	(72.31)

92	12	43	335	23953	(73.91)
93	11	37	372	24360	(75.16)
94	10	39	411	24750	(76.37)
95	9	37	448	25083	(77.39)
96	8	62	510	25579	(78.92)
97	7	73	583	26090	(80.50)
98	6	106	689	26726	(82.46)
99	5	134	823	27396	(84.53)
100	4	176	999	28100	(86.70)
101	3	352	1351	29156	(89.96)
102	2	740	2091	30636	(94.53)
103	1	1773	3864	32409	(100.00)

使用度数順用語統計表からは，上位８語で30パーセント，39語で50パーセント，93語で60パーセント，249語で70パーセント，583語で80パーセントとなることが明らかになった。

使用度数25以上の137語を列挙すると次のとおりである。

番号	見出し	度数	番号	見出し	度数
1	は（助）	1562	20	の（準助）	203
2	て（助）	1505	21	この〔此〕（連体）	199
3	の（格助）	1449	22	なり（助動）	198
4	に（格助）	1176	23	その〔其〕（連体）	184
5	ます（助動）	1126	24	と（並助）	176
6	を（助）	1111	25	もの〔物〕（名）	176
7	た（助動）	1008	26	から（格助）	162
8	が（格助）	787	27	ひと〔人〕（名）	158
9	だ（助動）	601	28	たり（助動）〈完了〉	146
10	と（格助）	557	29	よう〔様〕（形状）	143
11	いう〔言〕（動）	413	30	ん（助動）〈打消〉	143
12	も（助）	389	31	くる〔来〕（動）	124
13	ある〔在〕（動）	339	32	など（助）	122
14	いる〔居〕（動）	304	33	いく〔行〕（動）	118
15	こと〔事〕（名）	265	34	これ〔此〕（代）	108
16	です（助動）	250	35	くに〔国〕（名）	106
17	なる〔成〕（動）	238	36	や（並助）	104
18	する〔為〕（動）	224	37	と（接助）	101
19	で（助）	213	38	そして（接）	100

39	たいそう〔大層〕(副)	100
40	また〔又〕(接)	99
41	ござる〔御座〕(動)	97
42	ところ〔所〕(名)	97
43	あり〔在〕(動)	95
44	か(終助)	94
45	たり(助)	91
46	とき〔時〕(名)	88
47	う(助動)	87
48	き〔木〕(名)	82
49	できる〔出来〕(動)	76
50	へ(助)	76
51	みる〔見〕(動)	75
52	から(接助)	74
53	おる〔居〕(動)	71
54	が(接助)	70
55	それ〔其〕(代)	69
56	ば(接助)	69
57	わが〔我〕(連体)	69
58	でる〔出〕(動)	67
59	ひ〔日〕(名)	66
60	いま〔今〕(名)	65
61	うち〔内〕(名)	58
62	なか〔中〕(名)	58
63	より(助)	57
64	いえ〔家〕(名)	52
65	おとうさん〔御父〕(名)	52
66	わたくし〔私〕(代)	52
67	たくさん〔沢山〕(代)	51
68	よい〔良〕(形)	49
69	おもう〔思〕(動)	48
70	ない〔無〕(形)	48
71	ある〔或〕(連体)	47
72	はな〔花〕(名)	47
73	ほう〔方〕(名)	47
74	また〔又〕(副)	47
75	ず(助動)	44
76	こしらえる〔拵〕(動)	43
77	もの〔者〕(名)	42
78	よく〔良〕(副)	42
79	がっこう〔学校〕(名)	41
80	みず〔水〕(名)	41
81	は〔葉〕(名)	40
82	うみ〔海〕(名)	39
83	しまう〔仕舞〕(動)	39
84	つぎ〔次〕(名)	39
85	みえる〔見〕(動)	39
86	れる(助動)	39
87	さく〔咲〕(動)	38
88	やま〔山〕(名)	38
89	にて(助)	37
90	べし(助動)	37
91	とり〔鳥〕(名)	35
92	とる〔取〕(動)	35
93	まで(助)	35
94	ちち〔父〕(名)	34
95	にっぽん〔日本〕(地名)	34
96	だんだん〔段段〕(副)	33
97	ほか〔外〕(名)	33
98	こども〔子供〕(名)	32
99	はは〔母〕(名)	32
100	まえ〔前〕(名)	32
101	まつ〔松〕(名)	32
102	もう(副)	32
103	わたくしども〔私共〕(代)	32
104	こたろう〔小太郎〕(人名)	31
105	みんな〔皆〕(副)	31
106	り(助動)	31
107	いち〔一〕(課名)	30
108	え〔絵〕(名)	30
109	つく〔付〕(動)	30
110	うえ〔上〕(名)	29
111	ぐんかん〔軍艦〕(名)	29
112	つかう〔使〕(動)	29
113	ふる〔降〕(動)	29
114	がいこく〔外国〕(名)	28
115	きしゃ〔汽車〕(名)	28
116	あの〔彼〕(連体)	27

117	かえる〔帰〕(動)	27	128	ほど(助)	26
118	ここ〔此処〕(代)	27	129	みなさん〔皆〕(名)	26
119	しかし(接)	27	130	おかあさん〔御母〕(名)	25
120	たろう〔太郎〕(人名)	27	131	きく〔聞〕(動)	25
121	ばくふ〔幕府〕(名)	27	132	きれい〔奇麗〕(形状)	25
122	ふたり〔二人〕(名)	27	133	しる〔知〕(動)	25
123	むら〔村〕(名)	27	134	てんのう〔天皇〕(名)	25
124	して(助)	26	135	に〔二〕(課名)	25
125	だす〔出〕(動)	26	136	ふね〔舟〕(名)	25
126	ない(助動)	26	137	よろこぶ〔喜〕(動)	25
127	なく〔鳴〕(動)	26			

五十音順用語統計表(国定読本第1期)

	異なり語数	(%)		異なり語数	(%)		異なり語数	(%)		異なり語数	(%)
あ	165	4.27	た	195	5.05	ま	90	2.33			
い	169	4.37	ち	72	1.86	み	63	1.63			
う	103	2.66	つ	86	2.23	む	31	0.80	わ	52	1.35
え	27	0.70	て	64	1.66	め	36	0.93	を	3	0.08
お	294	7.61	と	147	3.80	も	55	1.42	ん	3	0.08
計	758	19.61	計	564	14.59	計	275	7.12	計	58	1.50
か	216	5.59	な	100	2.59						
き	124	3.21	に	97	2.51						
く	80	2.07	ぬ	14	0.36	や	42	1.09			
け	46	1.19	ね	19	0.49	ゆ	41	1.06			
こ	211	5.46	の	39	1.01	よ	54	1.40			
計	677	17.52	計	259	7.00	計	137	3.54			
さ	146	3.78	は	121	3.13	ら	10	0.26			
し	280	7.24	ひ	99	2.56	り	22	0.57			
す	74	1.91	ふ	89	2.30	る	3	0.08			
せ	74	1.91	へ	30	0.78	れ	10	0.26			
そ	65	1.68	ほ	68	1.76	ろ	36	0.93			
計	639	16.53	計	407	10.53	計	81	2.10			

五十音順用語統計表からは，「お」と「し」の文字を語頭にもつ用語が最も多く，行別に見ると，「あ」行が最高で，か行・さ行・た行に属する語の多いことが知られる。なお，この五十音順用語統計表は，普通の国語辞典と比較できるように，濁音・半濁音が語頭にくる場合，清音の仮名に合併してある。この成果は国立国語研究所研究発表会で飛田良文が「国定読本の用語」という題目で報告した。

⑤国語辞典編集準備資料の印刷

本年度は，編集の完了した，国語辞典編集準備資料別冊『国語辞典編集準備室所蔵見坊文庫目録』（昭和61年3月19日）を印刷した。

見坊文庫は，昭和57年，見坊豪紀委員から御寄贈いただいた文献の目録で，内容は，辞書(83点)，研究書(34点)，資料図書〈一般〉(30点)，同〈シナリオ〉(75点)，雑誌（169点)，新聞（10点）計401点からなる。

目録の編集には，飛田良文・高梨信博・瀧本典子が当った。

母語別日本語学習辞典の編集

A　目　　的

日本語学習者には，それぞれの母国語によって解説を加えた学習辞典が必要不可欠である。現在，中級用のものが特に不足しているため，各国語別の中級用日本語学習辞典を編集する。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長　南不二男　　部長　川瀬生郎（60. 9.15まで）　　上野田鶴子（60. 9.16より）　　室長　日向茂男　　研究員　中道真木男　　文部技官　清田　潤　　第三研究室長　正保　勇

C　本年度の作業

1.　母語別日本語学習辞典編集委員会の開催

会議を２回開催し，編集上の全般的諸問題について検討を行うとともに，翻訳専門委員会の討議内容報告を受けて翻訳上の諸問題の検討を行った。この委員会には，所外委員10人所内委員10人を委嘱した。

（所外委員）

窪田　富男　（東京外国語大学教授）
倉持　保男　（慶応義塾大学教授）
斎藤　修一　（慶応義塾大学教授）
佐々木重次　（東京外国語大学教授）
柴田　紀男　（天理大学助教授）
玉村　文郎　（同志社大学教授）
冨田　隆行　（亜細亜大学助教授）

西尾　寅弥　（大妻女子大学教授）

松山　　納　（国際大学教授）

山田　正春　（国際交流基金日本研究部日本語課長，60．8.29まで）

松原　直路　（国際交流基金日本研究部日本語課長，60．8.30より）

（所内委員）

南　不二男　（日本語教育センター長）

川瀬　生郎　（日本語教育指導普及部長，60．9.15まで）

日向　茂男　（日本語教育教材開発室長）

中道真木男　（日本語教育教材開発室研究員）

高田　　誠　（日本語教育センター第一研究室長）

上野田鶴子　（日本語教育センター第二研究室長，60．9.16より日本語教育指導普及部長）

正保　　勇　（日本語教育センター第三研究室長）

菱沼　　透　（日本語教育センター第四研究室長）

田中　　望　（日本語教育センター日本語教育研修室長）

高橋　太郎　（言語体系研究部長）

2.　母語別日本語学習辞典翻訳専門委員会の開催

インドネシア語への翻訳上の諸問題を検討するため，会議を3回開催し，翻訳校閲・母語話者校閲の内容をはじめとする具体的な問題を討議して編集委員会への助言を行った。この専門委員会には所外委員5人，所内委員4人を委嘱した。

（所外委員）

石井　和子　（東京外国語大学非常勤講師，60.10．1より同大学講師）

佐々木重次　（東京外国語大学教授・母国別日本語学習辞典編集委員）

柴田　紀男　（天理大学助教授・母語別日本語学習辞典編集委員）

高殿　良博　（亜細亜大学講師）

トルセノ　A．S．　（拓殖大学助教授）

（所内委員）

南　不二男　（日本語教育センター長）

川瀬　生郎　（日本語教育指導普及部長，60. 9.15まで）

上野田鶴子　（日本語教育指導普及部長，60. 9.15から）

日向　茂男　（日本語教育教材開発室長）

正保　　勇　（日本語教育センター第三研究室長）

3.　和文原稿のインドネシア語への翻訳

第1期翻訳分4,000項目のインドネシア語への翻訳作業を行った。翻訳作業は次の各氏に依頼した。

太田デウィ，粕谷俊樹，左藤正範，舟田京子，松野明久，ジョンジョン・ジョハナ，スリー・カダルシ

なお，和文原稿の最終点検とインドネシア語版向けの原稿調整のため，引き続き以下の客員研究員を委嘱した。

ウィン・カルジョ　（東京外国語大学外国人教師）

佐々木重次　（東京外国語大学教授・母語別日本語学習辞典編集委員・母語別日本語学習辞典翻訳専門委員）

高殿　良博　（亜細亜大学講師・母語別日本語学習辞典翻訳専門委員）

畠　　郁　（聖ヨゼフ日本語学院講師）

プラウィラヌガラ・ファリッド　（日本放送協会非常勤職員）

4.　インドネシア語翻訳原稿の校閲

59年度に作成した「翻訳校閲要領」に基づき，校閲を実施した。作業は次の各氏に依頼した。

石井　和子　　石田　規子　　エディ・ヘルマワン　　崎山　理　　佐々木重次

柴田　紀男　　高殿　良博

5.　インドネシア語翻訳原稿の母語話者による校閲

前年度に作成した「母語話者校閲要領」に基づき，インドネシア語として自然な訳文を得るための内容修正を行った。作業は次の各氏に依頼した。

エディ・ヘルマワン　　エミリアーナ・チャンドラ　　ジョンジョン・ジョハナ

ジョンニ・ラスマダ・フタバラット　　K.S.スディアルタ　　スリー・カダルシ　　ダルシマ・マンダ　　トルセノ．A.S.

D　今後の予定

母語別日本語学習辞典編集委員会・翻訳専門委員会を引き続き開催するほか，インドネシア語版第1期分4,000語について，母語話者による訳文の最終校閲並びに記述形式の最終調整を行う。

図書の収集と整理

前年度に引き続き，研究所の調査研究活動に必要な研究文献及び言語資料を収集，整理し，利用に供した。

また，例年のとおり，各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和60年度に受け入れた図書及び逐次刊行物の数並びに蔵書累計は，次のとおりである。

図書

受入　2,642冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和書	1,111	285	256	544	2,196
洋書	299	12	135	0	446
計	1,410	297	391	544	2,642

蔵書数　72,564冊（61. 3. 31）

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入　793種

	購入	寄贈	計
和	51	666	717
洋	55	21	76
計	106	687	793

庶　務　報　告

I　庁舎及び経費

1. 庁　舎

所　在　東京都北区西が丘３丁目９番14号

敷　地		10,030㎡
建　物		
第一号館	(延)	5,719㎡
(管理部門・講堂・図書館・日本語教育センター)		
第二号館	(延)	3,015㎡
(研究部門)		
第三号館	(延)	238㎡
(会議室・その他)		
第一資料庫	(延)	213㎡
第二資料庫		106㎡
その他付属建物	(延)	330㎡
計	(延)	9,621㎡

2. 経　費

昭和60年度予算額

人件費	(422,536,000円)
	422,536,000円
事業費	(212,881,000円)
	219,119,000円
合　計	(635,417,000円)
	641,655,000円

※上段カッコ内は補正後予算額，下段は当初予算額を示す。

Ⅱ　評議員会（昭和61年３月31日現在）

会長	有光　次郎	副会長	佐藤喜代治 (再任61. 2.15・61. 3.12就任)
	碧海　純一 (再任61. 2.15)		大岡　　信 (新任61. 2.15)
	何　　初彦		加藤　秀俊
	倉沢　栄吉		小金沢　一
	小山　弘志 (新任61. 2.15)		坂井　利之
	阪倉　篤義 (再任61. 2.15)		笹沼　澄子 (再任61. 2.15)
	鈴木　孝夫 (新任61. 2.15)		高橋　英夫
	外山滋比古 (新任61. 2.15)		服部謙太郎
	林　　大		肥田野　直 (再任61. 2.15)
	山田　年栄		頼　　惟勤 (再任61. 2.15)

Ⅲ　組織と職員

1.　定員　74名

2.　組織及び職員名

国立国語研究所	所　　長	野元　菊雄	60.11. 1～11.21 言語体系研究部長事務代理 61. 3.16～ 3.29 外国出張（フランス，ドイツ連邦共和国　文部省）
庶務部	部　　長	新山　忠弘	61.1.15 辞職
	〃	足立昭二郎	61.1.16 愛知教育大学庶務部長から転任 61.3.16～3.29 所長事務代理
庶務課	課　　長	大内　　登	
	課長補佐	菊地　　貞	
	(併)庶務係長	〃	
		荒川佐代子	
	事務補佐員	神戸　恭子	(60. 4. 1～61. 3.30)
	図書主任	大塚　通子	
		沢木喜美子	
	人事係長	井上　政和	

		山本　昌博	61. 2.16～ 3.31 文部省社会教育局婦人教育課に併任
会計課	課　　長	根本　栄夫	60. 4.1 国立婦人教育会館庶務課長から転任
	〃	吉池　孝道	60. 4.1 東京国立博物館総務部管理課長に配置換
	課長補佐	山本　光夫	
	(併)総務係長	〃	
	総務主任	岩田　茂男	60.10.1 庶務部会計課総務係から昇任
	経理係長	土佐南洋夫	
		高田　洋一	
	事務補佐員	大屋由美子	(60. 4. 1～61. 3.30)
	用度係長	木村　権治	
		三浦　　篤	
		千葉　直樹	
		浅香　忠雄	
	技能補佐員	青山　幸子	(60. 4. 1～61. 3.30)
言語体系研究部	部　　長	高橋　太郎	60.11. 1～11.21 海外研修（中華人民共和国）
第一研究室	室　　長	村木新次郎	
	主任研究官	工藤　　浩	
		鈴木美部代	
第二研究室	室　　長	宮島　達夫	
		高木　　翠	
言語行動研究部	部　　長	渡辺　友左	
第一研究室	室　　長	杉戸　清樹	60. 6. 8～60.30 海外研修（ドイツ連邦共和国）
		塚田実知代	
第二研究室	室　　長	江川　　清	
	主任研究官	米田　正人	60. 7.1研究員から昇任
		礒部よし子	
		早田美智子	
第三研究室	室　　長	神部　尚武	
	主任研究官	高田　正治	

言語変化研究部	部　長	飛田　良文	
第一研究室	室　長	佐藤　亮一	
	主任研究官	沢木　幹栄	
		小林　隆	
		白沢　宏技	
	非常勤研究員	W.A.グロータス	(60. 4. 1～61. 3.31)
第二研究室	室　長	梶原滉太郎	
		高梨　信博	
		中山　典子	
		田原　圭子	文献調査室
		伊藤　菊子	〃
		中曽根　仁	〃
言語教育研究部	部　長	村石　昭三	60.8.11～8.14 まで海外研修(大韓民国)
第一研究室	(取) 室 長	村石　昭三	
		島村　直己	
		茂呂　雄二	60.8.11～8.14 まで海外研修(大韓民国)
		川又瑠璃子	
言語計量研科部	部　長	野村　雅昭	60. 4. 1 第二研究室長から昇任
第一研究室	室　長	中野　洋	
		山崎　誠	
		石井　正彦	60. 9. 1 第二研究室から配置換
		小沼　悦	60. 9. 1 第二研究室から配置換
第二研究室	室　長	靏岡　昭夫	60. 4. 1 主任研究官から昇任
	主任研究官	佐竹　秀雄	
		沢村都喜江	60. 9. 1 第三研究室から配置換
第三研究室	室　長	斎藤　秀紀	
	主任研究官	田中　卓史	60. 8.17～ 9. 2まで 海外研修（アメリカ合衆国）
		米田　純子	
		小高　京子	

日本語教育センター	センター長	南　不二男	
第一研究室	室　長	高田　誠	60. 6.8～6.30 まで海外研修（ドイツ連邦共和国）
		相沢　正夫	
第二研究室	（取）室長	南　不二男	60. 9.16 から室長事務取扱
	非常勤研究員	小出いずみ	(60. 4. 1～61. 3.31)
第三研究室	室　長	正保　勇	
第四研究室	室　長	菱沼　透	61. 3.31 辞職
日本語教育指導普及部	部　長	上野田鶴子	60.9.16 日本語教育センター第二研究室長から昇任
	〃	川瀬　生郎	60.9.16 東京大学留学生教育センター教授に転任
日本語研育研修室	室　長	田中　望	
	主任研究官	石井　久雄	60. 7. 1 研究員から昇任
		古川ちかし	60.10. 1 採用
	併　任	早田美智子	
	事務補佐員	下羽　勝美	(60. 4. 1～61. 3.30)
	非常勤研究員	大坪　一夫	(60. 4. 1～61. 3.31)
日本語教育教材開発室	室　長	日向　茂男	
		中道真木男	
		清田　潤	
（国語辞典編集準備調査員）	非常勤研究員	加藤　信明	(60. 4. 1～61. 3.31)
	〃	木村　睦子	〃
	〃	見坊　豪紀	〃
	〃	滝本　典子	〃
	〃	中田恵美子	〃
	〃	林　大	〃
（日本語教育センター客員研究員）	〃	佐々木重次	〃
	〃	川瀬　生郎	(60.10. 1～61. 3.31)
	〃	高殿　良博	〃
	〃	畠　郁	〃
	〃	ウインカルジョ	(60. 4. 1～61. 3.31)

	プラウイラヌガラファリッド	(60. 4. 1〜61. 3.31)

3. 名誉所員

西尾　実（初代所長　昭35.1.22退職　昭54.4.16 死去）

大石初太郎（元第一研究部長　昭43.3.31 退職）

輿水　実（元第二研究部長　昭45.3.31 退職　昭61.3.5 死去）

岩淵悦太郎（2代所長　昭51.1.16 退職　昭53.5.19 死去）

芦沢　節（前言語教育研究部長　昭53.4.1 退職）

飯豊　毅一（前言語変化研究部長　昭57.4.1 退職）

林　大（3代所長　昭57.4.1 退職）

大久保　愛（前言語教育研究部第一研究室長　昭58.4.1 退職）

斎賀　秀夫（前言語計量研究部長　昭60.3.31 退職）

Ⅳ　昭和60年度事業

1. 刊行書

研究報告集7（報告85）　〈秀英出版刊〉

社会変化と敬語行動の標準（報告86）　〈秀英出版刊〉

中学校教科書の語彙調査（報告87）　〈秀英出版刊〉

日独仏西基本語彙対照表（報告88）　〈秀英出版刊〉

国定読本用語総覧 1　第1期〔あ〜ん〕
『尋常小学校読本』明治37年度以降使用
（国語辞典編集資料——1）　〈三省堂刊〉

国語年鑑（昭和60年版）　〈秀英出版刊〉

国立国語研究所年報 —36—（昭和59年度）　〈秀英出版刊〉

2. 日本語教育関連教材

語彙の研究と教育（下）日本語教育指導参考書13　〈大蔵省印刷局刊〉

日本語教育映画基礎編　総合語彙表

日本語教育映画解説18

「よみせを　みに　いきたいです」　　—意志・希望の表現—

日本語教育映画解説22

「あそこに　のぼれば　うみがみえます」　—条件の表現1—

3.　国立国語研究所研究発表会

昭和61年3月15日（土）午後2時～4時30分

あいさつ	野　元　菊　雄
読みの眼球運動と読みの過程	神　部　尚　武
現代東京語のアクセント —1万3千語を調査して—	佐　藤　亮　一
国定読本の用語 —国定読本の用語総覧1をめぐって—	飛　田　良　文

4.　日本語教育研修（128ページ参照）

日本語教育長期専門研修（昭和59年4月16日～昭和60年3月1日）

日本語教育夏季研修（現職者研修・初級研修）

東京会場　昭和59年7月23日～7月27日

大阪会場　昭和59年7月30日～8月3日

日本語教育特別集中研修（昭和60年2月4日～昭和60年3月1日）

V　外国人研究員及び内地留学生の受入れ

1.　外国人研究員

氏名・国籍・職名	研究題目	研究期間
アルパトフ　V・M （ソ連） ソ連科学アカデミー研究員	現代標準日本語文法	59. 9. 5から 60. 7. 4まで
顧　明耀 （中華人民共和国） 西安交通大学講師 外国語学部日本語研究室主任	日本語の研究—中国人の目で見た日本語の語彙と文法—	59. 12. 25から 60. 12. 25まで

申　英慧 （中華人民共和国） 北京大学東方言語文学系日本語研究室講師	「日本語の助詞・助動詞」と「日本語教育法」	59. 12. 21から 60. 10. 4まで
郭　勝華 （中華人民共和国） 北京大学東方言語文学系日本語研究室講師	中国人学生に対する日本語教育の特徴について	60. 1. 14から 61. 1. 13まで
鄭　美満 （台湾）	中国人の日本語学習における日本語教育の特徴について	60. 5. 13から 60. 8. 31まで
リチャードズーバー （フランス） フランス国立科学研究センター研究員	非肯定文と日本語の助詞	60. 6. 24から 60. 11. 23まで
ウエスリーエムジャコブセン（米国） ミネソタ大学東洋学部助教授	日本語の動詞について	60. 8. 18から 61. 8. 17まで
クワッケンブッシュヒロコ（オーストラリア） オーストラリア国立大学アジア学部日本センター準教授	社会言語学的にみた日本語の外来語の発音	60. 8. 20から 61. 2. 28まで
呂　玉新 （中華人民共和国） 中国上海衛生職工学院外語部教師	中日言語の比較	61. 1. 6から 62. 1. 5まで
エツコオバタ・ライマン（日本） アリゾナ州立大学準教授	国字の歴史的様相とその現状及び将来	61. 1. 16から 61. 8. 31まで

2.　内地留学生

氏　名	勤務・職名	研究題目	研究期間
竹内　弘元	長野県伊那郡弥生ケ丘高等学校教諭	国語教育における主として言語面の研究	61. 2. 1から 61. 3. 31まで

3.　外国人来訪者見学者等

1985. 4. 3	ザールランド大学情報科学部教授	Harald. H. Timmermaun	
4. 19	北京大学東方言語文学学部日本語科教師・法政大学交換研究員	李　強	
〃	日本語助手	陳　力　衛	

5. 15	大連外国語学院・院長	刘 和 民
〃	〃 日語系教師	嘎 日 廸
〃	〃 〃	初 玉 麟
〃	対外経済貿易大学教員	于 吟 梅
〃	〃 日本語教研室副主任	張 紀 浔
5. 29	国際関係研究所教授	S. V. Neverov 夫妻
6. 18	国立オーストラリア大学教授	Antonio Alfonso
7. 22	日語学習与研究編韓部訪日団一行	団長宋文軍氏他4名
9. 7	天津市師範大学外国語学部助教授	孫 盛 寧
9. 9	チュービンゲン大学・総長	Adolf Theis
9. 17	ミュンスター大学教授	Franz Hundsnurscher
10. 25	群馬大学教育学部学生 15名	
〃	中国日本語教師訪日団一行	団長趙麗君他9名
11. 15	中国文字改革委員会	周有光氏他4名
12. 9	〃 日本語教師	顧海根氏他9名
〃	ソウル大学 語学研究所・所長	趙 俊 学
〃	東京外国語大学客員教授	康 仁 善
2. 26	中国日本語講師短期研修会一行	王 福祥氏他32名
3. 10	上海外国語学院副教授	王 宏

Ⅵ 日 記 抄

1985. 4. 15	日本語教育センター長期専門研修開講式	
5. 23	第44回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議総会（23～24）（学士会館）	
25	第36回文部省所管研究所事務(部)長会議総会（学士会館）	
30	昭和60年度国立学校等経理部課長会議（東京医科歯科大）	
7. 2	文化庁施設等機関庶務会計部課長会議（東海大校友会館）	
3	職員健康診断	
8	昭和60年度第1回母語別学習辞典翻訳専門委員会	
9	将来計画検討委員会設置	

16　昭和60年度第1回日本語教育センター運営委員会

19　第108回国立国語研究所評議員会

23　昭和60年度第1回日本語教育映画等企画協議会

22　日本語教育夏季研修（初級，現職者　東京会場）（22〜26）

29　〃　（〃　〃　大阪会場）（29〜8/2）

8. 2　昭和60年度文部省共済組合実施監査

30　日本語教育映画ワークショップ開催（30〜31）

13　文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議第2分科会
（京大東南アジア研究センター）

10. 8　昭和60年度第1回母語別学習辞典編集委員会

24　昭和60年度文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議
（第3部会）（歴博）

11. 8　昭和60年度文部省所轄研究所等所長会議（特殊研）

15　第36回文部省所轄研究所第三部会事務(部)長会議
（奈文研）（15〜16）

26　昭和60年度第2回母語別学習辞典翻訳専門委員会

30　昭和60年度第1回日本語教育研究連絡協議会

12. 18　昭和60年度第1回国語辞典編集準備調査会

20　創立記念日　記念講演　小川　芳男評議会

1986. 2. 12　中国帰国者に対する日本語指導者研修会（文化庁主催）（12〜13）

14　昭和60年度日本語教育研究協議会，日本語教育機関連絡
協議会（東日本地区）（文化庁主催）

18　昭和60年度第2回母語別学習辞典編集委員会

26　文化庁施設等機関次長等幹部会議（都道府県会館）

28　日本語教育長期専門研修閉講式

3. 7　文化庁施設等機関長会議（文部省）

11　昭和60年度第3回母語別学習辞典翻訳専門委員会

12　第109回国立国語研究所評議員会

14　昭和60年度第2回日本語教育センター運営委員会

15　国立国語研究所研究発表会

24　昭和60年度第２回日本語教育研究連絡協議会

26　昭和60年度第２回国語辞典編集準備調査会

昭和61年12月

国 立 国 語 研 究 所

〒115　東京都北区西が丘3—9—14
電話東京 (900) 3111(代表)

UDC　058 : 809.56
NDC　810.5

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	2,000円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	品切れ
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	〃
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	〃
7	入門期の言語能力	〃	〃
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学年の読み書き能力	〃	〃
15	明治初期の新聞の用語	〃	〃
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型 (1) ——対話資料による研究——	〃	2,000円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字 (1) ——総記および語彙表——	〃	3,000円
22	現代雑誌九十種の用語用字 (2) ——漢字表——	〃	3,000円

23	話しことばの文型 (2) ——独語資料による研究——	秀英出版刊	2,000円
24	横組みの字形に関する研究	〃	品切れ
25	現代雑誌九十種の用語用字 (3) ——分　析——	〃	3,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	品切れ
27	共通語化の過程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	〃
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本言語地図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
	日本言語地図 (1) 〈縮刷版〉	〃	17,000円
30-2	日本言語地図 (2)	〃	品切れ
	日本言語地図 (2) 〈縮刷版〉	〃	17,000円
30-3	日本言語地図 (3)	〃	品切れ
	日本言語地図 (3) 〈縮刷版〉	〃	17,000円
30-4	日本言語地図 (4)	〃	品切れ
	日本言語地図 (4) 〈縮刷版〉	〃	17,000円
30-5	日本言語地図 (5)	〃	品切れ
	日本言語地図 (5) 〈縮刷版〉	〃	17,000円
30-6	日本言語地図 (6)	〃	品切れ
	日本言語地図 (6) 〈縮刷版〉	〃	17,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	品切れ
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	〃
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究（II） ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	〃
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	〃
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	〃
38	電子計算機による新聞の語彙調査（II）	〃	〃

39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	秀英出版刊	品切れ
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	6,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	4,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	〃	900円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電子計算機による国語研究(Ⅵ)	〃	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言語使用の変遷(1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
54	電子計算機による国語研究(Ⅶ)	〃	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	品切れ
56	現代新聞の漢字	〃	6,000円
57	比喩表現の理論と分類	〃	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究(Ⅷ)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 ——フォネーム研究序説——	〃	2,500円
61	電子計算機による国語研究(Ⅸ)	〃	品切れ
62	研究報告集(1)	〃	1,700円
63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,000円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	2,000円

65	研究報告集 (2)	秀英出版刊	3,000円
66	幼児の語彙能力	東京書籍刊	8,000円
67	電子計算機による国語研究（X）	秀英出版刊	1,500円
68	専門語の諸問題	〃	4,000円
69	幼児・児童の連想語彙表	東京書籍刊	6,800円
70-1	大都市の言語生活——分析編——	三省堂刊	7,800円
70-2	大都市の言語生活——資料編——	〃	12,000円
71	研究報告集 (3)	秀英出版刊	4,800円
72	幼児・児童の概念形成と言語	東京書籍刊	6,800円
73	企業の中の敬語	三省堂刊	9,500円
74	研究報告集 (4)	秀英出版刊	4,200円
75	現代表記のゆれ	〃	2,700円
76	高校教科書の語彙調査	〃	5,000円
77	敬語と敬語意識 ——岡崎における20年前との比較——	三省堂刊	8,000円
78	日本語教育のための基本語彙調査	秀英出版刊	6,000円
79	研究報告集 (5)	〃	4,200円
80	言語行動における日独比較	三省堂刊	8,000円
81	高校教科書の語彙調査 (2)	秀英出版刊	5,000円
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	〃	5,000円
83	研究報告集 (6)	〃	4,200円
84	方言の諸相——『日本言語地図』検証調査報告——	三省堂刊	9,800円
85	研究報告集 (7)	秀英出版	4,000円
86	社会変化と敬語行動の標準	〃	9,000円
87	中学校教科書の語彙調査	〃	5,000円
88	日独仏西基本語彙対照表	〃	8,500円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目（昭和17～24年）	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査——現代新聞用語の一例——	〃	〃

3	送り仮名法資料集	秀英出版刊	品切れ
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	〃
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	4,300円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,800円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査（中間報告）	〃	品切れ
9	牛店雑談 安愚楽鍋用語索引	〃	1,500円
10-1	方言談話資料(1) ——山形・群馬・長野——	〃	6,000円
10-2	方言談話資料(2) ——奈良・高知・長崎——	〃	6,000円
10-3	方言談話資料(3) ——青森・新潟・愛知——	〃	6,000円
10-4	方言談話資料(4) ——福井・京都・島根——	〃	6,000円
10-5	方言談話資料(5) ——岩手・宮城・千葉・静岡——	〃	6,000円
10-6	方言談話資料(6) ——鳥取・愛媛・宮崎・沖縄——	〃	6,000円
10-7	方言談話資料(7) ——老年層と若年層との会話——	〃	6,000円
10-8	方言談話資料(8) ——老年層と若年層との会話——	〃	6,000円
11	日本言語地図語形索引	大蔵省印刷局刊	1,500円

国語辞典編集資料

1	国定読本用語総覧１ ——第１期（あ～ん）——	三省堂刊	25,000円

言語処理データ集

1	高校教科書 ——文脈付き用語索引——	日本マイクロ写真	35,000円

国立国語研究所研究部資料

幼児のことば資料(1)	秀英出版刊	3,800円
幼児のことば資料(2)	〃	3,800円
幼児のことば資料(3)	〃	6,000円
幼児のことば資料(4)	〃	6,000円
幼児のことば資料(5)	〃	6,000円
幼児のことば資料(6)	〃	6,000円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	〃
3	ことばの研究 第3集	〃	〃
4	ことばの研究 第4集	〃	1,300円
5	ことばの研究 第5集	〃	1,300円

日本語教育教材

日本語と日本語教育 ——発音・表現編——	国立国語研究所 文化庁共編	大蔵省印刷局刊	700円
日本語と日本語教育 ——文字・表現編——		〃	850円
日本語の文法（上） ——日本語教育指導参考書4——		〃	450円
日本語の文法（下） ——日本語教育指導参考書5——		〃	550円
日本語教育の評価法 ——日本語教育指導参考書6——		〃	700円
中・上級教授法 ——日本語教育指導参考書7——		〃	500円
日本語の指示詞 ——日本語教育指導参考書8——		〃	500円
日本語教育基本語彙七種 比較対照表 ——日本語教育指導参考書9——		〃	1,000円
日本語教育文献索引 ——日本語教育指導参考書10——		〃	1,400円
談話の研究と教育 I ——日本語教育指導参考書11——		〃	550円
語彙の研究と教育（上） ——日本語教育指導参考書12——		〃	600円
語彙の研究と教育（下） ——日本語教育指導参考書13——		〃	700円

国立国語研究所年報　秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	8	昭和31年度	品切れ
2	昭和25年度	〃	9	昭和32年度	〃
3	昭和26年度	160円	10	昭和33年度	〃
4	昭和27年度	160円	11	昭和34年度	〃
5	昭和28年度	品切れ	12	昭和35年度	〃
6	昭和29年度	200円	13	昭和36年度	160円
7	昭和30年度	品切れ	14	昭和37年度	220円

15	昭和38年度	250円	27	昭和50年度	700円
16	昭和39年度	品切れ	28	昭和51年度	非売
17	昭和40年度	〃	29	昭和52年度	〃
18	昭和41年度	300円	30	昭和53年度	800円
19	昭和42年度	300円	31	昭和54年度	1,200円
20	昭和43年度	品切れ	32	昭和55年度	1,300円
21	昭和44年度	〃	33	昭和56年度	1,300円
22	昭和45年度	〃	34	昭和57年度	2,000円
23	昭和46年度	450円	35	昭和58年度	2,200円
24	昭和47年度	品切れ	36	昭和59年度	2,700円
25	昭和48年度	〃	37	昭和60年度	
26	昭和49年度	600円			

国語年鑑　秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和45年版	1,500円
昭和30年版	〃	昭和46年版	2,000円
昭和31年版	〃	昭和47年版	2,200円
昭和32年版	〃	昭和48年版	2,700円
昭和33年版	〃	昭和49年版	3,800円
昭和34年版	〃	昭和50年版	3,800円
昭和35年版	〃	昭和51年版	4,000円
昭和36年版	〃	昭和52年版	品切れ
昭和37年版	〃	昭和53年版	〃
昭和38年版	〃	昭和54年版	〃
昭和39年版	〃	昭和55年版	〃
昭和40年版	〃	昭和56年版	〃
昭和41年版	〃	昭和57年版	5,500円
昭和42年版	〃	昭和58年版	5,500円
昭和43年版	〃	昭和59年版	5,800円
昭和44年版	〃	昭和60年度	5,800円

昭和61年度　　7,800円

高校生と新聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ
国立国語研究所三十年のあゆみ ——研究業績の紹介——		秀英出版刊	1,500円

日本語教育映画基礎編一覧

（各巻16ミリカラー，5分，日本シネセル社販売）

巻	題名	制作年度（昭和）
ユニット 1		
1*	これは　かえるです——「こそあど」＋「は～です」——	49
2*	さいふは　どこにありますか——「こそあど」＋「～がある」——	49
3*	やすくないです，たかいです——形容詞——	49
4*	きりんは　どこにいますか ——「いる」「ある」——	51
5*	なにを　しましたか ——動詞——	50
ユニット 2		
6*	しずかな　こうえんで ——形容動詞——	50
7*	さあ，かぞえましょう ——助数詞——	50
8*	どちらが　すきですか ——比較・程度の表現——	52
9*	かまくらを　あるきます ——移動の表現——	51
10*	もみじが　とても　きれいでした ——です，でした，でしょう——	52
ユニット 3		
11*	きょうは　あめが　ふっています ——して，している，していた——	52
12*	そうじは　してありますか ——してある，しておく，してしまう——	53
13*	おみまいに　いきませんか ——依頼・勧誘の表現——	53
14*	なみのおとが　きこえてきます ——「いく」「くる」——	53
15*	うつくしい　さらに　なりました ——「なる」「する」——	50
ユニット 4		

16* みずうみのえを かいたことが ありますか ——経験・予定の表現—— 54
17* あのいわまで およげますか ——可能の表現—— 54
18* よみせを みに いきたいです ——意志・希望の表現—— 54
19* てんきが いいから さんぽを しましょう ——原因・理由の表現—— 55
20* さくらが きれいだそうです ——伝聞・様態の表現—— 55
ユニット 5
21* おけいこを みに いっても いいですか ——許可・禁止の表現—— 56
22* あそこに のぼれば うみがみえます ——条件の表現1—— 56
23 いえが たくさんあるのに とてもしずかです ——条件の表現2—— 56
24 おかねを とられました ——受身の表現1—— 51
25 あめに ふられて こまりました ——受身の表現2—— 55
ユニット 6
26 このきっぷを あげます ——やり・もらいの表現1—— 57
27 にもつを もって もらいました ——やり・もらいの表現2—— 57
28 てつだいを させました ——使役の表現—— 57
29* よく いらっしゃいました ——待遇表現1—— 58
30* せんせいを おたずねします ——待遇表現2—— 58

販 売 価 格

	16㎜カラー	VTRカラー(¾インチ)	VTRカラー(½インチ)
全巻セット	¥720,000	¥480,000	¥384,000
各ユニット	¥112,500	¥ 75,000	¥ 60,000
各 巻	¥ 30,000	¥ 20,000	¥ 16,000

第1巻〜第3巻は文化庁との共同企画

* については日本語教育映画解説の冊子がある。

日本語教育映画 関連教材・資料(〈株〉ビスコ販売)

日本語教育映画 基礎編 教師用マニュアル	(全6分冊)	各分冊 1,000円
日本語教育映画 基礎編 練習帳	(全6分冊)	〃 500円
日本語教育映画 基礎編 シナリオ集	(全 1 冊)	1,000円
日本語教育映画 基礎編 総合語彙表	(全 1 冊)	1,500円

1985 — 1986
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword
Outline of Research Projects from April 1985 to March 1986
A Descriptive Study of Modern Japanese Grammar
A General Survey of Modern Japanese Vocabulary
A General Survey of Modern Japanese Honorifics
A Contrastive Study on the Variations of Language Behavior between Various Social Groups
Fundamental Study for Analysis of Verbal Behavior System
Information Processing in Visual Pattern Perception and Reading
A Study of the Physiological Process of Japanese Pronunciation through Dynamic Palatography
A Nation-Wide Survey of the Grammatical Features of the Dialects
Fundamental Study of Dialect Survey Methods
Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji Period
A Study of the Origin and the Source of Vocabulary in Present-day Japanse
A Research into Children's Language Acquisition
Fundamental Study for Automatic Word Count System by Computer
A Study of Writing in Modern Japanese
Fundamental Study of Language Data Processing by Computer
Contrastive Linguistic Studies of Japanese
A Study of Valency of Japanese Verbs
A Contrastive Study of Speech Acts in Japanese and English
Contrastvie Studies in Japanese and Indonesian
Contrastive Linguistic Studies in Japanese and Chinese
A Contrastive Study of Anaphoric Phenomena for Japanese Language Teaching
Fundamental Survey of Language Tests Administered at Domestic Japanese Language Education Institutes
A Study of the Current State of Japanese Language Teaching
——Contents and Methodology——

Others
General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO